鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（31）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 II

（伊集院IC～市来IC）

# 一ノ谷遺跡

（日置郡伊集院町）

2001年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

龍泉窯系青磁皿

# 序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）建設に伴い，平成８年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した一ノ谷遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡の調査によって，中世や近世～近代にかけての遺構・遺物が発見されました。

なかでも，中世の中国製磁器や近世の肥前系磁器・薩摩焼などの遺物は，本県における陶磁器類の生産・消費の実態を考える上で貴重な資料を提供するものと考えています。

本書が地域の歴史研究や文化財の啓発・普及の一助として，多くの方々に活用していただけることを願っています。

なお，この発掘調査を実施するにあたって，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所や地元の皆様に多大なご協力と文化財に対する深いご理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成13年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

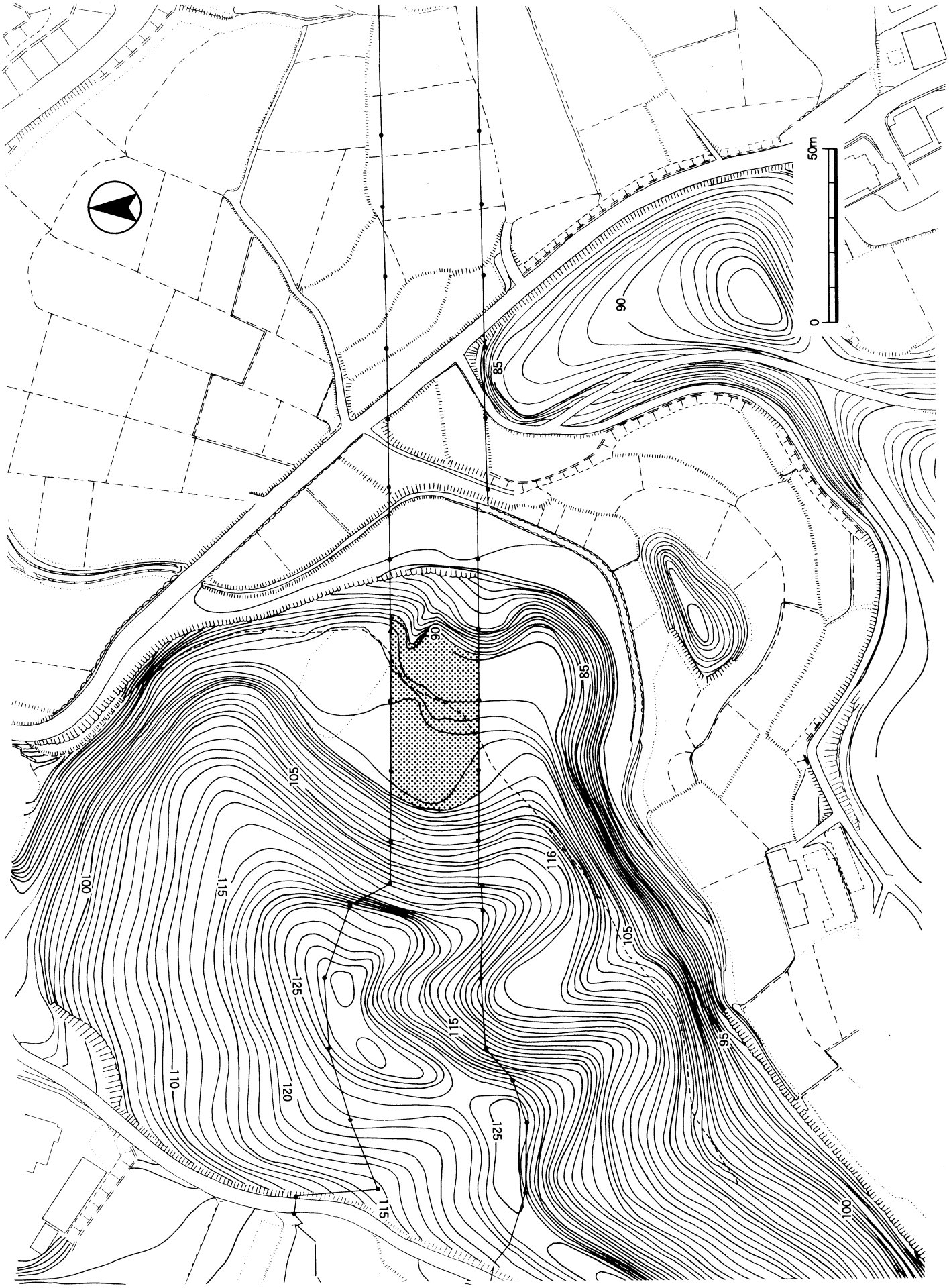
所長　井上明文

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | いちのたに　いせき |
| 書名 | 一ノ谷遺跡 |
| 副書名 | 南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| 巻次 | Ⅱ |
| シリーズ名 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | ３１ |
| 編集者名 | 三垣恵一・桑波田武志 |
| 編集機関 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒899-5652　鹿児島県姶良郡姶良町平松６２５２番地　TEL 0995-65-8787 |
| 発行年月日 | 平成１３年３月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一ノ谷遺跡（いちのたにいせき） | 鹿児島県日置郡（かごしまけんひおきぐん）<br>伊集院町下谷口（いじゅういんちょうしもたにぐち）<br>字一ノ谷（あざいちのたに） | 463639 | 30-90 | 31°36′56″ | 130°24′11″ | 確認調査<br>19961002<br>～<br>19961007<br>全面調査<br>19961008<br>～<br>19961115 | 1,250㎡ | 南九州西回り自動車道鹿児島道路建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一ノ谷遺跡 | 生活跡 | 中世～近世<br>近世～近代 | 古道　１条<br>掘立柱建物跡　２軒<br>溝状遺構　３条<br>土坑　６基<br>ピット　26基 | 五輪塔群および残欠<br>染付<br>青磁<br>染付<br>薩摩焼<br>土師器<br>青銅製品<br>鉄製品　等 | 景徳鎮窯系<br>龍泉窯系 |




第1図　一ノ谷遺跡地形図

# 例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路建設（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）に伴う一ノ谷遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　一ノ谷遺跡の名称は，これまで本平遺跡と呼称してきたものを，小字名に従って，改称したものである。旧呼称の本平遺跡は，伊集院町管内遺跡分布地図の31－28，31－29に所在する。

3　発掘調査は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所）の受託事業として，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。調査にあたって，石塔については南九州古石塔研究会会長　河野治雄氏の指導を受けるとともに，玉稿をいただいた。

4　整理および報告書作成作業は，平成11年度に県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜絶対高である。

6　遺物番号はすべて通し番号であり，本文および挿図，図版のものと一致する。

7　出土遺物については，佐賀県立九州陶磁文化館資料係長　家田淳一氏の指導を得た。

8　発掘調査におけるの遺構・遺物の実測，写真撮影は主として桑波田武志が，整理作業における遺構・遺物の実測，トレース等は三垣恵一が中心に行った。遺物写真の撮影については，県立埋蔵文化財センター　鶴田靜彦・横手浩二郎の協力を得た。

9　本書の執筆は三垣と桑波田が分担して行い，編集は三垣が行なった。

10　遺物について，器類・器種・器形などの分類は「江戸遺跡やきもの分類」（『四谷三丁目遺跡』報告書別冊』　1991年　東京消防庁新宿区四谷三丁目遺跡調査団）を参考にし，地域性も加味して行った。また，染付や陶器の釉薬，胎土の色調については，客観性をもたせるため『新版標準土色帖（2000年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を参考にした。

11　遺物は鹿児島県立県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する。

# 目　　次

序文
報告書抄録
例言

第Ⅰ章　調査の経過（鹿児島道路伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）…… 2
　第１節　調査に至るまでの経緯と経過 …… 2
　第２節　確認調査の経過と概要 …… 2

第Ⅱ章　一ノ谷遺跡の発掘調査 …… 6
　第１節　調査に至るまでの経緯と経過 …… 6
　第２節　調査の組織 …… 6
　第３節　調査の経過 …… 7

第Ⅲ章　遺跡の位置および環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 9
　第３節　周辺遺跡 …… 10

第Ⅳ章　発掘調査 …… 15
　第１節　遺跡の層位 …… 15
　第２節　調査の概要 …… 17
　第３節　検出遺構 …… 17
　　1　掘立柱建物跡 …… 20
　　2　土坑 …… 22
　　3　溝状遺構 …… 24
　　4　古道および五輪塔残欠 …… 24
　　5　焼土域 …… 24
　　6　五輪塔群 …… 25
　第４節　出土遺物 …… 26
　第５節　まとめにかえて …… 53
　付　篇　一ノ谷遺跡の五輪塔群について（南九州古石塔研究会会長　河野治雄）…… 56

# 挿　図　目　次

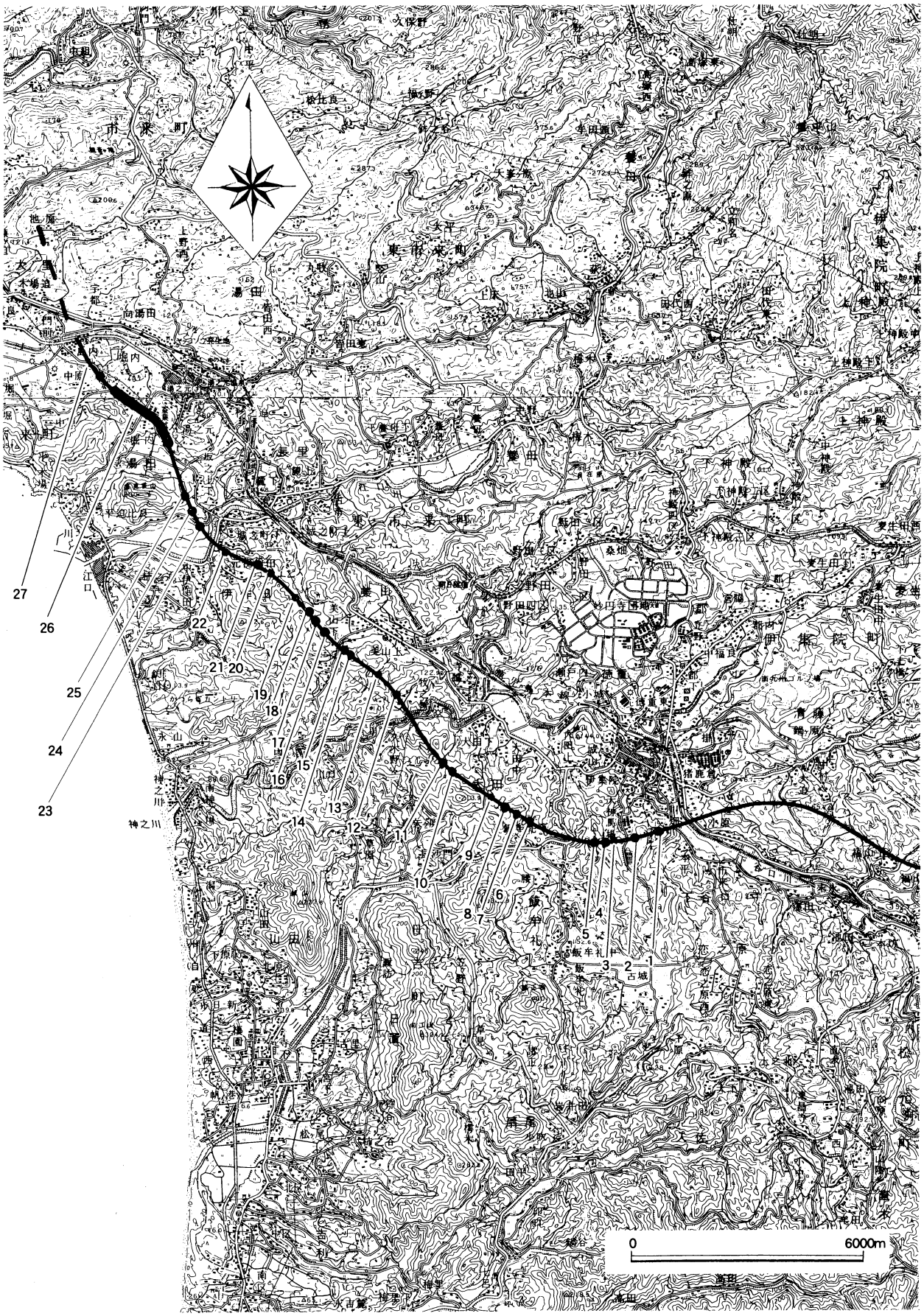

第１図　一ノ谷遺跡地形図
第２図　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）遺跡位置図 …… 1
第３図　周辺遺跡分布図 …… 11
第４図　一ノ谷遺跡土層図 …… 14
第５図　土層模式図 …… 15
第６図　確認トレンチ配置図 …… 16
第７図　一ノ谷遺跡グリッド配置図 …… 18
第８図　遺構位置図 …… 19
第９図　掘立柱建物跡１ …… 20
第10図　掘立柱建物跡２ …… 21
第11図　土坑１ …… 22
第12図　土坑２ …… 23
第13図　古道および五輪塔残欠 …… 24
第14図　染付１（小坏・小碗） …… 27
第15図　染付２（中碗１） …… 28
第16図　染付３（中碗２） …… 29
第17図　染付４（中碗３） …… 30
第18図　染付５（小皿１） …… 33
第19図　染付６（小皿２・火入・蓋物・蓋） …… 34
第20図　染付７（小鉢・仏花瓶） …… 35
第21図　中国製磁器（染付・青磁） …… 35
第22図　陶器１（甕） …… 37
第23図　陶器２（摺鉢１） …… 38
第24図　陶器３（摺鉢２） …… 39
第25図　陶器４（摺鉢３・捏鉢） …… 40
第26図　陶器５（植木鉢・壺） …… 41
第27図　陶器６（碗・皿・土瓶類・その他） …… 43
第28図　陶器７・土師器・瓦器・瓦 …… 44
第29図　金属製品・その他 …… 46
第30図　石器（砥石・打製石鏃） …… 47
第31図　五輪塔模式図 …… 56

# 表　目　次

第１表　南九州西回り自動車道鹿児島道路
（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧 …… 5
第２表　周辺遺跡地名表（１）…… 12
第３表　周辺遺跡地名表（２）…… 13
第４表　掘立柱建物跡１計測表 …… 20
第５表　掘立柱建物跡２計測表 …… 21
第６表　五輪塔群観察表 …… 25
第７表　出土遺物一覧表 …… 26
第８表　出土遺物観察表（染付その１）…… 48
第９表　出土遺物観察表（染付その２）…… 49
第10表　出土遺物観察表（中国製磁器）…… 49
第11表　出土遺物観察表（陶器その１）…… 49
第12表　出土遺物観察表（陶器その２）…… 50
第13表　出土遺物観察表（陶器その３）…… 51
第14表　出土遺物観察表（土師器）…… 51
第15表　出土遺物観察表（瓦器・瓦）…… 51
第16表　出土遺物観察表（青銅製品）…… 52
第17表　出土遺物観察表（鉄製品）…… 52
第18表　出土遺物観察表（その他）…… 52
第19表　出土遺物観察表（石器）…… 52
第20表　石塔所在地地名表（１）…… 57
第21表　石塔所在地地名表（２）…… 58

# 図　版　目　次

図版１　五輪塔群 …… 59
図版２　土層断面・掘立柱建物跡１完掘状況 …… 60
図版３　五輪塔残欠出土状況・土坑２ …… 61
図版４　土坑２断面・土坑２完掘状況 …… 62
図版５　染付１（小坏・小碗） …… 63
図版６　染付２（中碗） …… 64
図版７　染付３（中碗・小鉢・仏花瓶） …… 65
図版８　染付４(中碗・大碗) …… 66
図版９　染付５（小皿） …… 67
図版10　染付６(小皿・火入・蓋類)・中国製染付 …… 68
図版11　陶器１（甕） …… 69
図版12　陶器２（摺鉢） …… 70
図版13　陶器３（摺鉢・捏鉢） …… 71
図版14　陶器４（摺鉢・捏鉢） …… 72
図版15　陶器５（壺・植木鉢） …… 73
図版16　陶器６（碗・その他） …… 74
図版17　陶器７（蓋・土瓶・その他） …… 75
図版18　陶器８・土師器・瓦器・瓦 …… 76
図版19　金属製品器・その他 …… 77




第2図　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）遺跡位置図

# 第Ⅰ章　調査の経過（鹿児島道路伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）

## 第１節　調査に至るまでの経緯と経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成３年６月に伊集院インターチェンジと市来インターチェンジ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地および確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・緊急発掘調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度から平成12年度にかけて，各年度計画的かつ継続して各遺跡の確認調査および緊急発掘調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお，事業区間内の確認調査の経過と概要については，以下の通りである。

## 第２節　確認調査の経過と概要

１　一　ノ　谷…鹿児島道路実施設計図のセンターラインSTA 535とSTA 540を結ぶ線を基準に，1.5m×1.5m，３m×６m，３×40mのトレンチを各１か所ずつ設定して確認調査を実施した。その結果，近世から近代にかけての掘立柱建物跡などの遺構や遺物が検出された。調査面積は1,250㎡，標高は約90～95mである。

２　永　迫　平…STA510とSTA520を結ぶ線を基準に，台地上に２×３mのトレンチ16か所を設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代ナイフ形石器文化期，縄文時代早期・後期・晩期，平安時代，中世，近世の遺物が出土した。調査面積は14,000㎡，標高は約150mである。

３　下 永 迫Ｂ…両側を谷に挟まれた舌状の台地に位置し，標高は約120～130mである。１×10mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存しておらず，遺構も検出されなかった。

４　下 永 迫Ａ…２つのやせ尾根に挟まれた谷地に位置し，標高は約85～110mである。STA495とSTA500を結ぶ線を基準に37m×２mのトレンチを１か所，２m×１mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，古代から中世にかけての遺物が出土し，溝状遺構・焼土域等が検出された。調査面積は2,000㎡である。

５　柳　　原…棚田状の傾斜地に位置し，標高は約90～110mである。地形等を考慮して19×２mのトレンチを１か所，13×２mのトレンチを１か所，７×２mのトレンチを２か所，１×１mのトレンチを６か所設定して確認調査を実施した。その結果，古代から中世にかけての遺物が出土した。調査面積は6,000㎡である。

6　道祖瀬戸…標高約110～115mの台地端の傾斜面に位置する。地形等を考慮して１×２mのトレンチを２か所，１×１mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。

7　狩待迫…台地から谷に向かう標高約110～115mの迫状の地形に位置する。地形等を考慮して１×１mのトレンチを２か所，１×２mのトレンチを３か所設定して確認調査を実施した。その結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。

8　上山路山…標高約125～133mの台地端の緩傾斜地に位置する。２×３mを基本とするトレンチを９か所設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代細石刃文化期・縄文時代早期・後期，弥生時代中期の遺物が出土した。調査面積は6,000㎡である。

9　木場田…標高約95～105mのやせ尾根状の台地先端部に位置する。確認調査の結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず遺構も検出されなかった。

10　敷田尾…台地から西側へ延びる標高約80～110mの緩傾斜面に位置する。２×３mのトレンチを13か所設定して確認調査を実施した。その結果，遺物包含層は残存していなかったが，大正年間まで利用されていたと思われる古道が検出された。

11　大田城…標高約120mの台地上に位置する。地形などを考慮して２×３mを基本とするトレンチを７か所設定して確認調査を実施した。その結果，中世の山城跡に関連する遺構や遺物は検出されなかったが，下層から縄文時代早期と旧石器時代細石刃文化期等の遺物が出土した。調査面積は4,000㎡である。

12　堂ノ上…詳細分布および試掘調査の結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存しておらず，遺構も検出されなかった。

13　枦ケ丸…詳細分布及び試掘調査の結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存しておらず，遺構も検出されなかった。

14　小谷口…標高約50～80mの摺鉢状の谷地形に位置する。堂平窯跡に隣接することから，新たな窯の存在が予想されたが，詳細分布および試掘調査の結果，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。

15　堂平窯…標高約70～90mの台地端の傾斜面に位置する。２×１mのトレンチを１か所，１×１mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，物原と思われる陶器類の堆積層が確認され，窯の存在が明らかとなった。調査面積は3,500㎡である。

16　池之頭…尾根状の台地および隣接する平坦部からなり，標高は約80～100mである。２×４mのトレンチを３か所，２×２mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，古墳時代の遺物が出土した。調査面積は約7,500㎡である。

17　雪山…STA245とSTA250を結ぶ線を基準に，２×10mのトレンチを１か所，２×16mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代・縄文時代早期・中期・後期の遺物と近世から近代にかけてのものと思われる遺構や遺物が発見された。標高は約95m，調査面積は2,700㎡である。

18　猿　　引…標高約110～115mの馬の背状の尾根に位置する。地形を考慮して2,4×24m・2,4×18m・2,4×11m，1,5×11mのトレンチを１か所ずつ設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代ナイフ形石器文化期の礫群や遺物、同細石刃文化期の遺物等が出土した。調査面積は800㎡である。

19　前 山 ノ口…山地から北側へ延びる標高約60～80mの傾斜面に位置する。地形などを考慮し，２×３mのトレンチを３か所設定して確認調査を実施したが，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。

20　日ノ出落シ…標高約60～70mの舌状台地の先端部に位置する。地形等を考慮し，２×３mのトレンチを４か所，２×２mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施したが，遺物包含層は削平されており，遺構も検出されなかった。

21　犬　ケ　原…標高約66mの独立丘陵に位置し，標高は約66mである。谷部に２×３mのトレンチを３か所，台地上に１×１mのトレンチを２か所，２×３mのトレンチを３か所設定して確認調査を実施した。その結果，古代から中世にかけての遺物が出土した。調査面積は2,000㎡である。

22　赤　　平…台地から南へ延びるやせ尾根に位置し，標高は約50mである。２×10mのトレンチを２か所，１×３mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，遺物包含層は削平されていたが，シラス上面でピット22基を検出した。調査面積は250㎡である。

23　向　栫　城…標高約50mの独立台地上に位置する。２×５mのトレンチを４か所，２×10mのトレンチを１か所，２×30mのトレンチを２か所設定して確認調査を実施した。その結果，縄文時代早期・後期・平安時代・中世等の遺物や中世の建物跡，溝状遺構・鍛冶炉や焼土域などが検出された。調査面積は14,000㎡である。

24　堂　園　平…舌状台地の平坦部に位置し，標高は約53mである。２×５mのトレンチを６か所設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代，縄文時代早期・前期・後期，平安時代，中世の遺物が出土した。調査面積は2,000㎡である。

25　今　　里…標高約65mの台地端の傾斜地に位置する。地形などを考慮し，２×５mのトレンチを11か所，２×4mのトレンチを１か所設定して確認調査を実施した。その結果，縄文時代早期・晩期，古墳時代などの遺物が出土した。調査面積は14,000㎡である。

26　市　ノ　原…標高約40～65mの台地西側に位置する。遺跡範囲が広く，長距離におよぶため，２×４mのトレンチを64か所設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代，縄文時代早期・前期・中期，弥生時代，古墳時代，平安時代，中世，近世など，各時代の遺物が多量に出土した。調査面積は62,000㎡である。

27　上　ノ　原…標高約40mの台地上の平坦面に位置する。地形などを考慮し，２×４mのトレンチを４か所設定して確認調査を実施した。その結果，縄文時代早期，古墳時代，古代，中世の遺物が出土した。調査面積は2,000㎡である。

## 第１表　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査員 | 時代 | 概要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 一ノ谷 | 伊集院町下谷口 | 確認　H8.10<br>全面　H8.10～11 | 1,250㎡ | 三垣・桑波田 | 中世<br>近世 | 掘立柱建物跡・土坑<br>陶磁器類 |
| 2 | 永迫平 | 伊集院町下谷口 | 確認　H8.10～12<br>全面　H8.12～H9.3<br>H9.4～H10.3<br>H10.5～7 | 14,000㎡ | 三垣・桑波田<br>三垣・桑波田<br>繁昌・藤崎<br>繁昌・中原・川口・大窪 | 旧石器時代ナイフ形石器文化期<br>旧石器時代細石刃文化期<br>縄文時代早期・後期・晩期<br>古代～近世 | 礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形細石刃<br>竪穴住居跡・集石・連穴土坑・土坑・前平・土師器・青磁 |
| 3 | 下永迫B | 伊集院町下谷口 | 確認　H9.10 | 10㎡ | 三垣・元田 | | |
| 4 | 下永迫A | 伊集院町下谷口 | 確認　H9.10<br>全面　H10.5～7 | 2,600㎡ | 池畑・三垣・元田<br>上之園・栗林 | 古代<br>中世 | 土坑・集石・土師器・須恵器<br>青磁・白磁 |
| 5 | 柳原 | 伊集院町下谷口 | 確認　H9.11<br>全面　H10.7～10 | 6,000㎡ | 池畑・三垣・元田<br>繁昌・中原・川口・大窪 | 古代～中世<br>中世～近代 | 土坑・焼土域<br>土師器・須恵器・鉄製品<br>ピット・溝状遺構 |
| 6 | 道祖瀬戸 | 伊集院町大田 | 確認　H9.2 | 5㎡ | 三垣・桑波田 | | |
| 7 | 狩待迫 | 伊集院町大田 | 確認　H9.1 | 8㎡ | 三垣・桑波田 | | |
| 8 | 上山路山 | 伊集院町大田 | 確認　H9.2<br>全面　H9.5～8<br>H9.12～H10.3 | 6,000㎡ | 三垣・桑波田<br>寺原・桑波田<br>寺原・桑波田 | 旧石器時代<br>縄文時代早期・後期<br>弥生・古墳時代 | 剥片・砕片<br>集石・道跡・岩本・前平・吉田<br>成川 |
| 9 | 木場田 | 伊集院町大田 | 確認　H10.5 | 12,5m | 繁昌 | | |
| 10 | 敷田尾 | 伊集院町大田 | 確認　H10.6～7 | 76㎡ | 繁昌 | | |
| 11 | 大田城 | 伊集院町大田 | 確認　H8.12<br>H9.1<br>全面　H9.12～H10.3 | 4,000㎡ | 三垣・桑波田<br>三垣・桑波田<br>湯之前・橋口（勝） | 旧石器時代<br>縄文時代早期 | 三稜尖頭器<br>集石・土坑・前平・石鏃・磨石 |
| 12 | 堂ノ上 | 東市来町寺脇 | 詳細分布 | | 牛ノ濱 | | |
| 13 | 枦ヶ丸 | 東市来町寺脇 | 詳細分布 | | 牛ノ濱 | | |
| 14 | 小谷口 | 東市来町美山 | 詳細分布 | | 池畑・繁昌 | | |
| 15 | 堂平窯 | 東市来町美山 | 確認　H10.2<br>全面　H10.8.4～12 | 3,500㎡ | 池畑<br>池畑・繁昌・宮田(栄)・寺師<br>森田・元田・川口・大窪 | 江戸時代 | 窯・柱穴・粘土溜・土坑<br>物原<br>陶器・瓦・窯道具 |
| 16 | 池之頭 | 東市来町美山 | 確認　H9.8<br>全面　H10.8～11<br>H10.7～8 | 7,500㎡ | 湯之前・橋口（勝）<br>宮田（洋）・寺原<br>宮田（洋）・三垣 | 旧石器時代細石刃文化期<br>縄文時代早期・後・晩期<br>古墳時代 | 細石刃・細石刃核<br>集石・前平・吉田・石坂 |
| 17 | 雪山 | 東市来町美山 | 確認　H12.6<br>全面　H12.6～8 | 2,700㎡ | 宮田（洋）・三垣 | 縄文時代早期<br>近世～近代 | 集石・前平・<br>陶磁器類・窯道具 |
| 18 | 猿引 | 東市来町長里 | 確認　H12.5<br>全面　H12.5～6 | 800㎡ | 宮田（洋）・三垣 | 旧石器時代ナイフ形石器文化期<br>縄文時代前期 | 礫群<br>縦長剥片・ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃 |
| 19 | 前山ノ口 | 東市来町伊作田 | 確認　H9.7 | 18㎡ | 前野・西村 | | |
| 20 | 日ノ出落シ | 東市来町伊作田 | 確認　H9.2 | 28㎡ | 池畑 | | |
| 21 | 犬ヶ原 | 東市来町伊作田 | 確認　H9.2<br>H10.6.<br>全面　H11.12～H12.2 | 2,000㎡ | 池畑<br>三垣<br>牛ノ濱・橋口（勝） | 古代<br>中世 | 掘立柱建物跡・鍛冶炉<br>竪穴建物跡 |
| 22 | 赤平 | 東市来町伊作田 | 確認・全面　H11.7 | 250㎡ | 前野・三垣 | 古代～中世 | ピット・土師器 |
| 23 | 向椿城 | 東市来町伊作田 | 確認　H8.11～12<br>全面　H9.4～H10.3<br>H10.10～H11.3 | 14,000㎡ | 池畑・西園<br>鶴田・勇<br>八木澤・横手 | 縄文時代草創期・早期・後期<br>古墳時代<br>中世<br>近世 | 打製石鏃<br>竪穴住居<br>空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・通路状遺構・竪穴建物跡・掘立柱建物跡・炉跡・土坑・青磁・備前焼 |
| 24 | 堂園平 | 東市来町伊作田 | 確認　H8.11～12<br>全面　H10.5～11 | 2,000㎡ | 池畑・西園<br>八木澤・横手 | 旧石器時代ナイフ形石器文化期<br>旧石器時代細石刃文化期<br>縄文時代早期・前期・後期<br>古代 | 剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石<br>礫群・細石刃・細石刃核<br>集石・吉田・塞ノ神・蠶 他<br>土坑・炭化物集中域・土師器・須恵器 |
| 25 | 今里 | 東市来町伊作田 | 確認　H8.11<br>全面　H9.4～11 | 14,000㎡ | 池畑・西園<br>湯之前・橋口 | 旧石器時代<br>縄文時代早・前・後・晩期<br>古墳時代 | 礫群・細石刃・細石刃核<br>集石・前平・深浦・出水・黒川<br>成川 |
| 26 | 市ノ原 | 東市来町湯田<br>・市来町大里 | 確認　H8.10～12<br>全面　H8.12～H9.3<br>H9.4～H10.3<br>H10.5～H11.3<br>H11.5～7 | 62,000㎡ | 繁昌・西園・宮田（茂）<br>池畑・繁昌・西園・宮田(茂)<br>池畑・寺師・前野・森田・<br>八木澤・中原・藤野・三垣・<br>元田・西村・松村・松崎<br>宮田(洋)・前野・寺原・三垣・松村<br>前野・三垣 | 旧石器時代ナイフ形石器文化期<br>旧石器時代細石刃文化期<br>縄文時代早・前・中・後・晩期<br>弥生時代<br>古墳時代<br>古代～中世<br>近世 | 礫群・ナイフ・台形石器<br>細石刃・細石刃核<br>集石・土器・石器<br>竪穴住居跡・壺棺墓・<br>竪穴住居跡・土坑<br>掘立柱建物跡・焼土域・溝・土師器・須恵器<br>古道・掘立柱建物跡・鍛冶炉 |
| 27 | 上ノ原 | 市来町大里 | 確認　H8.11<br>全面　H10.7～9 | 2,000㎡ | 繁昌・宮田（茂）<br>上之園・栗林 | 縄文時代早期<br>古墳時代<br>古代～中世 | 集石・土坑・塞ノ神等<br>竪穴・土坑・成川・貝殻<br>青磁・土師器・須恵器 |

# 第Ⅱ章　一ノ谷遺跡の発掘調査

## 第１節　調査に至るまでの経緯と経過

建設省九州地方建設局(中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称)は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称。以下，文化課）に照会した。この計画に伴い，鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成３年６月に伊集院インターチェンジと市来インターチェンジ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・緊急発掘調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度は一ノ谷遺跡の確認調査・緊急発掘調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。調査面積は1,250㎡である。なお，整理・報告書作成作業を平成11年度に，報告書刊行を鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成12年度に行った。

## 第２節　調査の組織

（平成８年度）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業主体者 | 建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所 | | |
| 発掘調査主体者 | 鹿児島県教育委員会 | | |
| 企画・調整 | 鹿児島県教育委員会文化財課※ | | |
| 発掘調査責任者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 所長 | 吉元　正幸 |
| 発掘調査企画担当者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 次長兼総務課長 | 尾崎　進 |
| | 〃 | 主任文化財主事兼 | |
| | 〃 | 調査課長 | 戸﨑　勝洋 |
| | 〃 | 課長補佐 | 新東　晃一 |
| | 〃 | 主任文化財主事兼 | |
| | 〃 | 第三調査係長 | 池畑　耕一 |
| 発掘調査事務担当者 | 〃 | 主査 | 成尾　雅明 |
| | 〃 | 主査 | 前屋敷裕徳 |
| | 〃 | 主事 | 追立ひとみ |
| 発掘調査担当者 | 〃 | 文化財研究員 | 三垣　恵一 |
| | 〃 | 文化財調査員 | 桑波田武志 |
| 現地指導者 | 南九州古石塔研究会 | 会長 | 河野　治雄 |

※平成８年度より組織改革により文化課から名称変更

（平成12年度）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事業主体者 | 建設省九州地方建設局※鹿児島国道工事事務所 | | |
| 整理作業主体者 | 鹿児島県教育委員会 | | |
| 企画・調整 | 鹿児島県教育委員会文化財課 | | |
| 整理作業責任者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 所長 | 井上　明文 |
| 整理作業企画担当者 | 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 次長兼総務課長 | 黒木　友幸 |
| | 〃 | 総務係長 | 有村　貢 |
| | 〃 | 主任文化財主事兼 | |
| | 〃 | 調査課長 | 新東　晃一 |
| | 〃 | 課長補佐 | 立神　次郎 |
| | 〃 | 主任文化財主事兼 | |
| | 〃 | 第三調査係長 | 牛ノ濵　修 |
| 整理作業事務担当者 | 〃 | 主査 | 今村孝一郎 |
| 整理作業担当者 | 〃 | 文化財研究員 | 三垣　恵一 |
| | 〃 | 文化財研究員 | 桑波田武志 |
| 遺物指導者 | 佐賀県立九州陶磁文化館 | 資料係長 | 家田　淳一 |

※中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局

なお，発掘調査および報告書作成中，次の方々から指導・助言，御協力いただいた。記して謝意を表します。（敬称略，五十音順）

青﨑和憲・梅北浩一（伊集院町教育委員会），上床真・大窪祥晃（加治木町教育委員会），黒川忠広・帖佐秀人・鶴田靜彦・中村耕治・西園勝彦・橋口勝嗣・橋口亘・繁昌正幸・前迫亮一・元田順子・横手浩二郎・脇丸省吾・渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）

## 第３節　調査の経過

確認調査は，平成８年10月２日から10月７日にかけて計４日間実施した。緊急発掘調査（以下全面調査）は平成８年10月８日から11月15日までの計25日間実施した。整理作業は発掘調査終了後，平成11年度に県立埋蔵文化財センターで実施した。以下，日誌抄で調査の経過を略述する。

### 確認調査

10月１日（火）～10月４日（金）

初日は雨のため作業を中止する。発掘器材の搬入。調査用テント，簡易トイレ等を設置。

永迫平遺跡調査事務所において作業員に諸説明後，一ノ谷遺跡に移動する。調査区の中央に２ｍの段差があることから作業上の安全等を考慮して東側を上段，西側を下段に区分して調査を進めることになった。下段の表土剥ぎを実施しながら遺跡周辺整備作業を行う。その後，トレンチ１・２（３×６ｍ）を設定し，掘り下げを開始する。シラス盛土（造成土）や攪乱土中より陶磁器類が出土し，１トレンチから土坑１基，２トレンチからピット４基を検出する。

上段の表土剥ぎを実施し，シラス層を確認する。清掃後，写真撮影を実施。旧地形を把握す

るため，２トレンチを西側へ拡張する。五輪塔周辺の遺構の有無を確認するため，五輪塔西側の掘り下げを行う。遺構が検出されなかったため，清掃後，写真撮影をして終了する。下段は確認トレンチ１・２の掘り下げを継続して実施する。トレンチ完掘後，土層断面図・トレンチ配置図・五輪塔配置図を作成する。調査用グリッド杭打ち作業を実施する。

10月７日(月)

２トレンチ上段部の掘り下げを実施。ピット・土坑・古道・焼土域等を確認。さらに，上段部と下段部の境に溝状遺構を検出する。埋土からは陶磁器類が出土する。

確認調査の結果，包含層の残存状況は良好ではないものの，造成土や二次堆積土に近世から近代の遺物が確認され，またシラス層上面でピット・土坑・古道等の遺構が検出された。このため，確認調査を全面調査へ切り替えて実施することになった。

**緊急発掘調査**（全面調査）

10月８日(火)～10月11日（金）

プレハブにて実測図の点検および今後の調査について協議する。

上段部を拡張して表土剥ぎを行い，下段は掘り下げを継続する，北側の土層断面図と下段の遺構配置図を作成する。

10月14日(月)～10月18日（金）

ピット・溝状遺構・土坑等の掘り下げ，清掃・写真撮影を実施し，古道の平・断面図・遺構配置図・南側土層断面図を作成する。

上段部の北側の表土剥ぎおよび排土繰り越しを行う。五輪塔移設場所の整地後，五輪塔移設作業を実施する。五輪塔を撤去した場所の表土剥ぎを行い，精査を行ったが，遺構は検出されなかった。

10月21日(月)～11月１日（金）

遺構検出のため上段部を精査する。新たにピット・軽石石組土坑(土坑２)・溝状遺構を検出し，掘り下げを開始する。上段の遺構配置図・掘立柱建物跡１号の柱穴の断面図を作成する。

11月５日(火)～11月８日（金）

掘立柱建物２号の柱穴・軽石石組土坑（土坑２）・溝状遺構の掘り下げ，清掃・写真撮影を実施する。遺構配置図・掘立柱建物２号柱穴断面図・南側土層断面図・軽石石組土坑（土坑２）の平・断面実測図を作成する。

11月11日（月）～11月14日（木）

軽石石組土坑（土坑２）の平･断面実測図作成。発掘作業員は永迫平遺跡へ合流する。

11月15日(金)

軽石石組土坑(土坑２)断面実測図作成。実測終了後，完掘・写真撮影を行う。

調査区内および周辺の清掃を行い調査を終了する。

# 第Ⅲ章　遺跡の位置及び環境

## 第１節　地理的環境

一ノ谷遺跡は鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字一ノ谷に所在する。

遺跡の所在する伊集院町は，薩摩半島のほぼ中央部に位置し，東は鹿児島市・松元町，西は東市来町・日吉町，南西は日吉町，南東は松元町，北は郡山町・東市来町に接している。地理的には北に重平山（523.1m），南西に矢筈岳（301.4m）・諸正岳（302.9m）があるほか，海抜150m前後の火山灰台地，いわゆるシラス台地と丘陵からなり，その間には神之川やその支流の開析によって標高約60～70mの帯状の平野部が形成されている。現在の伊集院町の行政・商業の中心はこの平野部の東側に集中している。

一ノ谷遺跡は，火山灰台地のひとつである飯牟礼台地から西北西に延びた標高約90～95mの丘陵端に位置する。周辺に広がる水田との比高差は約20mである。

この一帯は，シラス台地と平野部の境界部にあたり，浸食された台地縁辺部が部分的に急峻な断崖を呈している。そのため，遺跡の所在する下谷口の川畑集落と飯牟礼の古城集落を結ぶ古道は，通称「一ノ谷」とよばれた難所であり，峠には旅人の安全を祈るため，碑面に『南無阿弥陀仏』と刻まれた「経の塚」が建てられたほどである。

遺跡周辺を俯瞰すると，遺跡の所在する丘陵の東端には等高線に迫状のくぼみが認められる。この迫を下りた場所には湧水がみられ，現在も水田の用水として利用されていることから，この迫は遺跡への水の運搬などの際，道として利用されていたものと考えられる。また，遺跡北側の町道から丘陵端に沿って，高さ２～３mの切通しの里道が造成されており，遺跡内を南北に縦断している。さらに丘陵の北壁には素掘りの防空壕が掘削され，その形を今にとどめている。このようにこの丘陵一帯には，現在の茶畑・杉林として利用されるまで，繰り返し人間による活動が行われてきた痕跡が認められる。

## 第２節　歴史的環境

伊集院町は北薩と南薩を結ぶ，位置的に交通の要衝を占めていたことなどから，古代には租税の物品を収納し，管理する倉庫（＝院）が置かれたといわれ，その町名の由来にもなっている。中世には戦略上の重要性から島津氏の拠点として位置付けられ，中世山城の「一宇治城」は島津貴久が居城とし，ザビエルと会見した地として知られている。また中世以降，梅岳寺・妙円寺・荘厳寺など数多くの寺院が建立されたことから，これらの寺院跡を中心に五輪塔をはじめ，多くの古石塔群が残存している。

近世には，下谷口に地頭仮屋や御仮屋が置かれ，その周辺には郷士の住む麓集落が形成された。また，参勤交代にも利用された西目街道の沿道に発達した野町では，藩内でも有数の市が開かれ，幕末になるにつれて活況を呈したといわれる。また，南西に位置する矢筈岳には異国方火立番所が設けられ，串木野や東市来とならんで，幕末に至るまで外国船などに対する警戒が行われている。

このような歴史をもつ伊集院町は，古来から経済・軍事面などにおいて重要な地であったといえる。

## 第３節　周辺遺跡

伊集院町の考古学的調査の歴史は比較的新しく，近年の大型の公共事業に伴う発掘調査が行われる以前は，下谷口の川畑で縄文土器が採集されたり，寺脇の楠牟礼神社などで弥生土器が採集されるというような状況であった。

近年の調査成果について概括すると，中山間地総合整備事業に伴い平成８年度に実施された恋之原の稲荷原遺跡の発掘調査において，縄文時代早期・晩期の遺構・遺物が発見されている。なかでも縄文時代早期初頭の赤色顔料が塗彩された土器片は注目される。同様の資料は，前平式土器岩本タイプの標式遺跡である指宿市岩本遺跡や，伊集院町大田の上山路山遺跡，肝属郡田代町のホケノ頭遺跡で出土している。

また，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）の建設に伴い，平成８年度から平成10年度にかけて，計６遺跡の緊急発掘調査が行われている。下谷口の永迫平遺跡では，縄文時代早期前葉の竪穴住居跡や集石・連穴土坑・道跡などの遺構が検出され，当該期の集落の様相を解明する上で貴重な資料を提供している。また，旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物の出土は，伊集院町の歴史を２万数千年前までさかのぼらせることになった。

九州新幹線鹿児島ルート（新八代～西鹿児島間）の建設に伴い，平成10年度から平成12年度にかけて，計５遺跡の緊急発掘調査が行われている。その結果，各遺跡から古代・中世・近世など各時代の遺構・遺物の発見が相次いでいる。なかでも郡に所在する山ノ脇遺跡では，中世の掘立柱建物跡群が発見され，今後，伊集院町や鹿児島県の中世史の解明に寄与するものと思われる。

また，伊集院町に隣接する鹿児島市や松元町でも，近年の公共事業に伴って，旧石器時代や縄文時代の遺跡が多数確認されている。これらの遺跡と同じ台地上に所在する竹之山の瀬戸頭遺跡や竹ノ山遺跡では，旧石器時代から縄文時代にかけての良好な遺構・遺物が発見されており，当該期の研究に貴重な資料を追加することになった。

一ノ谷遺跡の周辺にも旧石器時代から近世まで，各時代の遺跡が多数存在する。周辺遺跡の概要については次に挙げる地名表のとおりである。

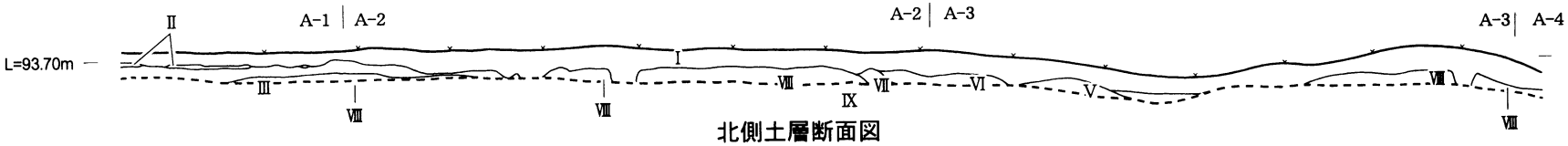
第3図　周辺遺跡分布図

## 第２表　周辺遺跡地名表（１）

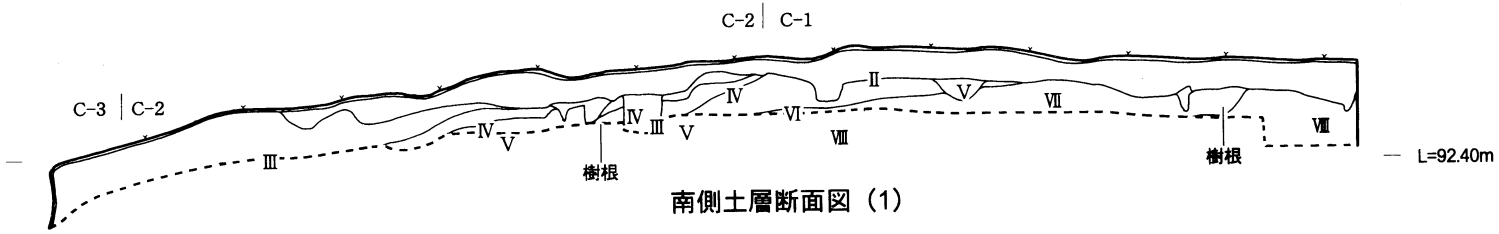
| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 地形 | 主な時代 | 遺構・遺物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鍋倉 | 清藤鍋倉 | 台地 | 縄文 | 角形土器（前平式？） | |
| 2 | 寺脇 | 寺脇楠牟礼神社 | 台地<br>河岸段丘 | | 貝殻条痕文<br>弥生土器片 | |
| 3 | 恋之原 | 恋之原集落東端 | 台地 | | 壺形土器 | |
| 4 | 郡 | 伊集院高校校庭 | 沖積地 | | 石器・壺形土器・坏 | |
| 5 | 土橋<br>クイハイ | 土橋クイノハイ<br>尾堂集落南側台地 | 台地 | | 磨製石斧 | |
| 6 | 下土橋 | 下土橋 | 台地 | | 磨製石斧 | |
| 7 | 前迫 | 土橋竹山集落前迫竹山神社 | 台地 | | 磨製石斧 | |
| 8 | 猪鹿倉 | 猪鹿倉141－1 | 平地 | | 磨製石斧（大・小石斧） | |
| 9 | 一宇治城 | 大田 | 丘陵 | 鎌倉初期 | | 伊集院郡司記　四郎時清がここに館を構えたのが本城の始まり。 |
| 10 | 内城（平城）跡 | 古城 | 山地 | 弘安年間 | | 島津忠経の８男従房俊忠が城を築く。 |
| 11 | 大田城（時吉城）跡 | 大田下城山迫 | 丘陵 | | | |
| 12 | 大内山城（小城）跡 | 小城 | 山地 | | | |
| 13 | 神殿城跡 | 上神殿段 | 山地 | 築城時期不明 | | 城・堀等残存 |
| 14 | 長崎城跡 | 竹之山 | 山地 | | | |
| 15 | 麦生田城跡 | 麦生田 | 山地 | | | |
| 16 | 報恩寺跡 | 大田中 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 17 | 竜泉寺跡 | 天神馬場 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 18 | 雪窓院跡 | 城山 | 山腹 | 中・近世 | 五輪塔・無縫塔 | |
| 19 | 円通墓地 | 城山 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 20 | 長寺庵跡 | 天神馬場 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔外 | |
| 21 | 破鞋墓地 | 向江 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 22 | 梅岳寺墓地 | 四郎圓 | 台地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 23 | 磨崖佛 | 麓東山下氏宅 | 山腹 | 中・近世 | 磨崖佛・五輪塔 | |
| 24 | 末穏寺境内 | 天神馬場 | 山腹 | 中・近世 | 無縫塔 | |
| 25 | 下谷口 | 下谷口松田氏宅 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 26 | 末永 | 窪田郵便局前 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・相輪 | |
| 27 | 末永 | 末永八幡神社横 | 山地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | 鎌倉以降 |
| 28 | 本平 | 本平福留氏山林 | 山林 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 29 | 本平 | 本平浜田氏宅裏 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 30 | 荘厳寺墓地 | 猪鹿倉 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・石地蔵 | |
| 31 | 薬師堂跡 | 猪鹿倉 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔 | |
| 32 | 妙円寺墓地 | 徳重 | 山地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔外 | |
| 33 | 宮下墓地 | 麦生田宮下墓地 | 山地 | 中・近世 | 五輪塔・相輪 | |
| 34 | 殿ん墓 | 野田 | 平地<br>田の中 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 35 | 九玉神社 | 郡 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 36 | 法泉寺跡 | 野田 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・無縫塔 | |
| 37 | じょがんどん境内 | 上神殿上 | 山地 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 38 | 金吾神社裏 | 上神殿中 | 山地 | 中・近世 | 宝塔 | |
| 39 | 桑畑 | 桑畑千代盛氏宅地内 | 山地 | 中・近世 | 五輪塔・相輪 | |
| 40 | ゴアン寺跡 | 下神殿鶴丸 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 41 | 大山神社境内 | 古城 | 台地 | 中・近世 | 五輪塔 | |
| 42 | 松尾城の麓 | 古城 | 台地 | 中・近世 | 五輪塔・相輪 | |
| 43 | 熊野神社境内 | 飯牟礼 | 平地 | 中・近世 | 五輪塔・宝塔 | |
| 44 | 大知跡 | 大田上 | 台地 | 中・近世 | 五輪塔・無縫塔 | |
| 45 | 平等寺跡 | 麦生田字山下42 | 小丘 | 中世 | 入定窟・石塔 | |

## 第３表　周辺遺跡地名表（２）

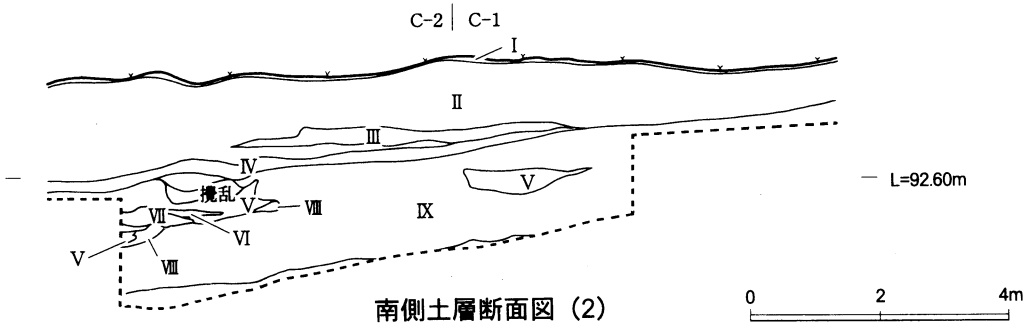
| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 地形 | 主な時代 | 遺構・遺物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 46 | 円福寺墓地群 | 寺脇甫ノ内663 | 小丘陵 | 中世 | 伊集院忠国夫婦の墓 | |
| 47 | 石谷高久の墓 | 徳重 | 平地 | 中世 | | |
| 48 | 本田兄弟の墓 | 荒瀬 | 平地 | 近世 | | |
| 49 | 有馬新七の墓 | 天神馬場 | 平地 | 近世 | | |
| 50 | 山玉神社棟札 | 瀬戸内 | 平地 | 近世 | | |
| 51 | 武家屋敷門 | 下谷口1528有馬秀四 | 平地 | 近世 | 武家屋敷門 | |
| 52 | 大渡橋記念碑 | 大田 | 川岸 | 近世 | 西郷南州による記念碑 | |
| 53 | 永平橋記念碑 | 上谷口（中央通り） | 川岸 | 近世 | 西郷南州による記念碑 | |
| 54 | 小城 | 徳重字小城 | 丘陵 | 中世 | | |
| 55 | 黒木田 | 郡字黒木田 | 台地 | 奈良～平安 | 土師器片 | Ｈ１発掘調査 |
| 56 | 後宮田 | 郡字後宮田 | 台地 | 奈良～平安 | 土師器片 | |
| 57 | 小竹下 | 桑畑字小竹下 | 平地 | 古墳 | 土器片 | |
| 58 | 塔ノ原 | 野田字塔ノ原 | 平地 | 歴史 | 五輪塔 | |
| 59 | 宮田 | 下神殿字宮田 | 平地 | 古墳 | 土器片 | |
| 60 | 六反田 | 上神殿字六反田 | 台地 | 歴史 | 土器片 | |
| 61 | 寺前 | 上神殿字寺前 | 台地 | 歴史 | 土器片 | |
| 62 | 瀬戸頭 | 竹之山字瀬戸頭 | 山地 | 縄文草創期 | 石器・土器片 | Ｈ９発掘調査 |
| 63 | 上ノ平 | 郡字上ノ平 | 丘陵 | 縄・中近世 | 土器・石器 | Ｈ12発掘調査 |
| 64 | 山ノ脇 | 郡字山ノ脇 | 台地 | 古代・中世 | 土師器・須恵器・青磁 | Ｈ11～12発掘調査 |
| 65 | 梅落 | 郡字梅落 | 台地 | 古代・中世 | 土師器・須恵器・青磁 | Ｈ12発掘調査 |
| 66 | 碇ノ谷 | 下土橋字碇ノ谷 | 台地 | 古代 | | Ｈ７分布調査 |
| 67 | 上稲荷原 | 恋之原字上稲荷原 | 台地 | 古墳・古代 | | Ｈ７分布調査 |
| 68 | 稲荷原 | 恋之原字稲荷原 | 台地 | 縄文早期 | 石器・土器片 | Ｈ８発掘調査 |
| 69 | 堂ノ迫 | 古城字堂ノ迫 | 台地 | 中世 | | Ｈ10分布調査 |
| 70 | 七反畠 | 古城字七反畠 | 台地 | 古墳 | | Ｈ10分布調査 |
| 71 | 諏訪尾 | 麦生田字諏訪尾 | 台地 | 縄文 | | Ｈ11道路維持分布 |
| 72 | 永迫平 | 下谷口字永迫平 | 台地 | 縄文早期 | 住居跡・石器・土器片 | Ｈ８～10発掘調査 |
| 73 | 下永迫Ｂ | 下谷口字下永迫 | 台地 | | | Ｈ９確認調査 |
| 74 | 下永迫Ａ | 下谷口字下永迫 | 谷地 | 古代～中世 | | Ｈ10発掘調査 |
| 75 | 柳原 | 下谷口字柳原 | 傾斜地 | 古代～近代 | 土坑・溝・土師・須恵 | Ｈ10発掘調査 |
| 76 | 道祖瀬戸 | 大田字道祖瀬戸 | 台地端 | | | Ｈ８確認調査 |
| 77 | 狩待迫 | 大田字狩待迫 | 台地端 | | | Ｈ８確認調査 |
| 78 | 上山路山 | 大田字上山路山 | 台地 | 縄文早期 | | Ｈ９発掘調査 |
| 79 | 木場田 | 大田字木場田 | 台地端 | | | Ｈ10確認調査 |
| 80 | 敷田尾 | 大田字敷田尾 | 傾斜面 | 近世 | | Ｈ10確認調査 |
| 81 | 瀬戸頭Ａ | 竹之山字瀬戸頭 | 台地 | 旧石器・縄 | ナイフ・細石器 | Ｈ10発掘調査 |
| 82 | 瀬戸頭Ｂ | 竹之山字瀬戸頭 | 台地 | 旧石器・縄 | | Ｈ９確認調査 |
| 83 | 瀬戸頭Ｃ | 竹之山字瀬戸頭 | 台地 | 旧石器 | 台形石器 | Ｈ11発掘調査 |
| 84 | 竹之山Ａ | 竹之山 | 台地 | 縄・弥・古 | 土器 | Ｈ10発掘調査 |
| 85 | 竹之山Ｂ | 竹之山 | 台地 | 旧石器 | 陥し穴・石器 | Ｈ10発掘調査 |
| 86 | 花段 | 徳重字花段 | 台地 | 中世 | 土器片 | |
| 87 | 石坂 | 郡字石坂 | 平地 | 縄文早期 | 土器片 | Ｈ11～12発掘調査 |
| 88 | 西原 | 郡字西原 | 平地 | 古代～中世 | | Ｈ11～12発掘調査 |
| 89 | 松ヶ迫 | 竹之山字松ヶ迫 | 台地 | 旧石・弥生 | 細石刃核・土器 | 表面採集 |
| 90 | 一ノ谷 | 下谷口字一ノ谷 | 丘陵 | 中・近世 | 掘立柱建物跡・陶磁器 | Ｈ８発掘・本報告 |



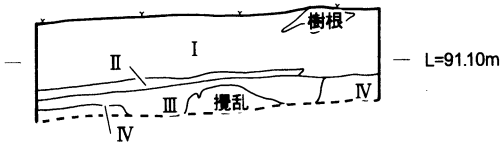

北側土層断面図




南側土層断面図（1）




南側土層断面図（2）




2T土層断面図

Ⅰ　層　明茶褐色土
Ⅱ　層　灰色砂質土
Ⅲ　層　黒色腐植土
Ⅳ　層　黄褐色粘質土

北側土層断面図

Ⅰ　層　暗茶褐色砂質土
Ⅱ　層　灰色砂質土
Ⅲ　層　茶褐色砂質土
Ⅳ　層　灰色砂質土
Ⅴ　層　黒色腐植土
Ⅵ　層　黄褐色土
Ⅶ　層　灰色+黄褐色土
Ⅷ　層　灰白色砂質土

南側土層断面図

Ⅰ　層　灰褐色土
Ⅱ　層　暗褐色砂質土
Ⅲ　層　茶褐色砂質土
Ⅳ　層　黒褐色砂質土
Ⅴ　層　黄橙色砂質土
Ⅵ　層　黄橙色+乳白色土
Ⅶ　層　乳白色砂質土
Ⅷ　層　灰白色砂質土

南側土層断面図（2）

Ⅰ　層　灰褐色土
Ⅱ　層　茶褐色砂質土
Ⅲ　層　灰白色砂質土
Ⅳ　層　黒色粘質土
Ⅴ　層　黄橙色砂質土
Ⅵ　層　黄橙色砂質土+灰白色砂質土
Ⅶ　層　灰白色砂質土
Ⅷ　層　黒色腐植土
Ⅸ　層　明橙色土
Ⅹ　層　黒褐色粘質土

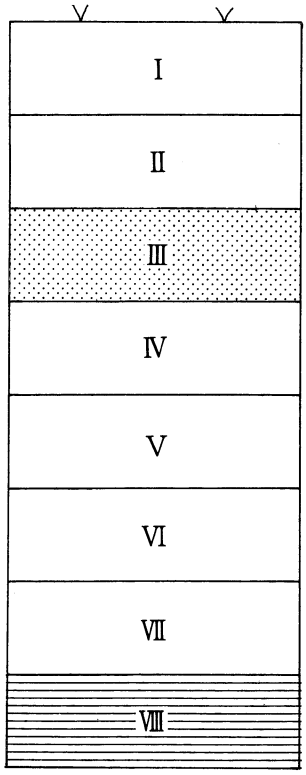
第4図　一ノ谷遺跡土層図

# 第Ⅳ章　発掘調査

## 第１節　遺跡の層位

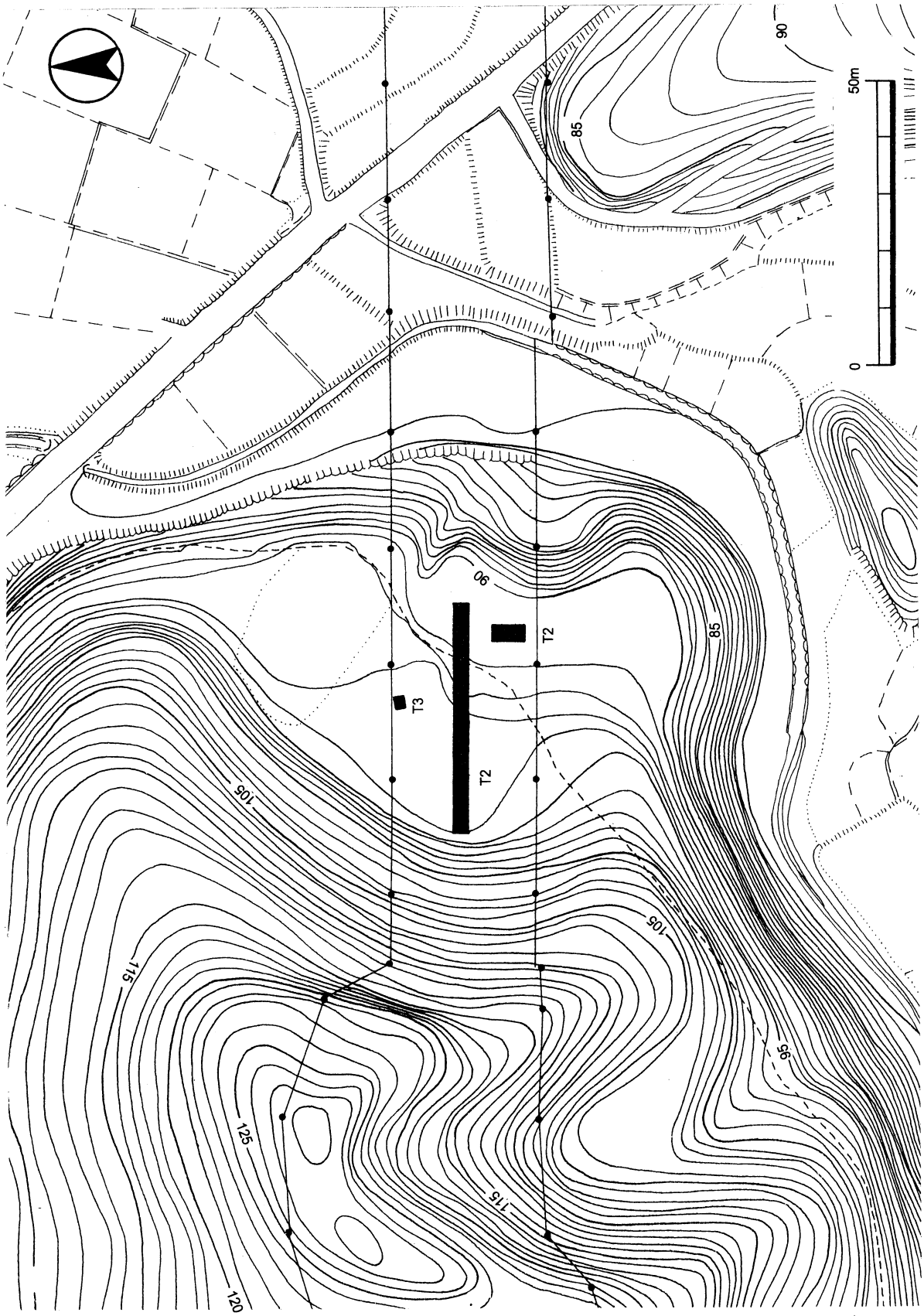
一ノ谷遺跡の層位は，発掘調査対象区域の旧地形が傾斜地であったため，安定した地層の堆積状況は認められなかった。表土下には，当遺跡地が開削され平坦面が形成された際の造成土や，西側の傾斜面から流入した土砂が水成作用によって堆積した状況が認められた。Ⅱ層以下は色調が異なるもののいずれも砂質が強く，シラスを主体とする二次堆積層であろうと思われる。調査区のＡ～Ｄ－２～４区には，部分的にアカホヤ火山灰該当層が認められたものの，二次的な堆積の可能性が強いと判断した。当該層からは遺物の出土も認められていない。遺構検出面は，Ａ～Ｄ－４～５区の一部がアカホヤ火山灰該当層上面，Ａ～Ｄ－１～３区がシラス層上面とした。

一ノ谷遺跡の層位は，調査区南側（Ｃ－１～３区）の土層断面を指標にした。




| | | |
|---|---|---|
| 第Ⅰ層 | 灰褐色土 | 表土 |
| 第Ⅱ層 | 暗褐色砂質土 | シラスを主体とする二次堆積層。 |
| 第Ⅲ層 | 茶褐色砂質土 | シラスを主体とする造成土で，基本的な遺構埋土である。 |
| 第Ⅳ層 | 黒褐色砂質土 | |
| 第Ⅴ層 | 黄橙色砂質土 | シラスを主体とする二次堆積層。 |
| 第Ⅵ層 | 黄橙色＋乳白色砂質土 | Ⅴ層とⅦ層の漸移層。水成層である。 |
| 第Ⅶ層 | 乳白色砂質土 | シラスを主体とする二次堆積層。水成層である。 |
| 第Ⅷ層 | 灰白色砂質土 | 基本的な遺構検出面である。純粋なシラス層。基盤層となる。 |

第５図　土層模式図




第６図　確認トレンチ配置図

## 第２節　調査の概要

一ノ谷遺跡は鹿児島県日置郡伊集院町字一ノ谷に所在する。標高は約90～95m，調査対象面積は1,250㎡である。

発掘調査は，鹿児島道路実施設計図（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）のセンターラインSTA535とSTA540を結ぶ線を基軸に，南北方向にＡ・B・Ｃ…，東西方向に１・２・３…とする10m間隔の調査用グリッド（区割り）を設定して実施した。

**確認調査**

確認調査は，調査区内の伐採作業が終了した後，調査区のほぼ中央にある約２ｍの段差を境に，西側を上段部，東側を下段部として区分し，下段部に３×６ｍのトレンチを１か所（トレンチ１），上段部から下段部にかけて東西方向に３×40mのトレンチを１か所（トレンチ２），上段部の五輪塔群の西側に1.5×1.5mのトレンチを１か所（トレンチ３）設定して，人力による掘り下げを実施した。その結果，トレンチ１からピット・溝状遺構などの遺構が検出されたほか，陶磁器類などの遺物が出土した。あわせて遺物包含層の残存は良好ではないことも判明したが，下層確認や旧地形の把握のため，さらにシラス層上面まで掘り下げを継続したところ，トレンチ２からピット・土坑・溝状遺構などの遺構が検出された。

この結果を受けて，遺構の把握を主たる目的として，調査を確認調査から緊急発掘調査（以下，全面調査）に切り替えて実施することになった。

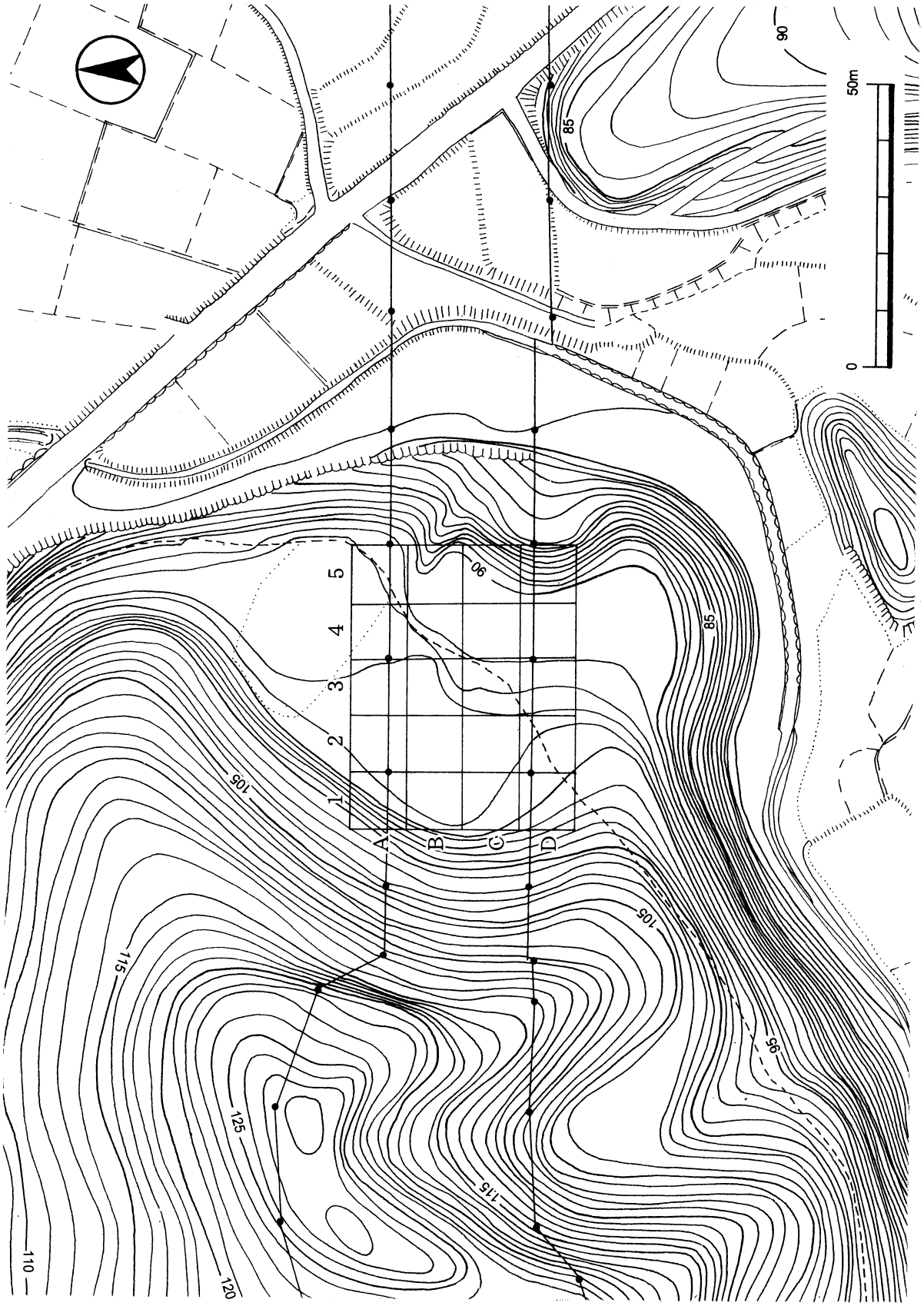
**全面調査**

全面調査は，遺跡が傾斜地に立地しているため，作業上の安全と排土処理場の確保などを考慮して，上段部については南北に２分して実施する形をとった。重機で表土を除去した後，人力による掘り下げを行い，遺構の検出作業を実施した。その結果，新たにピット・土坑・溝状遺構・古道および五輪塔残欠・焼土域などを検出し，このうち，検出されたピットから２軒の掘立柱建物跡を復元した。遺跡地内に安置されていた五輪塔群の周辺についても掘り下げを行ったが，墓壙などの遺構は確認されなかった。遺物は，調査前から近世以降の陶磁器類などが調査区内に散布する状態であったが，各種の遺構内からも同時期の遺物を主体に出土している状況である。

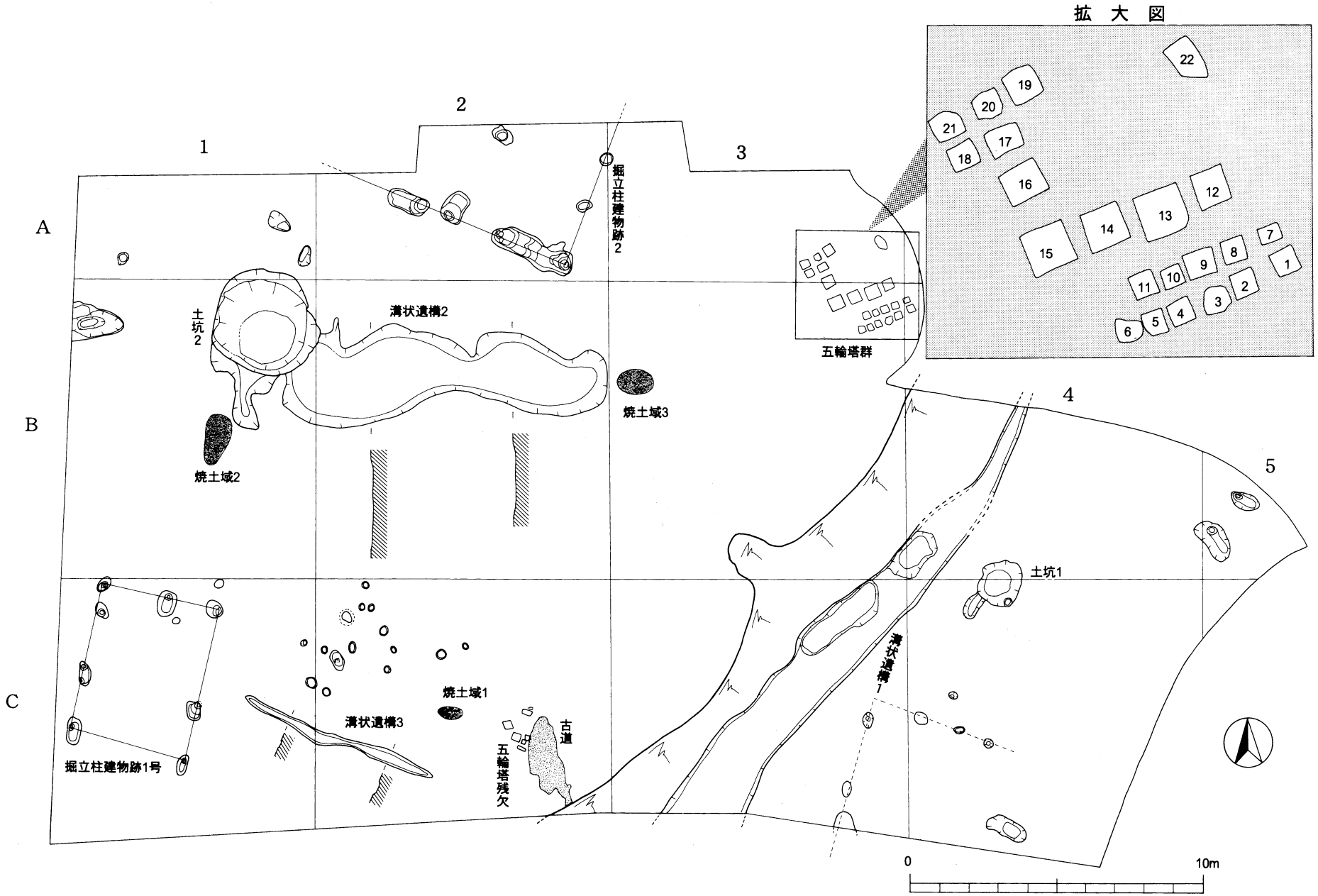
## 第３節　検出遺構

一ノ谷遺跡で検出された遺構は，掘立柱建物跡２軒，土坑６基，溝状遺構３条，古道および五輪塔残欠・ピット・焼土域などである。遺構検出面は主にシラス層上面である。遺構の埋土は，基本的に茶褐色砂質土であるが，柱穴・土坑には握り拳大から60cm程の軽石が入り込んでいるものも認められた。以下，検出された遺構について述べる。

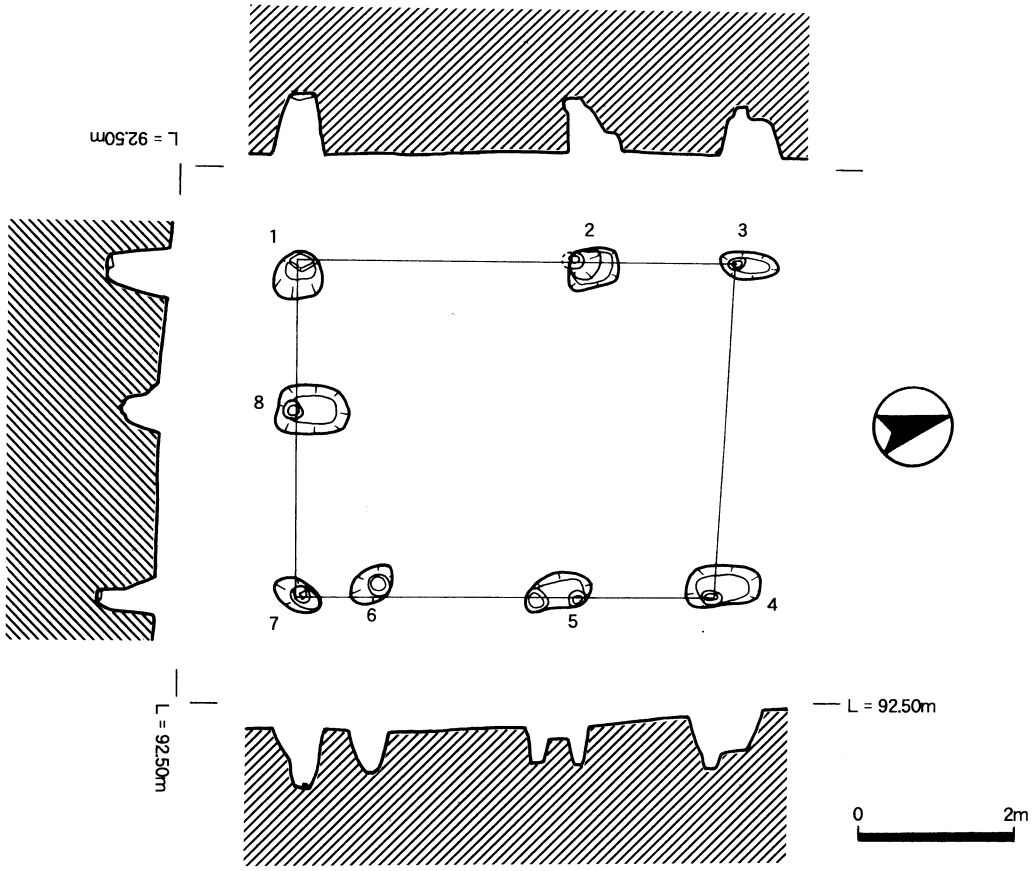
なお，遺構内からはおもに近世から近代の出土しているが，遺物については，第４節で扱うこととし，ここでは遺物の種別などの概略についてふれることにする。




第７図　一ノ谷遺跡グリッド配置図


拡大図
22
19
20
21
17
18
16
12
13
14
15
7
8
9
10
11
1
2
3
4
5
6
1
2
3
4
5
A
B
C
掘立柱建物跡2
溝状遺構2
土坑2
焼土域2
焼土域3
五輪塔群
土坑1
溝状遺構1
焼土域1
溝状遺構3
古道
五輪塔残欠
掘立柱建物跡1号
0
10m

第8図 遺構位置図




**第9図　掘立柱建物跡1**

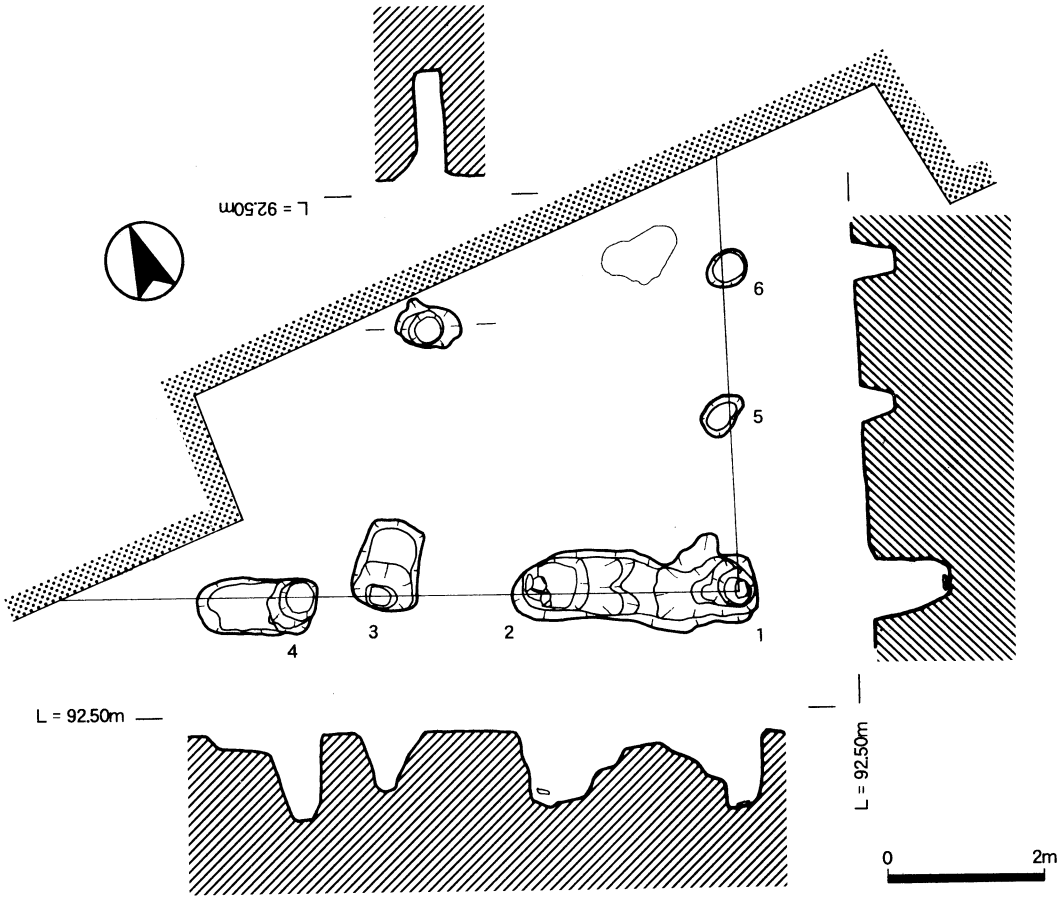
| 梁　　行<br>（1－7間　384cm）<br>（3－4間　378cm） | 桁　　間<br>（1－3間　494cm） | （4－8間　465cm） | 方向（N32°　E） |
|---|---|---|---|
| 1－8　172cm<br>8－7　212cm | 1－2　314cm<br>2－3　180cm | 4－5　157cm<br>5－6　47cm<br>6－7　179cm<br>7－8　82cm | P直径　60～85cm<br>P深さ　40～73cm<br>床面積　約18.3㎡ |

**第4表　掘立柱建物跡1計測表**

1　**掘立柱建物跡**（第8～10図）

**掘立柱建物跡1**（第9図）

C－1区に検出されたピットから，2×2間として復元されたものである。柱穴1－7間で梁行384cm，1－3間で桁間494cm，主軸はN32°Eである。南側の調査区外へ延びることが想定されたため，延長部の精査を行ったが，新たな柱穴は検出されなかった。埋土は茶褐色砂質土である。柱穴1と柱穴7には軽石が入り込んでおり、根石として入れ込まれた可能性がある。柱穴の埋土からは遺物の出土は認められていない。




第10図　掘立柱建物跡2

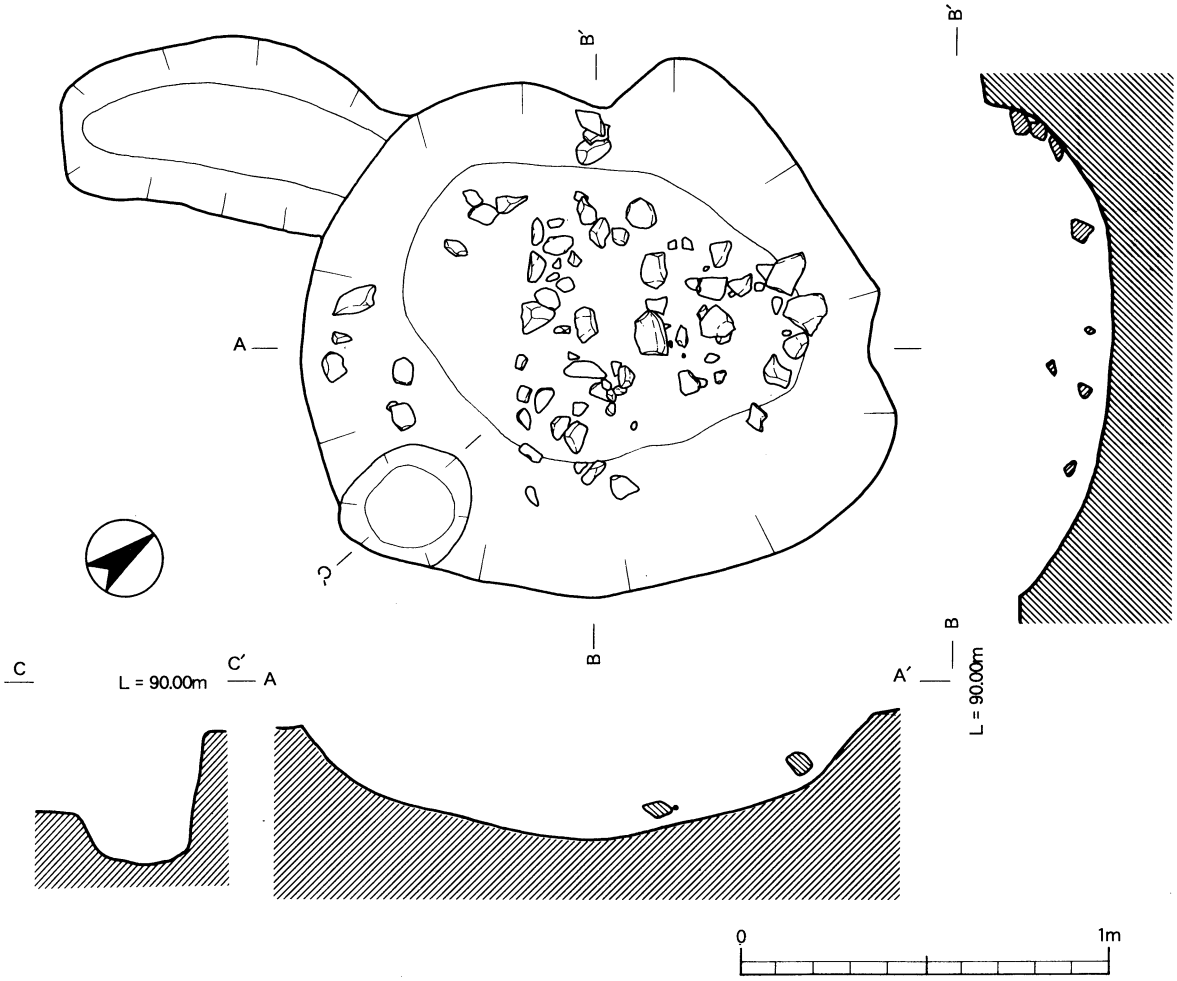
| 梁　　行 | | 桁　　間 | | 方向（N65° W） |
|---|---|---|---|---|
| 1－5 | 366cm | 1－2 | 221cm | P直径　60～90cm |
| 1－6 | 209cm | 2－3 | 180cm | P深さ 37～101cm |
| 5－6 | 157cm | 2－3 | 180cm | 床面積　　？ |
| | | 3－4 | 93cm | |

第５表　掘立柱建物跡２計測表

**掘立柱建物跡２**（第10図）

Ａ－２区に検出したピットから復元したものである。調査区北側へ延びる可能性があることから，梁行，桁間など全体の規模は不明である。主軸はN65°Wである。柱穴１・２は同じ掘り方をもち，途中から階段状に２つの柱穴として掘られている。掘立柱建物跡１号と同様，柱穴１，柱穴２には軽石が入っており，根石として入れ込まれた可能性がある。埋土は茶褐色砂質土である。柱穴４から煙管の吸口，柱穴６の埋土から青銅製の鈴，鞘口が出土している。

なお，Ｃ－３～４区に掘立柱建物跡に復元できる可能性をもつピットが検出されたが，掘り込みが浅く，復元するには至らなかった。




第11図　土坑1

## 2　土　坑（第８・11・12 図）

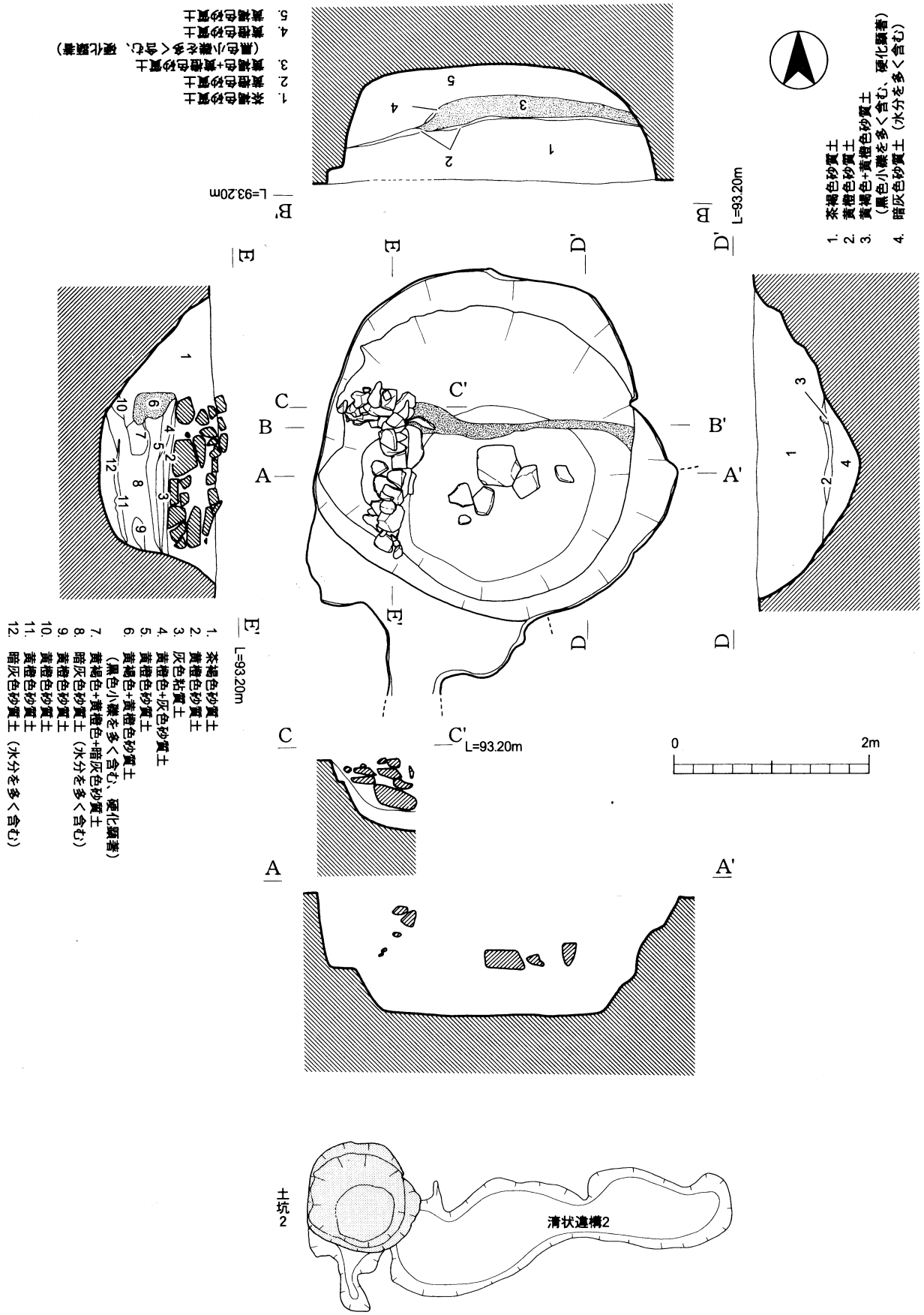
**土坑１**（第11図）

Ｂ～Ｃ－４区で検出された。長径1.53m，短径1.35m，深さ0.36mを測る。西側に短い溝状の張り出しをもつ。これは流水作用によってできたものと思われる。土坑内にピットが検出されたが，土坑との前後関係は不明である。埋土は茶褐色砂質土で，そのなかに軽石が遺構下面より若干浮いた状態で出土した。用途については不明である。

**土坑２**（第12図）

Ｂ－１区に検出されたもので，調査時に軽石石組土坑とよんでいたものである。長径3.77m，短径3.60m，深さ1.28mを測る。

土坑１と同様，埋土中に浮いた状態で軽石が多数入り込んでいたが，これらを取り除いた結果，土坑の西壁に沿ってＬ字状の軽石の石組遺構を検出した。石組を構成する軽石のなかには面取りされ，扁平な形状をもつものが含まれていたことから，人為的に積み上げられたものと判断した。埋土は，シラスを主体とする色調の異なった砂質土が堆積しており，軽石の石組の下部において顕著である。また石組の下部，埋土の中位には、帯状の硬化土層が認められた。この土坑から溝状遺構２が東へ延びており，水に関連した用途が考えられるが，詳細は不明である。埋土からは，摺鉢・捏鉢・植木鉢・土瓶片，染付片，小鐶，砥石が出土している。


1. 茶褐色砂質土
2. 黄橙色砂質土
3. 黄褐色+黄橙色砂質土
（黒色小礫を多く含む、硬化顕著）
4. 暗灰色砂質土（水分を多く含む）
L=93.20m
0
2m
1. 茶褐色砂質土
2. 黄橙色砂質土
3. 黄褐色+黄橙色砂質土
（黒色小礫を多く含む、硬化顕著）
4. 黄橙色砂質土
5. 黄褐色砂質土
土坑2
清状遺構2

第12図　土坑２

### 3　溝状遺構（第８図）

Ｃ－３～４区，Ｂ－２区，Ｃ－１～２区において，計３条検出された。

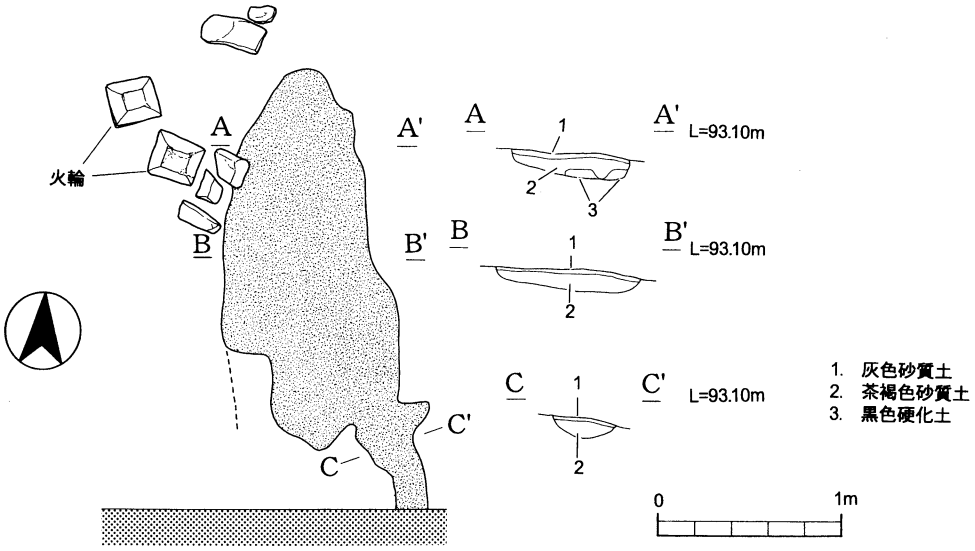
溝状遺構１は，南西方向から北東方向へ延びている。遺跡が開削され，平坦面を造成した際に形成された段部の直下に位置しており，排水のため利用されていたものと考えられる。検出した規模は長さ約17m，最大幅約2.1mである。埋土から磁器・染付・陶器など329点が出土している。本遺跡で検出した遺構のなかで最も遺物の出土量が多い。また，この溝状遺構内から土坑が２基検出されているが，用途については不明である。

溝状遺構２は，土坑２から東側へ延びているもので，残存長約10m，最大幅3,15mである。形態や埋土などの観察から，土坑２からの流水作用によって形成された可能性が高い。埋土は茶褐色砂質土で微粒の炭化物が含まれる。埋土内からは捏鉢・土鍋片，雁首が出土している。

溝状遺構３は，西から東へ延びている。検出規模は長さ6.95m，幅0.5mである。溝状遺構３の西側に掘立柱建物跡１が位置しており，検出面の傾斜の方向などを考慮すると，この溝は掘立柱建物跡１からの排水によって形成された可能性がある。

### 4　古道および五輪塔残欠（第８・13図）

古道は調査区南側のＣ－２区で１条検出された。検出規模は残存長約3.7m，最大幅約１mである。古道の西側に五輪塔の笠部などの残欠が出土したことから，これらの石塔（群）が散逸する以前に，参道として利用されていた可能性がある。この古道のほか，調査開始前に調査区のほぼ中央を南北方向に縦断し，南側の杉林へ延びる里道があったが（第６図），古道はこの里道が形成される以前に利用されたものであろう。また，後世の開削で段差を形成した際，この古道を削平している状況が認められることから，利用期間として中世から近世までの時代幅が考えられる。




第13図　古道および五輪塔残欠

## 5　焼土域（第８図）

Ｃ－２区，Ｂ－１区，Ｂ－３区の計３か所確認された。焼土の色調はいずれも黒色を呈する。焼土の層厚はきわめて薄く，微粒の炭化物を少量含んでいる。焼土域からの遺物の出土が認められず，時期判定は困難であった。

## 6　五輪塔群（第８図・図版１）

遺跡内に安置されていた五輪塔群の製作時期は，形態的に戦国期から近世にかけてのものと思われる。ただし，五輪塔としての体裁を保ってはいるものの，空・風輪や火輪などの組合せにおいて各時期のものが混在しており，後世に寄せ集められた可能性が高いと判断される。また，これらの五輪塔群周辺に積み上げられた残欠の中には無縫塔の一部や「奉開山之前　宝暦五亥廿一月廿八日」と刻まれた石碑が含まれており，遺跡内かその周辺に近世以降，寺が存在していた可能性を残している。なお，五輪塔群周辺やその下部についても掘り下げを行ったが，墓壙などの遺構は検出されなかった。

| No. | 石塔の種類 | 構成部位・銘など |
|---|---|---|
| 1 | （石塔残欠） | 残欠片 |
| 2 | 五輪塔 | 空輪・風輪・火輪・火輪 |
| 3 | （石塔残欠） | 残欠片の積み重ね |
| 4 | （石塔残欠） | 残欠片の積み重ね |
| 5 | （石塔残欠） | 残欠片の積み重ね |
| 6 | （石塔残欠） | 残欠片の積み重ね |
| 7 | 近世墓 | 刻字あり　解読不能 |
| 8 | （石塔残欠） | 残欠片の積み重ね |
| 9 | 五輪塔 | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪 |
| 10 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪 |
| 11 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪 |
| 12 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪・台石 |
| 13 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪・台石 |
| 14 | | 火輪・水輪・地輪・台石　台石に「天・地・前」の刻字あり |
| 15 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪・台石 |
| 16 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪・台石 |
| 17 | | 空輪・風輪・火輪・水輪・地輪 |
| 18 | （五輪塔残欠） | 空輪・火輪 |
| 19 | （五輪塔残欠） | 空輪・風輪・火輪・火輪 |
| 20 | (五輪塔・石塔残欠) | 空輪・風輪・火輪・塔身・火輪　塔身に「聯翁」「卍」の刻字あり |
| 21 | （五輪塔残欠） | 空輪・風輪・火輪 |
| 22 | 手水 | |

**第６表　五輪塔群観察表**

## 第４節　出土遺物

確認調査の結果，明確な遺物包含層が認められなかったため，遺構内から出土した遺物を除き，すべて一括して取り上げを行った。出土した遺物は，磁器（染付）・陶器・青磁・土師器・青銅製品・鉄製品・土製品・窯道具・石器などで，近世から近代にかけての遺物が中心である。

| 種　類 | 点数 | 備　　考 | 種　類 | 点数 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 石　　器 | 2 | 打製石鏃・磨石 | 鉄　製　品 | 29 | 鎌・釘・その他 |
| 土　師　器 | 74 | 灯明皿・皿 | 人　　形 | 1 | 土製 |
| 青　　磁 | 2 | 皿 | 砥　　石 | 10 | 石板状石製品含む |
| 白　　磁 | 2 | 坏 | 銅　製　品 | 6 | 煙管・鈴・小鐶・鞘口 |
| 染　　付 | 180 | 碗・皿・鉢 | 瓦 | 24 | 平瓦 |
| 陶　　器 | 891 | 碗・皿・鉢・土瓶 | 窯　道　具 | 1 | |
| 瓦　　器 | 2 | 羽釜 | 貝　　殻 | 1 | |
| ガラス製品 | 11 | 瓶 | そ　の　他 | 2 | 五輪塔笠部 |
| 合　　計 | | | | | １，２３８ |

**第７表　出土遺物一覧表**

**染　付**（第14図～第20図　１～49）

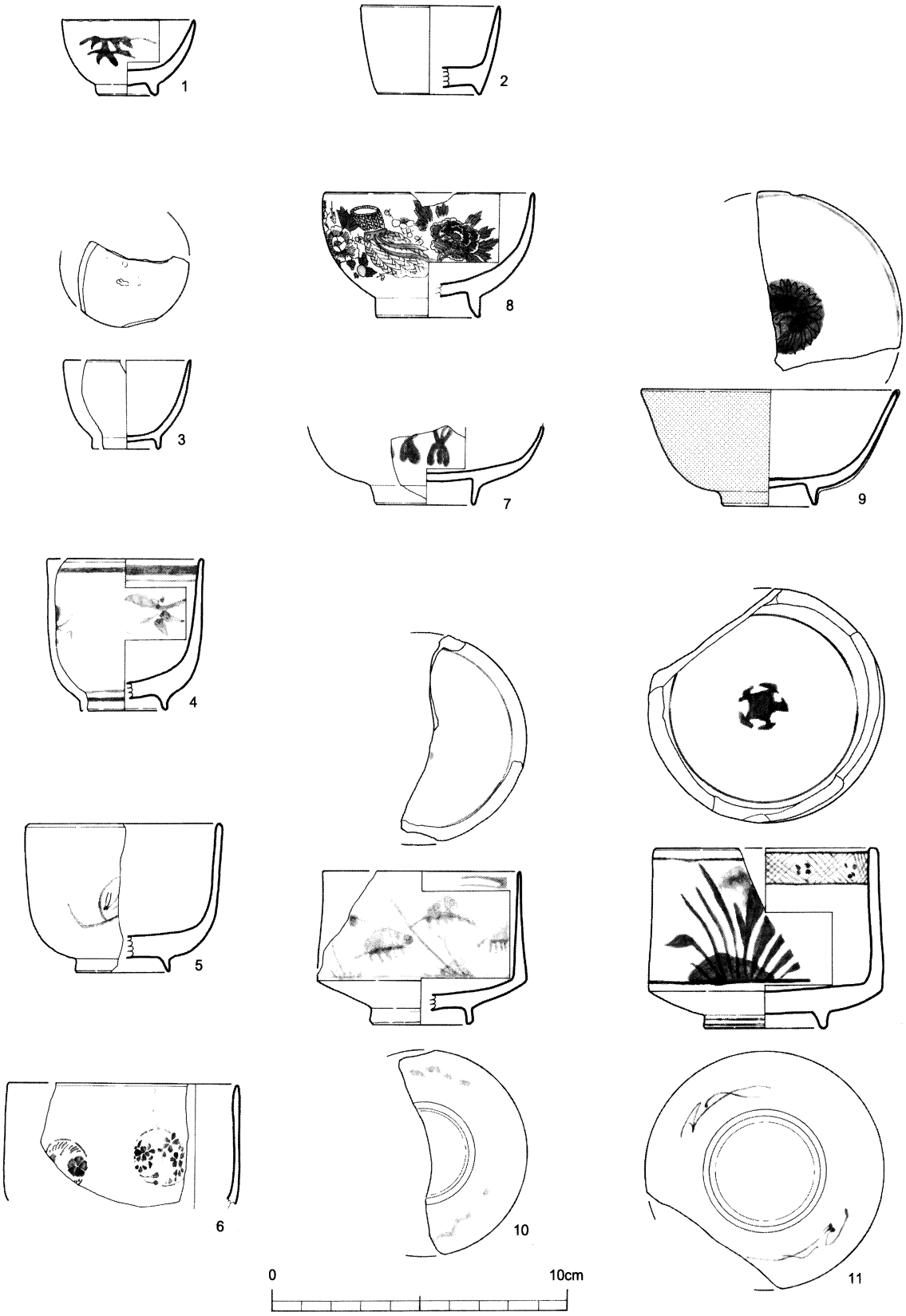
染付片は180点出土している。小片についてもできるだけ推定による復元を行った。図化した遺物については，すべて轆轤による成形が行われている。型起こしによると思われる小皿片が出土しているが，小片のため図化できなかった。器類は碗類・皿類・鉢類・瓶類などに分類される。製作地は，手描きの染付に肥前系（波佐見系を含む），在地（平佐系・苗代川）系が多く，銅版転写の染付は瀬戸・美濃系に多い。ただし，型紙摺による染付は産地同定が困難であった。このほか，中国製染付が２点出土しているが，これらのものを除けば，染付の製作年代はおおむね18世紀前半から19世紀後半の範疇におさまるものと思われる。なかでも，いわゆる肥前系染付は，18世紀後半から19世紀初頭のものが主体である。胎土は白・灰白・灰色系の色調を呈する。以下，器類ごとに器形・装飾技法・製作地・製作年代などについて述べる。なお，今回，胎土分析において半磁半陶の区別は特に行っていない。

**(1) 碗　類**（第14図～第17図　１，４～34）

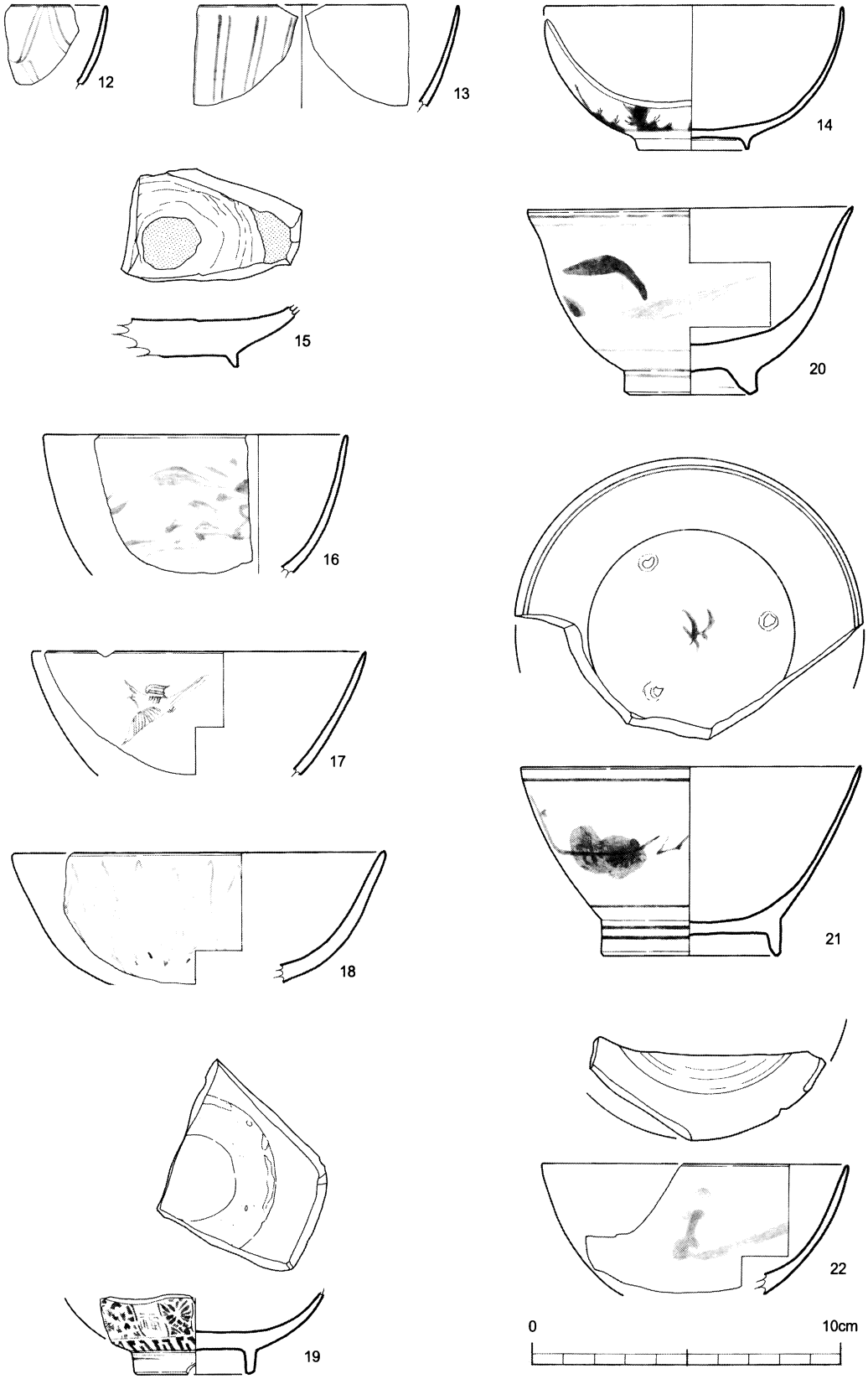
１・４～34は碗類である。口径５cm未満のものを小坏，５～9.1cmのものを小碗，9.1～14.5cmのものを中碗として分類した。碗類はすべて総釉であるが，畳付は露胎する。

**小坏・小碗**（１・４～11）

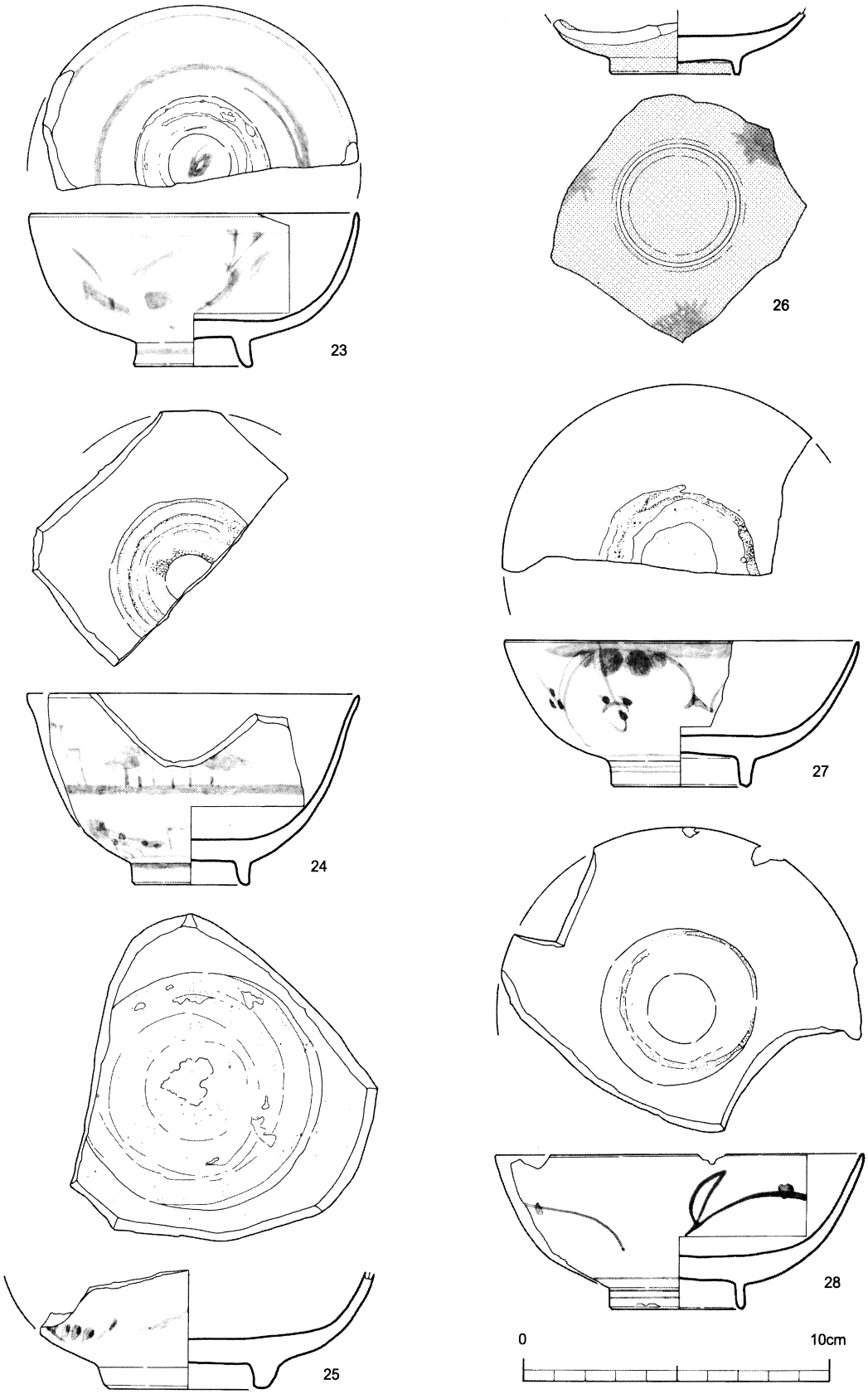
１は丸形の小坏で，外面にコバルトによって「笹文」を施す。内外面にハツが認められる。明治以降の製作であろう。４～11は小碗である。５・６は筒丸形の小碗である。５は外面に「松・笹文」を施し，高台畳付には砂が付着している。６は外面に型紙摺によって「丸に花文」が施される。いずれも湯飲み碗である。４・８は丸形の小碗で，４は内外面に貫入がみられる。19



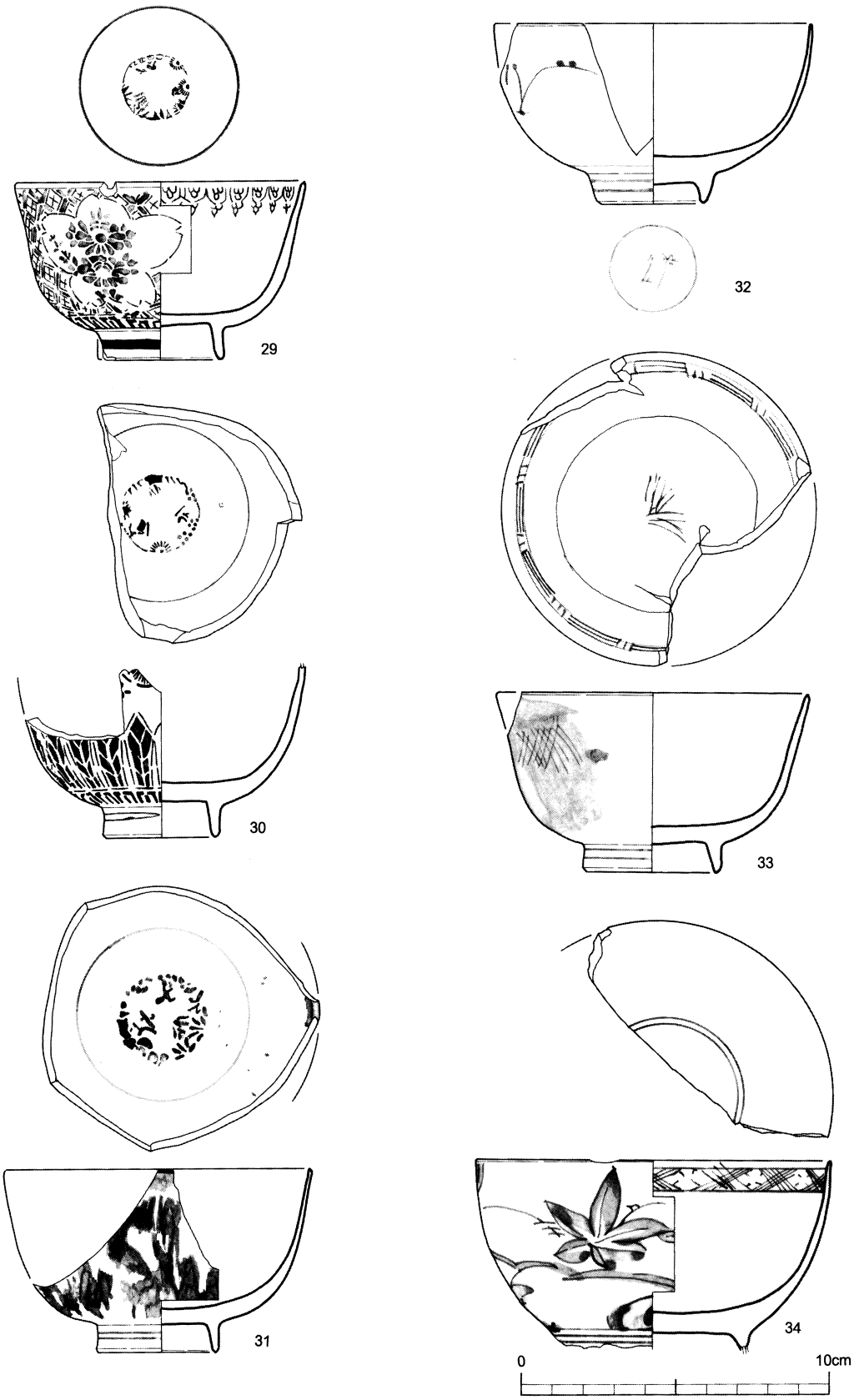

第14図　染付１（小坏・小碗）




第15図　染付2（中碗1）




第16図　染付3（中碗2）




第17図　染付4（中碗3）

世紀前半から中葉のものと思われる。８は外面に銅版転写によって「籠・花文」が施される。瀬戸・美濃系で明治後半以降の製作であろう。７は外面に「染色体文」を施す。肥前系で19世紀後半から明治期の製作であろう。９は端反形の小碗で，外面には青磁釉が掛けられ，口唇部は口銹で装飾される。見込に線刻で文様を施した後，「団鶴文」を描いている。10・11は半筒形の小碗である。10は外面に「雪持笹文」を施す。湯飲み碗で18世紀末から19世紀前半の製作である。11は見込に蒟蒻印による「五弁花文」，口縁部内面に「四方襷文」，外面に「草花文」が施される。肥前系の湯飲み碗で18世紀後半から19世紀初の製作である。

**中碗・大碗**（12～24，26～34）

12～24，26～34は中碗，25は大碗として分類した。形状は12・13・17・18・22・23・27・28・34が丸形，14・32は浅半球形，７・９・16・20・24・29・30・31・33が端反形を呈する。また，15・19・22・23・24・25・27・28の見込みには，蛇目釉ハギが施される。

12は外面に「二重網目文」を施す。肥前系である。13は外面に「格子目文」，口縁部内面に圏線が描かれる。肥前系で19世紀前半の製作であろう。

14は外面に「若松文」を施すもので器壁が薄い。肥前系で18世紀前半の製作と思われる。15は器面全体に青磁釉が掛かり，見込に蛇目釉ハギを施した後，アルミナが塗布されている。肥前系で18世紀末から19世紀後半にかけての製作であろう。16は肥前系で17世紀後半から18世紀前半の製作と思われる。

18は外面に「網目文」を施す。焼成が不良で呉須の発色が弱く，器壁も厚いことから在地産の可能性がある。19は外面に型紙摺によって「福寿・角蓮弁文」が施される。明治前半頃の製作である。

21は広東形の中碗で，外面に「梅文」が描かれる。見込には窯詰の際のハマ痕が残り，内外面に貫入がみられる。23は太めの筆で外面に文様を描き，見込に帯線を描く。蛇目釉ハギを施した後，アルミナが塗布されている。幕末以降の製作であろう。

24は外面にコバルトで「松・帆かけ舟」が描かれ，器面の内外面には貫入がみられる。19世紀前半から明治頃に南京皿山窯で焼かれた製品であろうと思われる。25は大碗として分類したもので，見込に蛇目釉ハギを施す。平佐系で19世紀前半以降の製作であろう。

27・28は波佐見系のいわゆるくらわんか碗である。胎土は灰白色を呈する。いずれも見込に蛇目釉ハギが施され，砂が付着している。18世紀後半から19世紀初頃の製作であろう。

29～31は型紙摺で，29は外面に「区画文・花文」など，見込に「松竹梅文」，口縁部に「輪宝繋文」を施す。30は見込みに「松竹梅文」，外面に「角蓮弁文」などを施す。いずれも明治前半頃の製作であろうと思われる。

32は外面に「唐草文」，高台内面には「大明年製」銘が記される。肥前系で18世紀後半の製作と思われる。33は内面に「松葉文」，口縁部に「雷文」，外面に独特な濃絵が描かれる。幕末以降の製作で，在地産の可能性がある。34は内面口縁部に「四方襷文」と圏線，外面に「水仙・流水文」が描かれる。18世紀後半以降の製作であろう。

**(2) 皿　類**（第18図～19図　35～43）

35～43は皿類である。口径はいずれも7,6～13,6cmの範疇におさまるもので，器種は小皿に分類される。形状は35～41・43が丸形，42が玉縁形を呈する。42・43は見込に蛇目釉ハギが施され，38・40は蛇目凹形高台を呈する。皿類はすべて総釉であるが，畳付は露胎する。

35は銅版転写によって内面に「草花・太極文」が施され，高台畳付には砂が付着している。明治以降の製作である。36は銅版転写によって内面に「梅文」や渦状の連続文が施され，口縁部には口銹装飾が加わる。瀬戸・美濃系で明治後半から大正頃の製作である。37は内面に呉須で「山水図」，外面に「折松葉文」を描く。高台畳付に砂の付着が認められる。肥前系で18世紀末から19世紀前半の製作である。38は内面に「葉文」などが描かれる。見込には砂が付着し，外面には窯傷がみられる。18世紀後半以降製作で在地産の可能性がある。39は内面に「楼閣山水図」を描く。見込にはハマ痕が残り，内外面には貫入がみられる。平佐系で18世紀後半以降の製作であろう。40は内面に「雲・樹木文」を描き，見込にはハマ痕，内外面には貫入が認められる。平佐系で18世紀後半以降の製作であろう。41は内面に「蔓草」，外面に「唐草文」などが描かれ，高台畳付には砂が付着している。波佐見系で18世紀前半から中半頃の製作であろう。42は内面に「薄・格子文」を描くが，呉須の発色が弱い。見込には蛇目釉ハギの後，アルミナが塗布される。高台畳付には砂が付着している。19世紀前半頃の製作である。43は内面に「斜格子文」が描かれる。波佐見系で18世紀後半以降の製作であろう。

**(3) 鉢　類**（第20図 48，第19図 44・45）

**小　鉢**（48）

48は端反形の小鉢で，口径は14.7cmである。見込に蒟蒻印による「五弁花文」および圏線，外面に「牡丹文」が描かれる。外面には焼成時に他製品と溶着した痕があり，研磨によって整形している。内外面にはハツが認められる。肥前系で18世紀後半頃の製作である。

**蓋　物**（45）

45は腰張形の蓋物であろう。口縁部は無釉で，外面に「花文」が描かれる。肥前系である。

**火　入**（44）

44は筒形の火入である。内面は無釉で，外面に貫入がみられる。明治以降の製作であろう。

**(4) 蓋　類**（第19図　46～47）

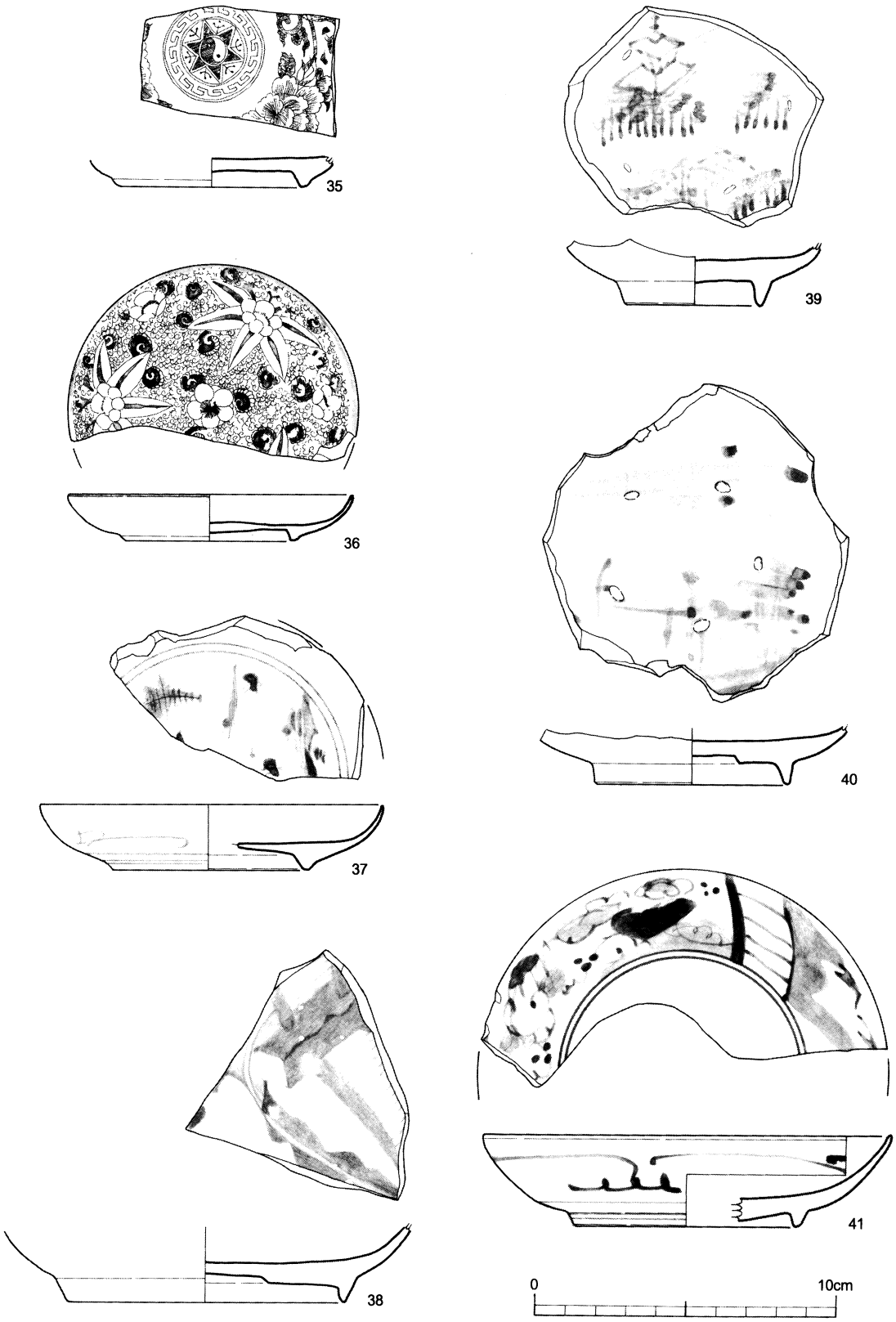
46は端反碗（第16図 24）の蓋である。外面にコバルトで「松・帆かけ舟」が描かれ，見込には蛇目釉ハギが施される。南京皿山窯製で，19世紀前半から明治頃に焼かれたものであろう。47は蓋物の蓋で，天頂部に橋摘みがつくタイプである。外面に「花唐草文」が施される。肥前系で18世紀後半の製作である。

**(5) 瓶　類**（第20図　49）

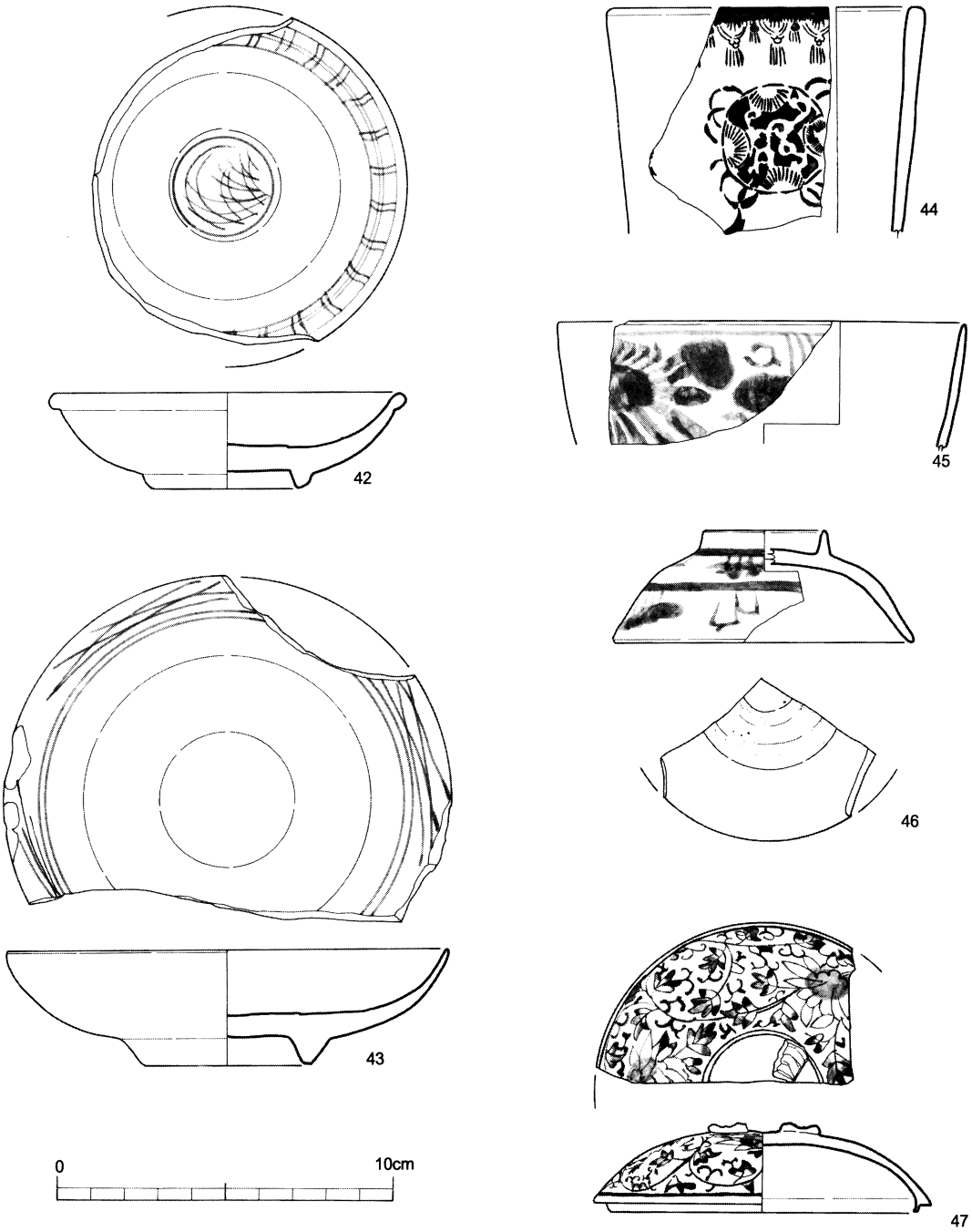
49は仏花瓶である。外面に「蓮花文」などが施される。明治以降の製作である。

**白　磁**（第14図　2～3）

2・3は白磁の小坏である。2は桶形，3は筒丸形を呈する。3は見込に砂が付着している。幕末以降の製作であろう




第18図　染付5（小皿1）

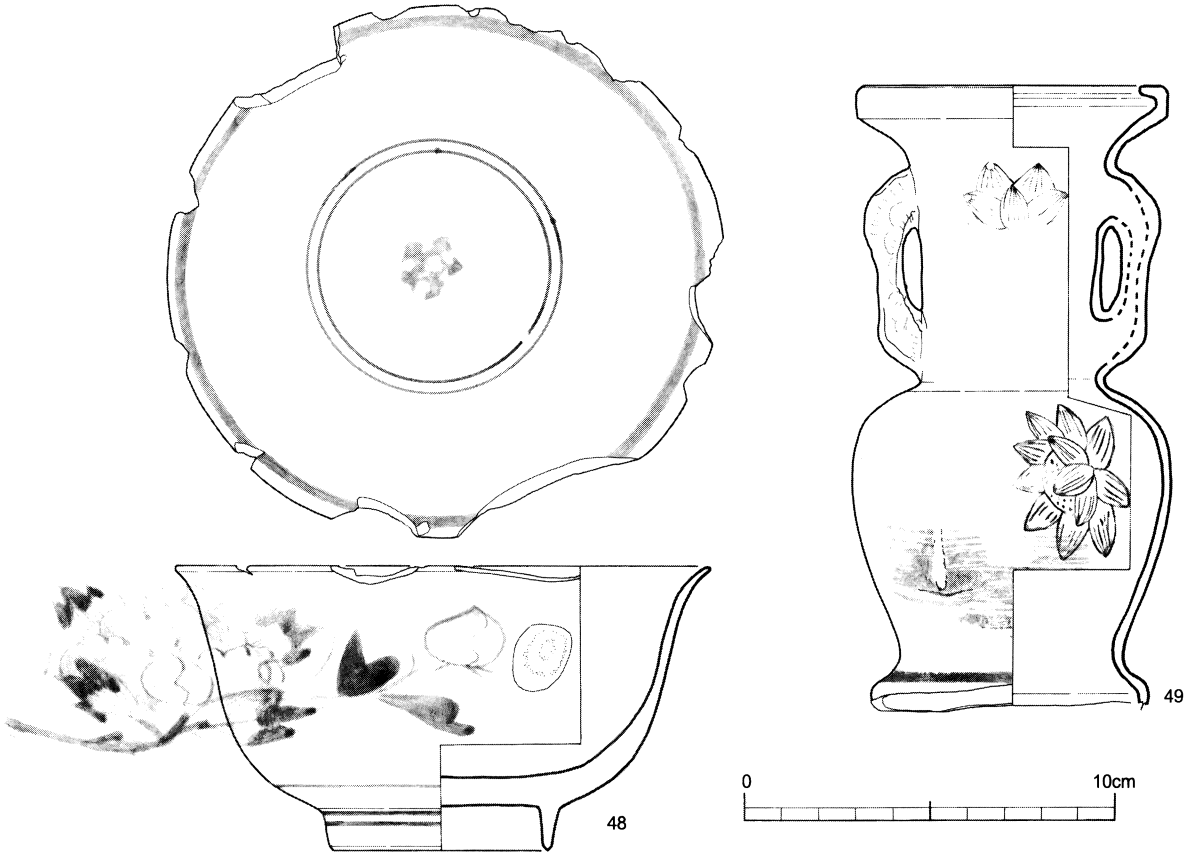



第19図　染付6（小皿2・火入・蓋物・蓋）

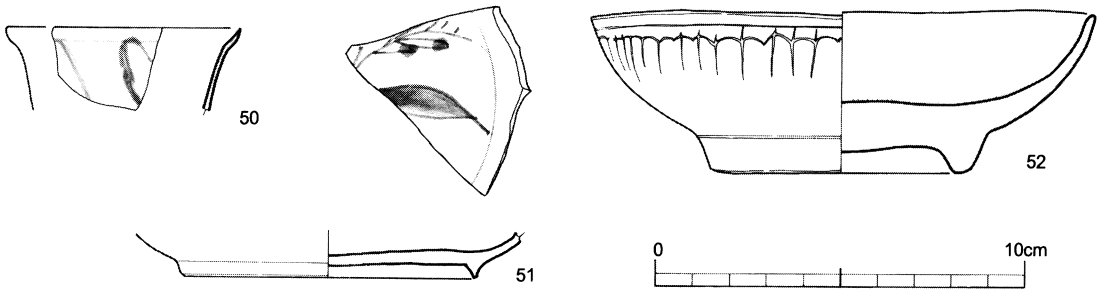
**中国製磁器**（第21図　50～52）

中国産磁器は染付２点，青磁１点の計３点出土している。

50・51は染付である。50は端反形の小碗として分類した。17世紀後半から18世紀前半の製作であろう。51は丸形の小皿である。内面に「草花文」を施す。16世紀後半から17世紀初の製作である。




第20図　染付７（小鉢・仏花瓶）




第21図　中国製磁器（染付・青磁）

いずれも景徳鎮窯系である。

52は青磁皿の完形品である。器面には剣先蓮弁が施され，胎土は灰白色を呈する。龍泉窯系で15世紀後半から16世紀前半の製作であろう。高台内面は無釉で，高台に砂が付着している。

**陶　器**（第22図～第28図　53～110）

陶器片は891点出土しており，その内訳は薩摩焼のいわゆる白薩摩が18点，黒薩摩が870点，肥前系と思われる仏花瓶が１点である。

黒薩摩は器壁が厚く，釉薬は暗緑（緑黒）色系，暗黄（オリーブ）色系，胎土は灰色および赤褐色系の色調を呈するものが多い。また，白薩摩の釉薬は透明で，胎土は灰白色を呈する。いずれも内外面に微細な貫入がみられる。

器種は，鉢類・甕類・壺類・蓋類・瓶類・鍋類などに分類されるが，なかでも鉢類の出土量が多い傾向にある。製作地は苗代川系が主体で，龍門司系など在地系の他産地の製品が少量含まれる。これらの陶器の製作年代はおおよそ18世紀から19世紀代であろうと思われる。

**(1) 甕　類**（第22図　53～57）

53～57は甕である。いずれも口寄形の口縁形態をもち，すべて口縁部上面に釉ハギが施される。

53・54は頸部切立形で口縁部外帯に沈線が２条施され，頸部と胴部の境に断面三角状の稜をもつ。55は頸部に断面三角突帯が２条施される。56は口縁部上面に目跡が３か所認められ，口縁部外面に沈線７条，頸部に断面三角突帯が２条施される。溝状遺構１からの出土である。57は頸部に３条の微隆起の突帯をもち，胴部に断面蒲鉾状の突帯と指頭によって刻みをつけた突帯の２条が巡る。頸部の一部は露胎する。

**(2) 鉢　類**（第23図～第26図　58～81）

**摺　鉢**（58～74）

58～74は摺鉢である。口縁形態によって，61・65・66・68・69・70・73をくの字状，58・59・60・62・63・67・71・74を逆Ｌ字状，64・72はＴ字状に分類した。口縁部上面にはすべて釉ハギが施される。逆Ｌ字状口縁のものには，口縁上面に強いナデによる稜線を有するものがある。装飾は口縁部下に１～３条の沈線，１～２条の突帯を施すものがある。内面の櫛目は，横方向に刷毛目状の調整を施した後，縦方向に掻かれるものが中心である。櫛目範囲は口縁部直下まで施されるものと，口縁部下に２～３㎝の間隔をおいて施されるものに分けられる。

74は口縁部の一端を指頭による押さえによって片口に仕上げている。

**捏　鉢**（75～79）

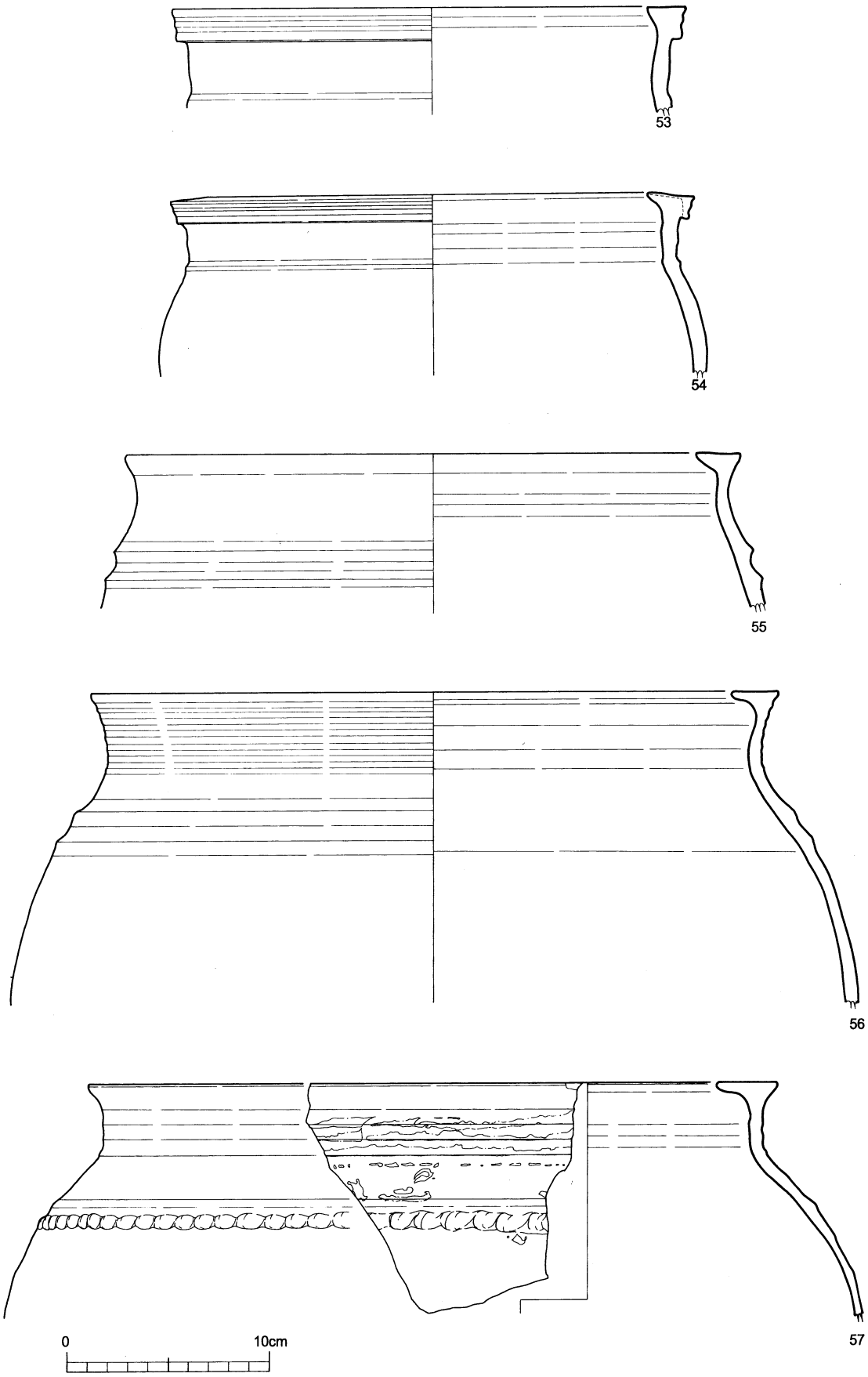
75～79は捏鉢である。口縁部形態はいずれも逆Ｌ字状を呈し，口縁部上面に釉ハギが施される。77～79は口縁部下を２～３条の沈線によって装飾する。

**植木鉢**（80・81）

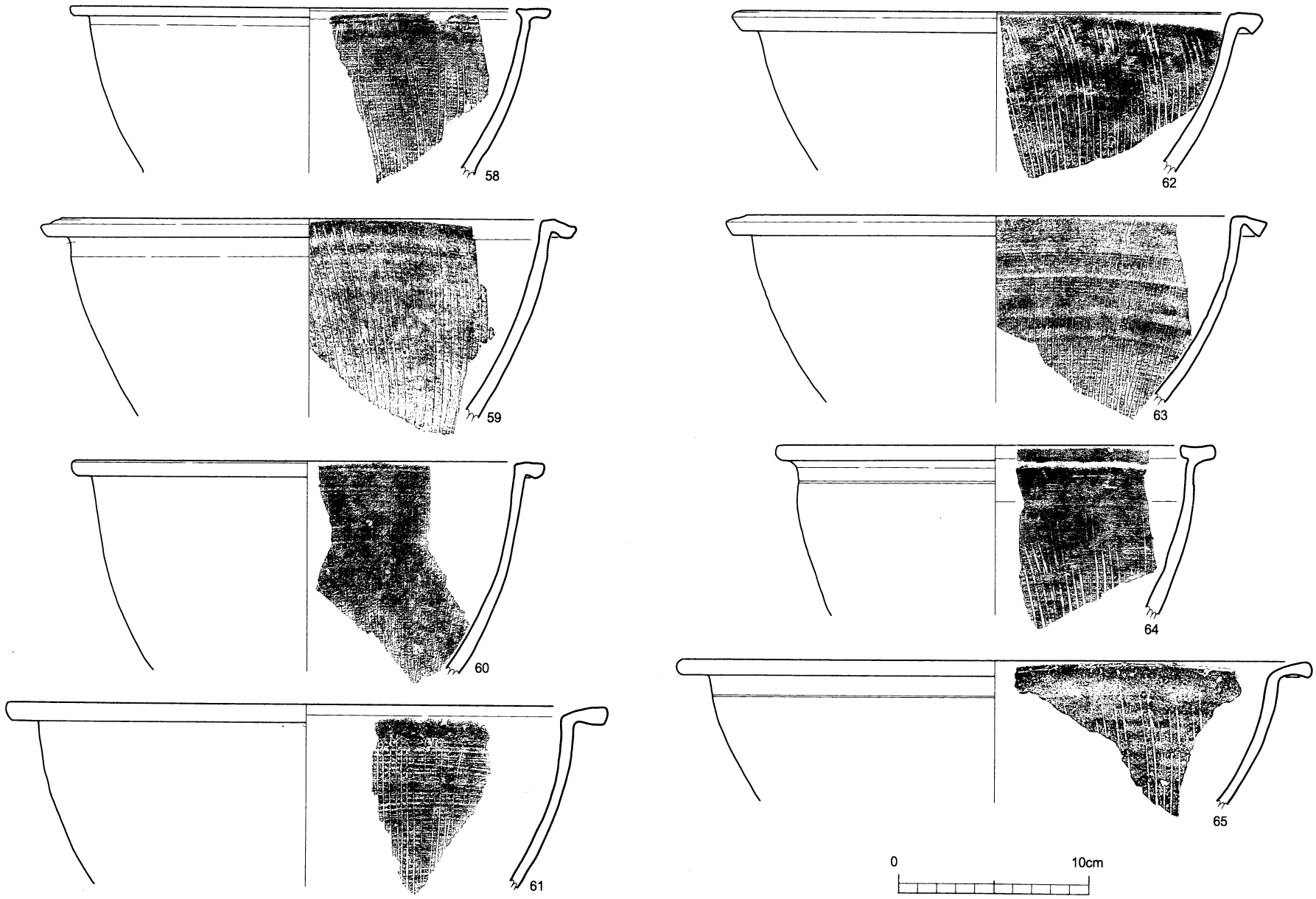
80・81は植木鉢である。80は口縁部に突帯を貼り付けた後，突帯の上下を指でつまむことで波状の装飾効果を持たせている。81も同様の突帯をもち，突帯下に２条の沈線を施している。

**(3) 壺　類**（第26図　82～87）

82～87は壺類である。口縁形態は82が短い逆Ｌ字状，85は口寄形を呈する。86は無頸壺であろう。87は土瓶の可能性がある。

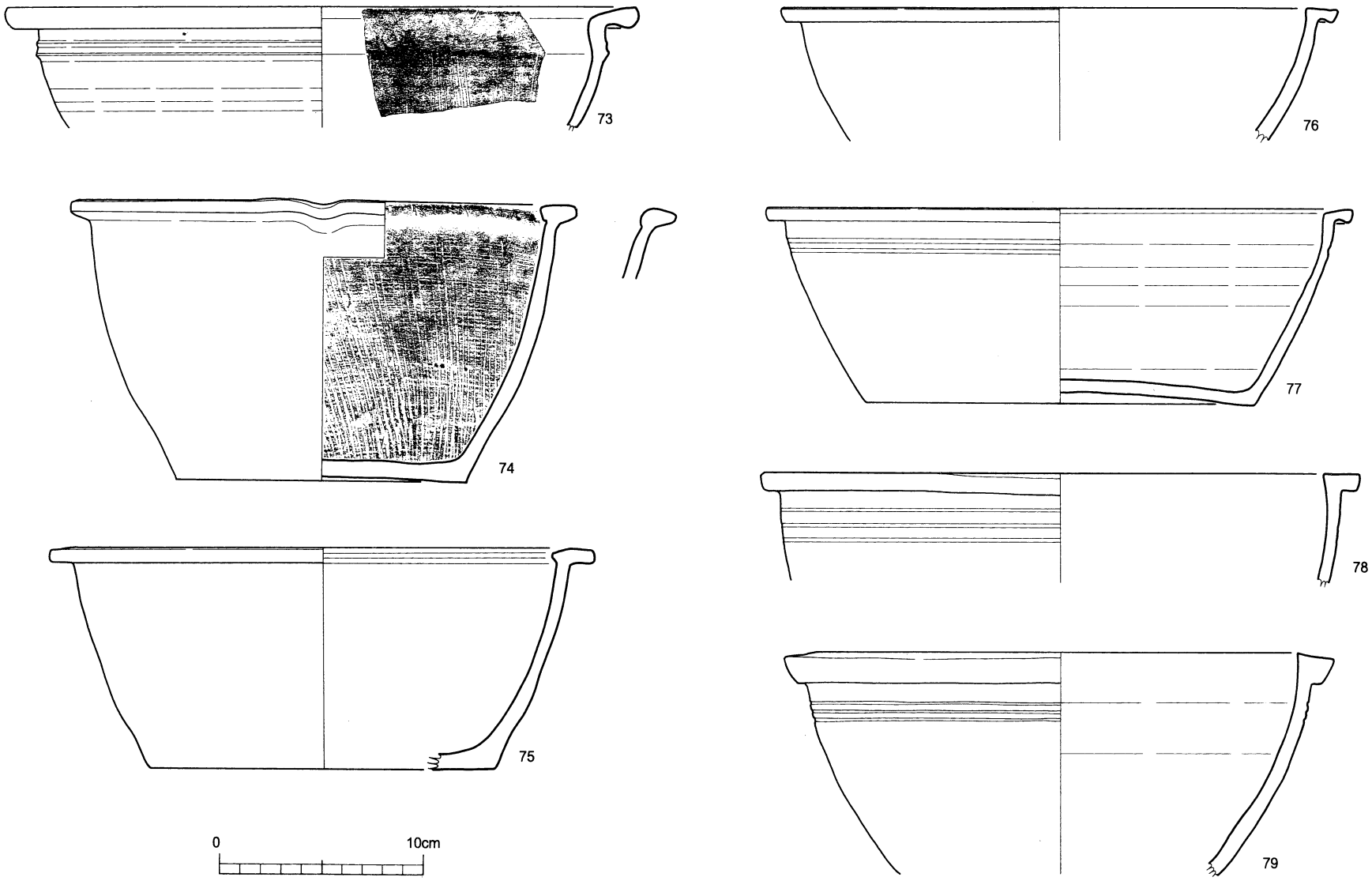



第22図　陶器1（甕）

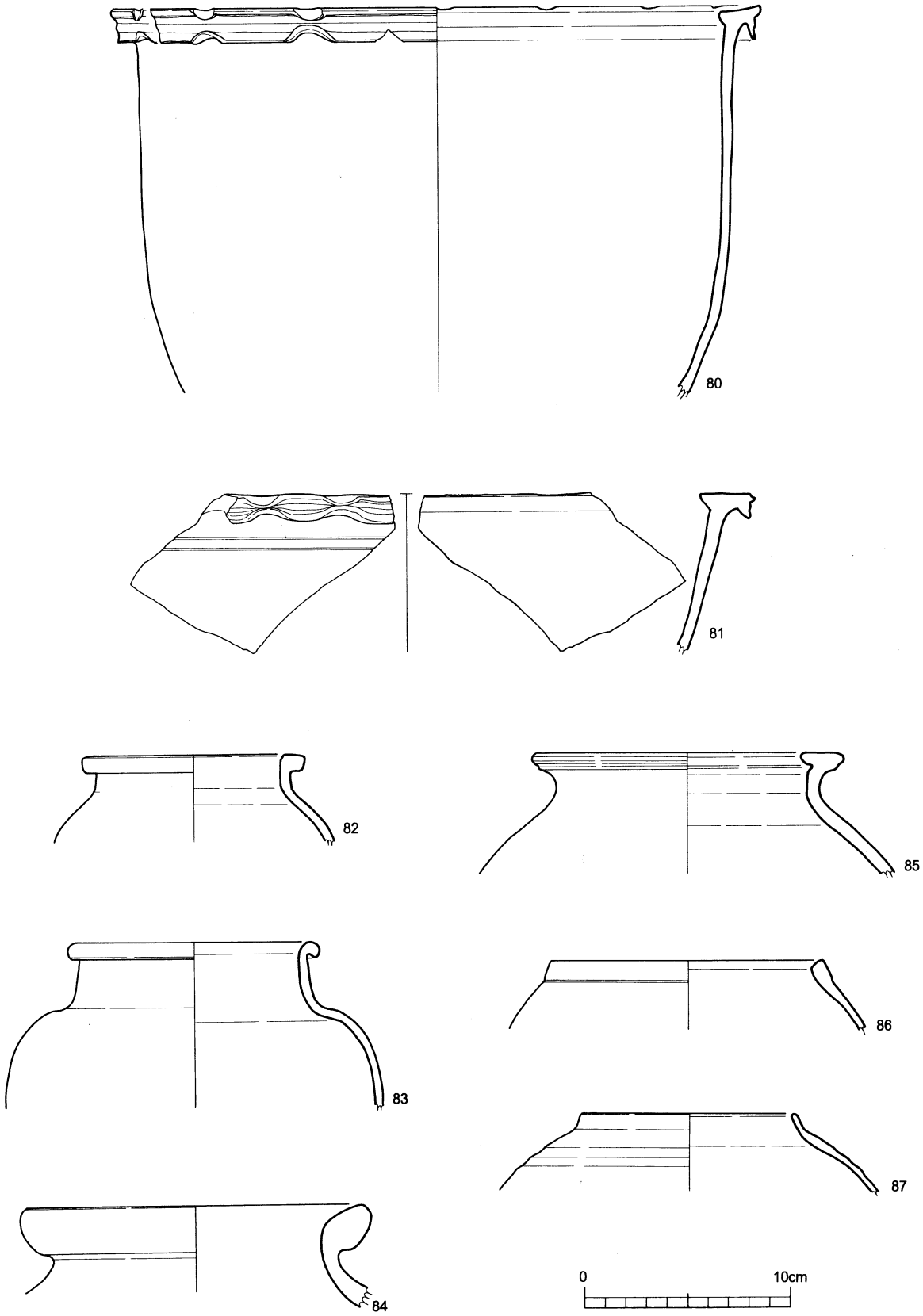



第23図　陶器2（摺鉢1）

第24図　陶器3（摺鉢2）




第25図　陶器4（摺鉢3・捏鉢）




第26図　陶器5（植木鉢・壺）

**(4) 碗　類**（第27図　88・90～92）

88は白薩摩の小碗である。形状は丸形を呈し，高台畳付は露胎する。胎土は灰白色で，内外面に微細な貫入が入る。溝状遺構１からの出土である。90は丸形の中碗である。焼成が不良で釉薬は黄褐色，胎土が明赤褐色を呈する。91は黄褐色の釉薬が掛けられ，高台は露胎する。見込には砂が付着している。龍門司系であろうと思われる。92は黒褐色の釉薬が掛けられ，見込に蛇目釉ハギが施される。腰部以下は露胎する。

**(5) その他**（第27図　93～107，第28図　108～110）

**皿**（93）

93は平形の小皿である。暗褐色の釉薬が掛けられ，外面は口縁部以下が露胎する。見込に窯詰めの際の目跡が残る。溝状遺構１から出土した。

**火　鉢**（94・110）

94は円筒形の火鉢で，暗灰黄色の釉薬が掛けられる。溝状遺構１からの出土である。110は桶形の火鉢であろうと思われる。口縁部は鰐縁状を呈し，外面と口縁部内面に黄橙色の釉薬が施される。底部は上げ底気味で，外面に刷毛目による調整痕が残る。やや不鮮明であるが胴部に「明治□年六月二□日」の墨書が描かれている。

**花　瓶**（89・95）

89は白薩摩の花瓶である。胎土は灰白色で，内外面に微細な貫入が認められる。高台畳付は露胎する。95は仏花瓶である。頸部に２条の沈線と胴部に刷毛目が施される。耳が欠落しており，頸部は露胎する。肥前系で17世紀末から18世紀前半の製作である。

**蓋　類**（96～103）

96～101は土瓶，いわゆる茶家の蓋で苗代川系である。

**土　瓶**(104)

104は土瓶である。胴部から底部にかけてススの付着が顕著である。内面には荒い整形痕が残る。土坑２からの出土である。

**土　鍋**(105)

105は土鍋である。口縁部に紐状の双耳が貼り付けられる。内外面に光沢の強い褐色の釉薬が施されるが，胴部中央から底部は無釉となる。煤の付着等は認められない。

**盤**（106）

106は盤として分類した。暗緑色系の釉薬が施される。口縁部の１か所を指頭でつまみ，片口状に仕上げている。溝状遺構１からの出土である。

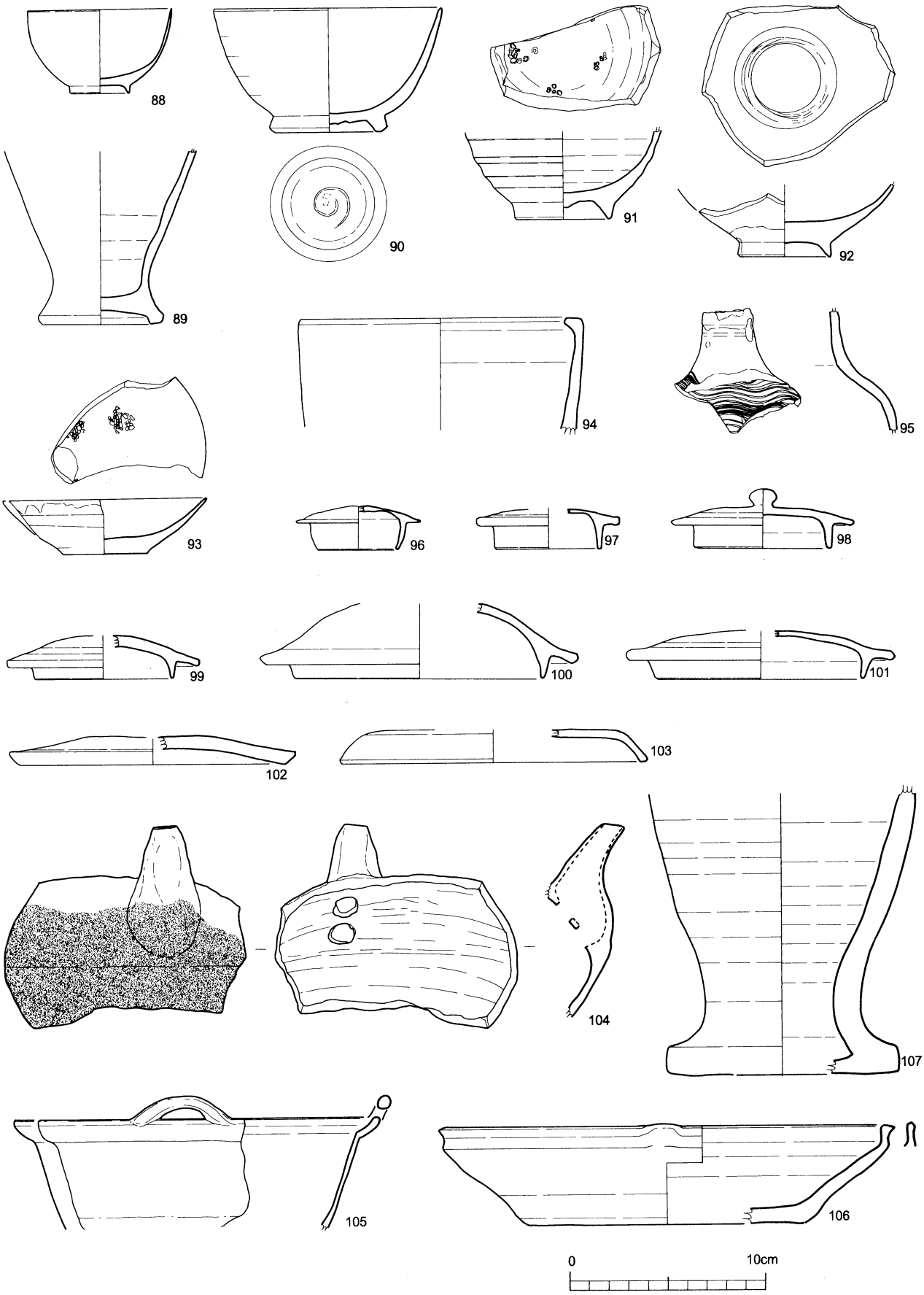
**不明容器**（107）

107は底部と思われる部分が欠損しており，不明容器とした。光沢の強い黄褐色系の釉薬が内外面に施される。

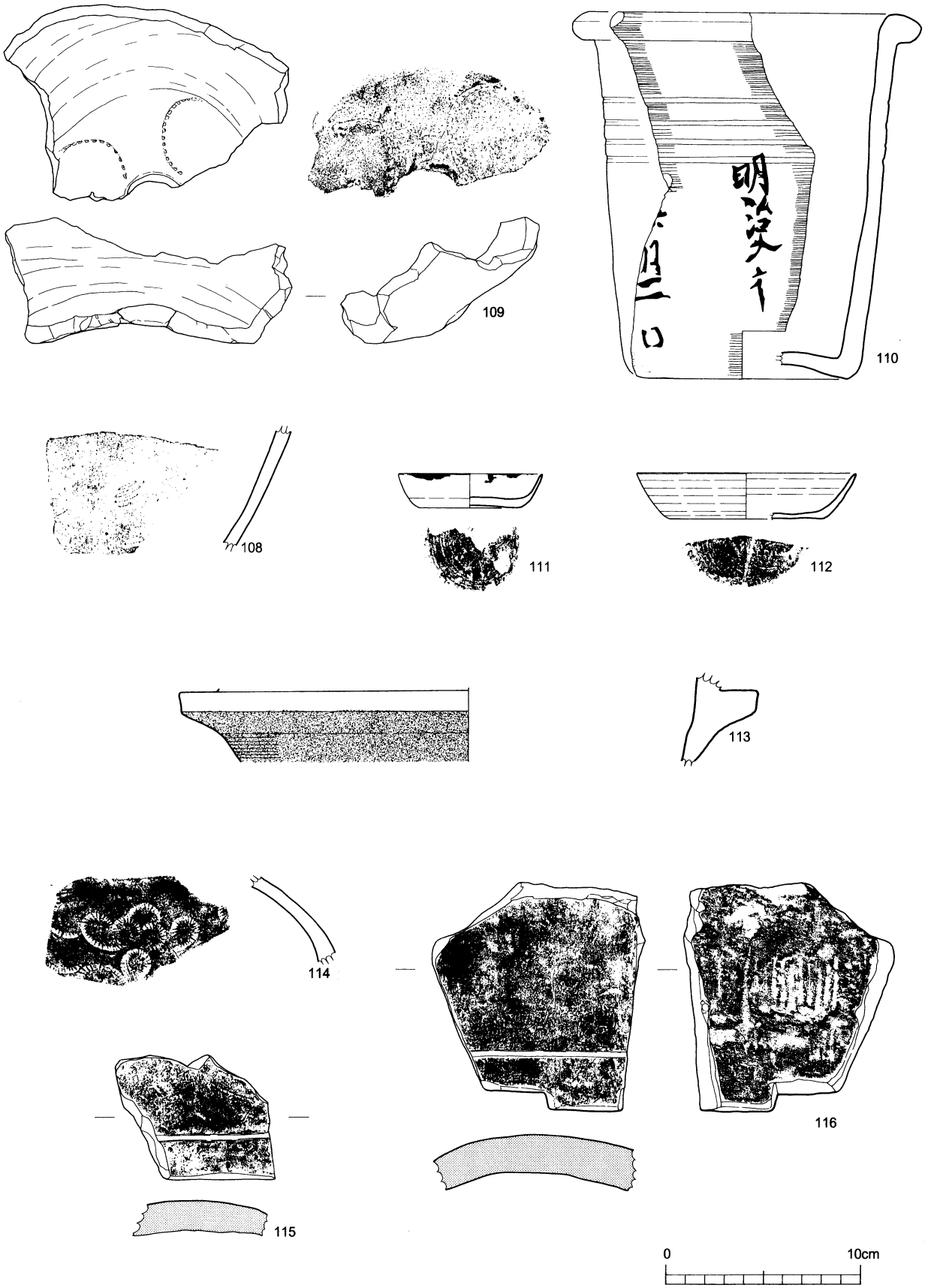
**貝目痕のある陶器片**（108・109）

108は捏鉢の胴部片である。土坑２から出土したものである。胴部外面に窯詰の際の貝目痕が残る。

109は植木鉢の底部片である。貝目痕が内面に２か所，底部外面に１か所認められる。いず




第27図　陶器6（碗・皿・土瓶類・その他）




第28図　陶器7・土師器・瓦器・瓦

れも苗代川系である。

**土師器**（111・112）

土師器片は74点出土しているが，ほとんどが細片でなかには表面が摩耗しているものも見受けられた。これら土師器片のうち，比較的状態が良く復元可能なもの２点を図化した。

111・112は灯明皿である。111は口径75㎜，器高は18㎜で，外面に刷毛目による調整痕が残る。口縁部の内外面に黒く焼けた跡があり，ススの付着が認められる。胎土はにぶい橙色を呈する。112は口径113㎜，器高24㎜で，外面はヨコナデによる調整が行われている。胎土は黄橙色を呈する。いずれも糸切り底である。

**瓦　器**（113・114）

113は羽釜の鍔部分である。瓦器質で胎土は灰色を呈する。鍔の下面にはススが付着し，刷毛目の調整痕が残る。鍔は幅19.5㎜，厚さ21㎜を測る。114は瓦器の胴部片と思われる。外面に巻貝を回転させて文様を付している。

**瓦**（115・116）

115・116は瓦である。いずれも表面に１条の沈線が施される。115の裏面には掻痕が残る。

**(5) 金属製品・その他の遺物**（第29図　117～130，第30図　131～133 ）

**青銅製品**（117～122）

117～119は煙管の一部である。117は青銅製の雁首で刻みたばこの装填部分にあたる。溝状遺構２からの出土である。118・119は青銅製の吸口である。いずれも一枚作りで，119は雁首をつなぐ羅宇竹の一部が残存している。掘立柱建物跡２の柱穴４から出土した。製作技法や形態分類に従うと117・119は18世紀後半頃，118は19世紀以降の製作であろうと思われる。

120は青銅製の鈴で，底部が欠損している。掘立柱建物跡２の柱穴６から出土したものである。121は錫杖の小鐶と思われる。土坑２から出土した。122は鞘口である。掘立柱建物跡２の柱穴６から出土した。

**鉄製品**（123～125）

123は溝状遺構１から出土したもので，刀子の可能性を残す。124は鉄製の鎌であろう。125は鉄製の鍋の可能性がある。内面に調整痕が残る。

**人　形**（126）

126は土製の人形である。一部が剥落しているが，形態的な特徴から「恵比寿」像であろうと思われる。

**インク瓶**（127）

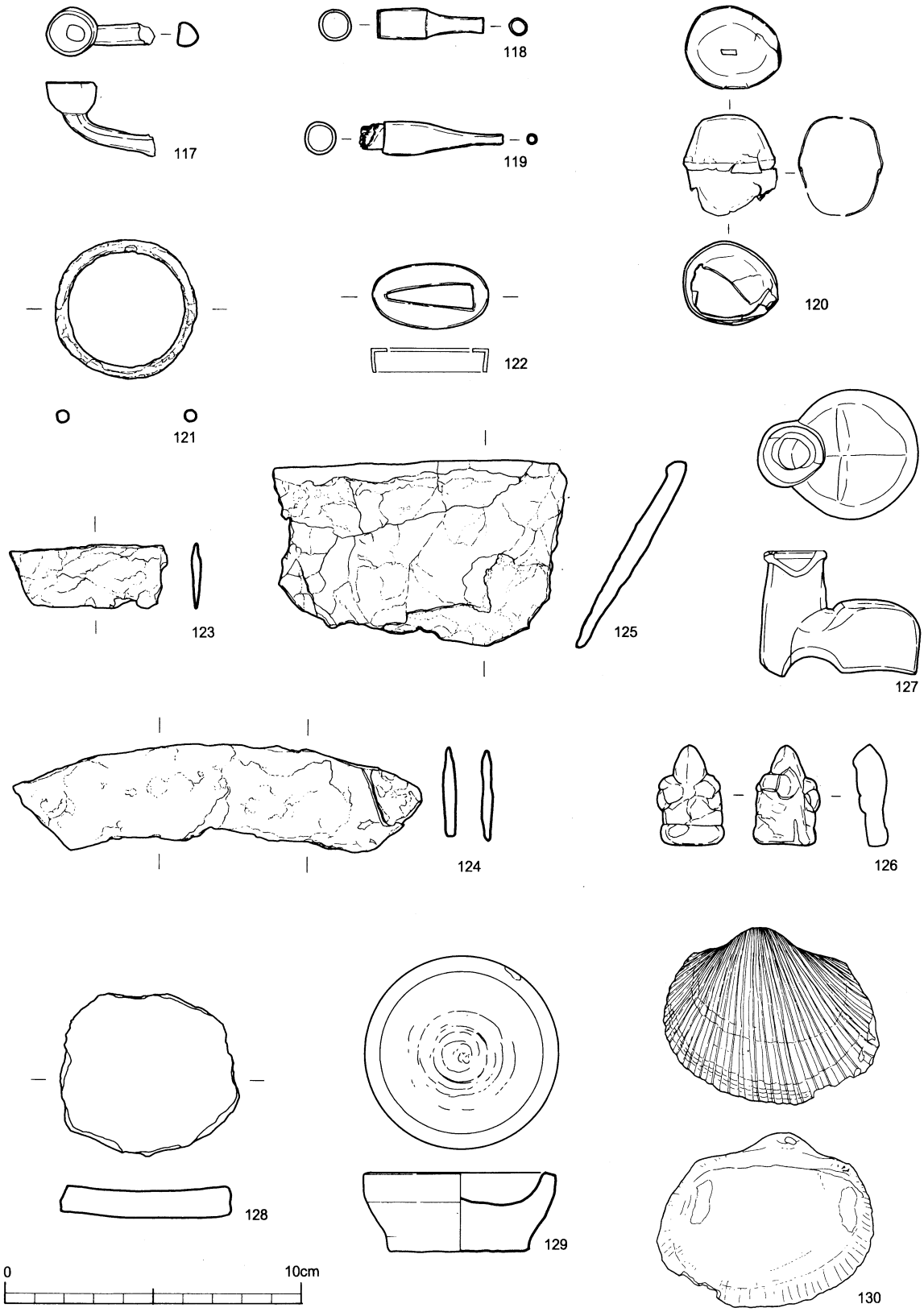
127は小出し用のインク瓶である。明治頃の製作であろう。鹿児島城二之丸跡に類例がある。

**陶器加工品**（128）

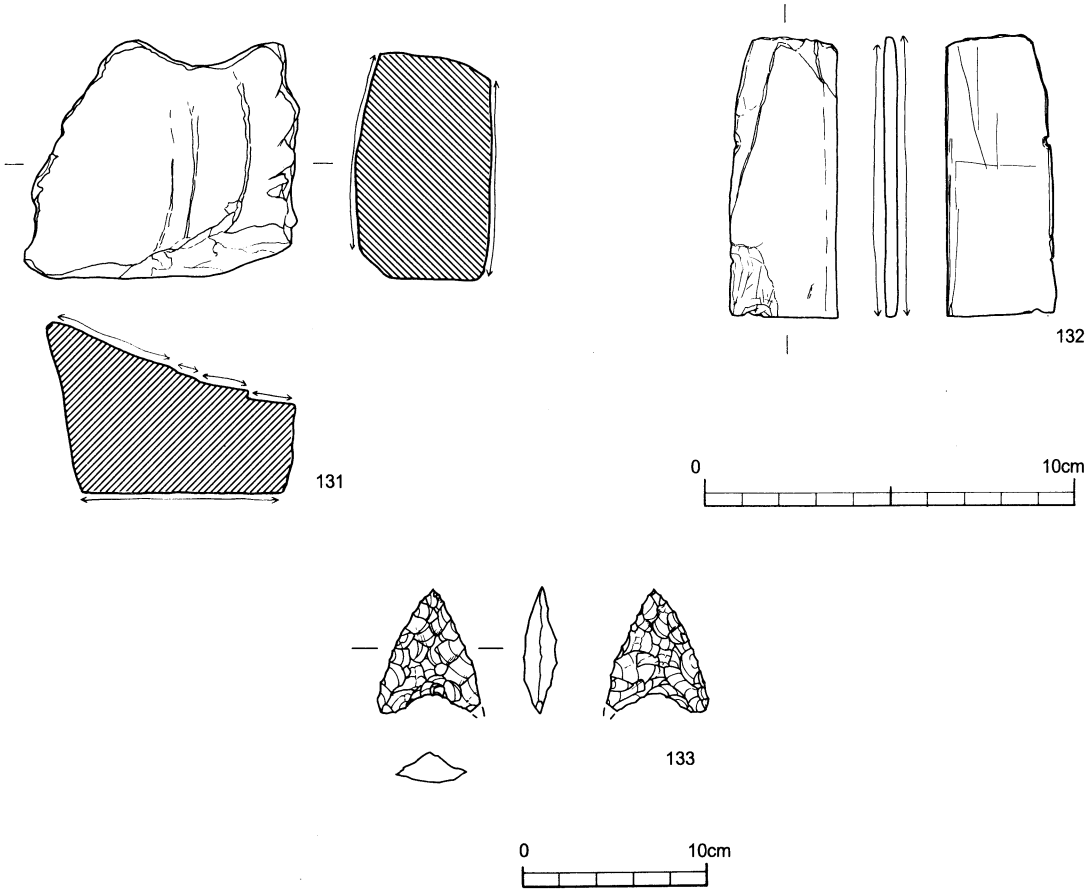
128は陶器の破損品をメンコ状に加工したものである。１点出土した。

**窯道具**（129）

129は窯道具のハマである。内面に渦巻き状，外面には刷毛目状の調整痕が残る。




第29図　金属製品・その他




## 第30図　石器（砥石・打製石鏃）

**貝　殻**（130）

130はアナダラ属のサルボウである。１点出土している。

**砥　石**（131・132）

131はシルト岩製の砥石である。土坑２から出土したもので，２面に研磨痕が認められる。表面に残る凹凸は研磨の結果によるものであろう。132は黒色頁岩製の砥石状のものである。両面に擦痕が認められる。石版の可能性もあるものである。

**打製石鏃**（133）

133は黒曜石製の打製石鏃である。縄文時代の遺物と思われる。

## 第８表　出土遺物観察表（染付その１）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 形状 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 装飾技法 絵付・釉薬 | 文様 | 胎土色 | 製作 製作地 | 製作年代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | A～C－1～5 | 小坏 | 丸形 | 49 | 26 | 22 | 染付<br>透明 | －<br>笹 | 白 | ？ | 明治～ | 内外面ハツ・コバルト |
| 2 | 溝状遺構1 | 小坏 | 桶形 | 48 | 30 | 35 | 白磁<br>透明 | －<br>－ | 灰白<br>N 8/ | 在地系？ | 19C初 | |
| 3 | A～C－1～5 | 小碗 | 筒丸形 | 54 | 52 | 50 | 染付<br>透明 | －<br>－ | 白 | ？ | 19C代 | 見込に砂付着 |
| 4 | 溝状遺構1 | 小碗 | 丸形 | 52 | 52 | 30 | 染付<br>透明 | 帯線<br>葉？ | 灰白<br>2.5Y 8/2 | 在地系？ | 19C前～中 | 内外面貫入 |
| 5 | 溝状遺構1 | 小碗 | 筒丸形 | 63 | 51 | 33 | 染付<br>透明 | －<br>松・笹 | 灰白<br>2.5Y 7/1 | 在地系？ | 19C中～ | 高台畳付砂付着 |
| 6 | 溝状遺構1 | 小碗 | 筒丸形 | 80 | － | － | 型紙<br>透明 | －<br>丸に？ | 灰白<br>N 8/ | ？ | 明治前半 | 湯飲み碗 |
| 7 | 溝状遺構1 | 小碗 | 端反形<br>？ | － | － | 34 | 染付<br>透明 | ？<br>染色体 | 灰白<br>2.5Y 8/1 | 肥前系 | 19C後半<br>～明治 | |
| 8 | A～C－1～5 | 小碗 | 丸形 | 71 | 43 | 31 | 銅板転写<br>透明 | －<br>籠・花 | 灰白<br>N 7/ | 瀬戸・美濃系 | 明治後半～ | |
| 9 | A～C－1～5 | 小碗 | 端反形 | 89 | 40 | 33 | 染付<br>青磁 | 団鶴<br>－ | 白 | 瀬戸・美濃系 | 19C | 口縁部口銹装飾<br>線刻による団鶴文 |
| 10 | A～C－1～5 | 小碗 | 半筒形 | 68 | 53 | 35 | 染付<br>透明 | 五弁花？<br>雪持笹 | 灰白<br>N 8/ | 肥前系？ | 18C末～<br>19C前半 | 湯飲み碗 |
| 11 | A～C－1～5 | 小碗 | 半筒形 | 77 | 62 | 43 | 染付<br>透明 | 四旗・五弁花<br>草花 | 灰白<br>N 8/ | 肥前系 | 18C後半～<br>19C初 | 蒟蒻印<br>湯飲み碗 |
| 12 | 土坑2 | 中碗 | 丸形 | － | － | － | 染付<br>透明 | －<br>二重網目 | 灰白<br>N 8/ | 肥前系 | 18C | |
| 13 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 100 | － | － | 染付<br>透明 | 圏線<br>格子 | 灰白<br>N 7/ | 肥前系 | 19C前半 | |
| 14 | 溝状遺構1 | 中碗 | 端反形 | 98 | 47 | 37 | 染付<br>透明 | －<br>若松 | 白 | 肥前系 | 18C前半 | |
| 15 | A～C－1～5 | 中碗 | ？ | － | － | － | 染付<br>青磁 | －<br>－ | 灰白<br>2.5Y 8/2 | 肥前系 | 18C末～<br>19C後半 | 見込蛇目釉ハギ，アルミナ塗布 |
| 16 | A～C－1～5 | 中碗 | 端反形 | 99 | － | － | 染付<br>透明 | 圏線<br>花？ | 灰白<br>7.5Y7/1 | 肥前系 | 17C後半～<br>18C前半 | |
| 17 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 110 | － | － | 染付<br>透明 | －<br>鳥 | 白 | ？ | 19C前半 | |
| 18 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 121 | － | － | 染付<br>透明 | －<br>網目 | 灰白<br>5Y 8/1 | 肥前系？ | 18C | 焼成不良 |
| 19 | A～C－1～5 | 中碗 | ？ | － | － | 40 | 型紙<br>透明 | －<br>福寿 | 灰白<br>7.5Y 8/1 | ？ | 明治前半 | 見込蛇目釉ハギ |
| 20 | A～C－1～5 | 中碗 | 端反形 | 106 | 61 | 44 | 染付<br>透明 | －<br>？ | 灰白<br>N 8/ | 肥前系？ | 幕末～ | 高台内銘？ |
| 21 | A～C－1～5 | 中碗 | 広東形 | 111 | 62 | 69 | 染付<br>透明 | 圏線<br>梅 | 灰白<br>N 8/ | 肥前系？ | 19C初 | 在地の可能性あり |
| 22 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 99 | － | － | 染付<br>透明 | －<br>文字 | 灰黄<br>2.5Y 7/2 | 在地系 | ？ | ハマ痕・内外面貫入<br>在地の可能性あり |
| 23 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 109 | 50 | 40 | 染付<br>透明 | | 灰白<br>N 8/ | 在地系？ | 幕末～ | 見込蛇目釉ハギ |
| 24 | A～C－1～5 | 中碗 | 端反形 | 110 | 63 | 40 | 染付<br>透明 | －<br>松・舟 | 灰白<br>N 8/ | 南京皿山窯 | 19C前半～<br>明治 | 高台畳付砂着・見込蛇目釉ハギ，アルミナ塗布 |
| 25 | A～C－1～5 | 大碗? | ？ | － | － | 55 | 染付<br>透明 | ？<br>－ | 白 | 平佐系 | 19C前半～ | 見込蛇目釉ハギ・コバルト<br>内外面貫入 |
| 26 | A～C－1～5 | 中碗 | ？ | － | － | 43 | 染付<br>青磁 | －<br>植物？ | 灰白<br>5Y 7/1 | ？ | 19C前半 | ハリ痕あり<br>見込蛇目釉ハギ |
| 27 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 117 | 48 | 47 | 染付<br>透明 | －<br>蔓草？ | 灰白<br>N 8/ | 波佐見系 | 18C半後～<br>19C初 | 見込砂付着<br>見込蛇目釉ハギ |
| 28 | A～C－1～5 | 中碗 | 丸形 | 121 | 51 | 45 | 染付<br>透明 | －<br>蔓草？ | 灰白<br>N 8/ | 波佐見系 | 18C半後～<br>19C初 | 見込砂付着<br>見込蛇目釉ハギ |
| 29 | A～C－1～5 | 中碗 | 端反形 | 96 | 58 | 42 | 型紙<br>透明 | 松竹梅・輪宝繋<br>区画・花 | 灰白<br>7.5Y 8/1 | ？ | 明治前半 | |
| 30 | 溝状遺構1 | 中碗 | 端反形 | － | － | 39 | 型紙<br>透明 | 松竹梅<br>角蓮弁 | 白 | ？ | 明治前半 | |

## 第９表　出土遺物観察表（染付その２）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 形状 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 装飾技法 絵付・釉薬 | 文様 | 胎土色 | 製作 製作地 | 製作年代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 31 | 土坑４ | 中碗 | 端反形 | 103 | 60 | 39 | 型紙<br>透明 | 松竹梅 | 白 | ？ | 明治前半 | |
| 32 | A～C－１～５ | 中碗 | 浅鉢形 | 104 | 59 | 37 | 染付<br>透明 | －<br>唐草 | 白 | 肥前系 | 18C後半 | 高台畳付砂付着<br>高台内銘「大明年製」くずれ |
| 33 | A～C－１～５ | 中碗 | 端反形 | 103 | 59 | 41 | 染付<br>透明 | 松葉・雷<br>？ | 灰白<br>N 7/ | 肥前系？ | 幕末～ | 在地の可能性あり |
| 34 | 溝状遺構１ | 中碗 | 丸形 | 116 | － | － | 染付<br>透明 | 四方襷<br>水仙・水 | 灰白<br>N 8/ | ？ | 18C後半～ | |
| 35 | A～C－１～５ | 小皿 | 丸形 | － | － | 64 | 銅版転写<br>透明 | 花・太極<br>－ | 灰白<br>2.5Y 8/1 | 瀬戸・美濃系？ | 明治～ | 高台畳付砂付着 |
| 36 | 溝状遺構１ | 小皿 | 丸形 | 95 | 15 | 58 | 銅版転写<br>透明 | －<br>梅・連続 | 白 | 瀬戸・美濃系 | 明治後半～<br>大正 | 口縁部口紅装飾 |
| 37 | A～C－１～５ | 小皿 | 丸形 | 115 | 22 | 66 | 染付<br>透明？ | 山水図<br>折松葉 | 白 | 肥前系 | 18C末～<br>19C前半 | 高台畳付砂付着 |
| 38 | A～C－１～５ | 小皿 | 丸形 | － | － | 98 | 染付<br>透明 | 葉・？ | 灰白<br>5Y 8/1 | 在地系？ | 18C後半～ | 内外面貫入・見込砂付着<br>外面窯傷あり・蛇目凹形高台 |
| 39 | A～C－１～５ | 小皿 | 丸形 | － | － | 47 | 染付<br>透明 | 楼閣山水<br>－ | 灰白<br>2.5Y 8/2 | 平佐系 | 18C後半～ | ハマ痕<br>内外面貫入 |
| 40 | 溝状遺構１ | 小皿 | 丸形 | － | － | 56 | 染付<br>透明 | 雲・樹木 | 灰白<br>7.5Y 8/1 | 平佐系 | 18C後半～ | ハマ痕・蛇目凹形高台<br>内外面貫入 |
| 41 | 溝状遺構１ | 小皿 | 丸形 | 136 | 31 | 75 | 染付<br>透明 | 蔓草<br>唐草 | 灰白<br>N 8/ | 波佐見系 | 18C前～中 | 高台畳付砂付着 |
| 42 | A～C－１～５ | 小皿 | 玉縁形 | 108 | 29 | 45 | 染付<br>透明 | 薄・格子<br>－ | 灰白<br>N 8/ | 肥前系？ | 19C前半 | 高台畳付砂付着・見込蛇目釉ハギ，アルミナ塗布・在地の可能性 |
| 43 | A～C－１～５ | 小皿 | 丸形 | 133 | 35 | 50 | 染付<br>透明 | 斜格子<br>－ | 灰白<br>N 8/ | 波佐見系 | 18C後半～ | 底部ハリ痕？・見込蛇目釉ハギ・在地の可能性あり |
| 44 | A～C－１～５ | 火入 | 筒形 | 96 | － | － | 染付<br>透明 | ？ | 灰白<br>2.5Y 8/2 | 在地系？ | 明治～ | 外面貫入<br>内面無釉 |
| 45 | 溝状遺構１ | 蓋物 | 腰張形 | 123 | － | － | 染付<br>透明 | 花 | 白 | 肥前系 | 18C | 口縁部内面釉ハギ |
| 46 | A～C－１～５ | 中碗蓋 | 端反形 | 90 | 34 | 38 | 染付<br>透明 | －<br>松・舟 | 灰白<br>N 8/ | 南京皿山窯 | 19C前半～<br>明治 | 見込蛇目釉ハギ<br>コバルト |
| 47 | A～C－１～５ | 蓋物蓋 | 橋摘み | 102 | － | － | 染付<br>透明 | －<br>花唐草 | 白 | 肥前系 | 18C後半 | |
| 48 | A～C－１～５ | 小鉢 | 端反形 | 147 | 78 | 61 | 染付<br>透明 | 五弁花<br>牡丹 | 白 | 肥前系 | 18C後半 | 蒟蒻印・外面に溶着痕・内外面にハツ |
| 49 | A～C－１～５ | 仏花瓶 | | 85 | 76 | 86 | 磁器<br>透明 | －<br>蓮花 | 白 | ？ | 明治～ | |

## 第10表　出土遺物観察表（中国製磁器）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 形状 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 装飾技法 絵付・釉薬 | 文様 | 胎土色 | 製作 製作地 | 製作年代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 溝状遺構１ | 小碗 | 端反形 | 64 | － | － | 染付<br>透明 | 圏線<br>？ | 白 | 景徳鎮窯系 | 17C後半～<br>18C前半 | |
| 51 | A～C－１～５ | 小皿 | 丸形 | － | － | 81 | 染付<br>透明 | 草花<br>－ | 白 | 景徳鎮窯系 | 16C後半～<br>17C初 | 高台畳付砂付着 |
| 52 | 溝状遺構１ | 青磁皿 | 丸形 | 138 | 43 | 72 | 磁器<br>青磁 | 剣先蓮弁 | 灰白<br>N 8/ | 龍泉窯系 | 15C後半～<br>16C前半 | 高台内面無釉，砂付着 |

## 第11表　出土遺物観察表（陶器その１）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 口縁形態 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 装飾技法 釉薬色 | 文様 | 胎土色 | 製作 製作地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 53 | A～C－１～５ | 甕 | 口寄外帯<br>頸部切立 | 253 | － | － | オリーブ黒<br>7.5Y 2/2 | 口縁突帯沈線２条 | 赤褐<br>5YR 4/3 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 54 | A～C－１～５ | 甕 | 口寄外帯<br>頸部切立 | 260 | － | － | オリーブ黒<br>7.5Y 2/1 | 口縁突帯沈線２条<br>頸部三角突帯１条 | 赤褐<br>5YR 4?3 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 55 | A～C－１～５ | 甕 | 口寄 | 306 | － | － | オリーブ黒<br>7.5Y 2/1 | 頸部三角突帯２条 | 灰褐<br>5YR 5/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 56 | 溝状遺構１ | 甕 | 口寄 | 342 | － | － | オリーブ黒<br>7.5Y 2/2 | 口縁沈線７条<br>頸部突帯２条 | 赤灰<br>2.5YR 6/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，目跡３か所 |

## 第12表　出土遺物観察表（陶器その２）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 口縁形態 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 装飾技法 釉薬色 | 文様 | 胎土色 | 製作 製作地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 57 | A～C－1～5 | 甕 | 口寄 | 342 | － | － | オリーブ黒 2.5Y 3/2 | 口縁部突帯３条 胴部突帯2条 | 灰赤 2.5 YR 6/2 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ 頸部一部無釉 |
| 58 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 | 254 | － | － | 灰オリーブ 5Y 5/2 | | 明赤褐 2.5YR5/6 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線 |
| 59 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 | 284 | － | － | 灰白 5Y 6/2 | | 明赤褐 2.5YR5/6 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線 |
| 60 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 | 250 | － | － | 暗赤褐 5YR 3/2 | | 赤褐 10R 5/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，目跡１か所 |
| 61 | 土坑２ | 摺鉢 | くの字状 | 318 | － | － | オリーブ灰 10Y 4/2 | | 明赤褐 2.5YR5/8 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 62 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 | 282 | － | － | オリーブ灰 2.5GY 3/1 | | にぶい橙 2.5YR 6/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線 |
| 63 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 | 287 | － | － | オリーブ灰 10Y 5/2 | | 明赤褐 2.5YR 5/6 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線 |
| 64 | 溝状遺構１ | 摺鉢 | T字状 | 234 | － | － | オリーブ黒 7.5Y 2/2 | | 灰褐 5YR 6/2 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ・目跡１か所 |
| 65 | A～C－1～5 | 摺鉢 | くの字状 | 336 | － | － | 緑黒 7.5GY 2/1 | | 赤橙 10R 6/6 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 66 | A～C－1～5 | 摺鉢 | くの字状 | 246 | － | － | オリーブ黒 7/5Y 3/2 | 口縁部下沈線２条 | 灰 N 5/ | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ．目跡１か所 |
| 67 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 | 280 | 114 | 151 | 灰褐 5YR 4/2 | 口縁部下沈線２条 | にぶい赤褐 5YR 5/3 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 68 | 溝状遺構１ | 摺鉢 | くの字状 | 351 | 139 | 143 | オリーブ黒 7.5Y 3/2 | 口縁部下沈線３条 | 赤褐 10R 5/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 69 | 溝状遺構１ | 摺鉢 | くの字状 | 322 | － | － | オリーブ黒 5Y 3/2 | 口縁部下沈線１条 | にぶい橙 5YR 6/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線 |
| 70 | A～C－1～5 | 摺鉢 | くの字状 | 343 | － | － | 灰 7.5Y 5/1 | 口縁部下沈線１条 | 緑灰 7.5GY6/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線・口縁部下稜あり |
| 71 | 土坑２ | 摺鉢 | 逆L字状 | 246 | － | － | 灰オリーブ 5Y 5/2 | 口縁部下沈線１条 | 灰 N 4/ | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ 口縁部下稜あり |
| 72 | A～C－1～5 | 摺鉢 | T字状 | 287 | － | － | 暗オリーブ灰 2.5GY 3/1 | 口縁部下沈線１条 | 灰 7.5Y 4/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 73 | 溝状遺構１ | 摺鉢 | くの字状 | 312 | － | － | オリーブ黒 7/5Y 2/2 | 口縁部下突帯２条 | 黄灰 2/5Y 5/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 74 | A～C－1～5 | 摺鉢 | 逆L字状 片口 | 250 | 138 | 143 | オリーブ黒 7.5Y 3/2 | | 明赤褐 2.5YR 5/6 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 75 | 土坑２ | 捏鉢 | 逆L字状 | 270 | 109 | 170 | オリーブ黒 7/5Y 2/2 | | 橙 2.5YR 6/6 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線 |
| 76 | 溝状遺構１ | 捏鉢 | 逆L字状 | 276 | － | － | オリーブ灰 10Y 4/2 | | 赤褐 2/5YR 5/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ 胴部一部無釉 |
| 77 | A～C－1～5 | 捏鉢 | 逆L字状 | 290 | 96 | 192 | オリーブ黒 7/5Y 3/ | 口縁部下沈線２条 | 灰赤 2/5YR 6/2 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 78 | 溝状遺構２ | 捏鉢 | 逆L字状 | 296 | － | － | オリーブ灰 5GY 5/1 | 口縁部下沈線３条 | にぶい赤褐 2.5YR 5/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 79 | A～C－1～5 | 捏鉢 | 逆L字状 | 272 | － | － | 暗褐 7.5YR 3/4 | 口縁部下沈線３条 | にぶい赤橙 10R 6/3 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 80 | 土坑２ | 植木鉢 | 逆L字状 | 318 | － | － | オリーブ黒 10Y 3/2 | | 暗灰 N 3/ | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ 突帯指頭によるつまみ上げ |
| 81 | A～C－1～5 | 植木鉢 | | － | － | － | 暗オリーブ灰 5GY 4/1 | 口縁部下沈線２条 | 褐灰 10YR 5/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 82 | 溝状遺構１ | 壺 | | 109 | － | － | オリーブ黒 7.5Y 3/2 | | 灰 7.5Y 4/1 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 83 | A～C－1～5 | 壺 | | 124 | － | － | 灰オリーブ 7.5Y 4/2 | | 灰 7.5Y 5/1 | 苗代川系 | |
| 84 | 溝状遺構１ | 壺 | | 173 | － | － | オリーブ黒 7.5Y 3/1 | 口縁部下沈線１条 | 灰褐 5YR 5/2 | 苗代川系 | |
| 85 | A～C－1～5 | 壺 | 口寄 | 153 | － | － | 暗オリーブ灰 2.5GY 3/1 | 口縁部下沈線１条 | にぶい橙 5YR 6/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ，ナデによる稜線，貝目痕あり |
| 86 | 溝状遺構１ | 壺 | 無頸 | 133 | － | － | 灰オリーブ 5Y 6/2 | | にぶい橙 5YR 6/4 | 苗代川系 | 口縁部上面釉ハギ |
| 87 | 溝状遺構１ | 壺 | 無頸 | 106 | － | － | オリーブ黒 7.5Y 2/2 | | にぶい赤褐 5YR 5/4 | 苗代川系 | |

## 第13表　出土遺物観察表（陶器その３）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 形状 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 釉薬色 | 胎土色 | 製作 製作地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 88 | 溝状遺構１ | 小碗 | 丸形 | 76 | 43 | 31 | 透明 | 灰白 2.5Y 8/2 | 在地系 | 内外面貫入・畳付無釉 |
| 89 | A～C－１～５ | 花瓶 | ？ | － | － | 62 | 透明 | 灰白 5Y 8/1 | 在地系 | 内外面貫入・畳付無釉 |
| 90 | A～C－１～５ | 中碗 | 丸形 | 118 | 64 | 60 | にぶい黄褐 10YR 4/3 | 明赤褐 2.5YR5/6 | 苗代川系 | 焼成不良 畳付露胎 |
| 91 | 溝状遺構１ | 中碗 | ？ | － | － | 50 | 黄褐 2.5Y 5/6 | 灰褐 2.5YR6/2 | 龍門司系 | 見込砂目跡あり 高台無釉 |
| 92 | A～C－１～５ | 中碗 | ？ | － | － | 48 | 黒褐 5YR 3/1 | 浅黄橙 7.5YR 8/6 | 龍門司系 | 見込蛇目釉ハギ 高台無釉 |
| 93 | 溝状遺構１ | 小皿 | 平形 | 102 | 28 | 45 | 極暗褐 7.5YR 2/3 | にぶい褐 7.5YR 5/3 | 竪野系 | 灯明皿・見込砂目跡２か所あり 外面底部無釉・糸切り底，轆轤右回転 |
| 94 | 溝状遺構１ | 火鉢 | 円筒形 | 148 | － | － | 灰オリーブ 7.5Y 5/2 | 灰 10Y 5/1 | 苗代川系 | |
| 95 | A～C－１～５ | 仏花瓶 | | 26 | － | － | 褐灰 10YR 4/1 | 褐灰 5YR 5/1 | 肥前系 17C末～18C前半 | 頸部下刷毛目・口縁部沈線２条 頸部露胎・耳のとれた痕あり |
| 96 | 溝状遺構１ | 土瓶蓋 | 山蓋 | 65 | － | 42 | 黒褐 5YR 3?1 | 褐灰 5YR 5?1 | 苗代川系 | 茶家蓋・光沢強 |
| 97 | A～C－１～５ | 土瓶蓋 | 山蓋 | 74 | － | 55 | 暗赤灰 2.5YR 3/1 | 灰赤 2.5YR 5/2 | 苗代川系 | 茶家蓋・光沢強 |
| 98 | A～C－１～５ | 土瓶蓋 | 山蓋 | 95 | 31 | 72 | 暗オリーブ褐 2.5Y 3/3 | にぶい橙 5YR 6/4 | 苗代川系 | 茶家蓋 |
| 99 | 溝状遺構１ | 土瓶蓋 | 山蓋 | 101 | － | 73 | 暗赤褐 5YR 3/2 | 灰褐 5YR 6/2 | 苗代川系 | 茶家蓋 |
| 100 | 溝状遺構１ | 土瓶蓋 | 山蓋 | 139 | － | 109 | 灰オリーブ 7.5Y 5/2 | にぶい褐 7.5YR 5/3 | 苗代川系 | 茶家蓋 |
| 101 | A～C－１～５ | 土瓶蓋 | 山蓋 | 165 | － | 130 | 灰オリーブ 7.5Y 4/2 | にぶい橙 5YR 6/3 | 苗代川系 | 茶家蓋 |
| 102 | 溝状遺構１ | 蓋 | | 149 | － | 138 | 無釉 | 橙 5YR 6/6 | 苗代川系 | 口唇部スス付着 |
| 103 | A～C－１～５ | 蓋 | | 159 | － | － | オリーブ黒 7.5Y 3/2 | 灰褐 7.5YR 6/2 | 苗代川系 | |
| 104 | 土坑２ | 土瓶 | 胴折形 | － | － | － | 灰白 10YR 8/2 | 暗灰黄 2.5Y 5/2 | 在地系？ | 底部スス付着 |
| 105 | 溝状遺構２ | 土鍋 紐状双耳 | 碗形 | 191 | － | － | 褐 7.5YR 4/4 | にぶい橙 7.5YR6/4 | 苗代川系 19C | |
| 106 | 溝状遺構１ | 盤 | | 236 | 52 | 142 | オリーブ黒 7.5Y 3/1 | にぶい橙 5YR 6/4 | 苗代川系 | 口縁部指頭によるつまみ上げ |
| 107 | A～C－１～５ | 不明容器 | | － | － | 121 | にぶい黄褐 10YR 4/3 | にぶい橙 2.5YR6/4 | 苗代川系 | 光沢強 底部無釉 |
| 108 | 土坑２ | 捏鉢 | － | － | － | － | オリーブ黒 5Y 3/2 | にぶい赤褐 2.5YR 5/4 | 苗代川系 | 光沢強 |
| 109 | A～C－１～５ | 植木鉢 | － | － | － | 130 | オリーブ黒 5Y 3/2 | 橙 2.5YR 6/6 | 苗代川系 | 胴部片・外面貝目痕あり |
| 110 | A～C－１～５ | 火鉢 | 鍔縁 桶形 | 181 | 190 | 105 | 浅黄橙 7.5YR 8/6 | 橙 5YR 6/6 | 在地系？ | 底部片・底部内面貝目痕２か所，底部外面貝目痕１か所・水抜き孔あり |

## 第14表　出土遺物観察表（土師器）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 法量(mm) 口径 | 器高 | 底径 | 胎土色 | 製作 製作地 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 111 | A～C－１～５ | 灯明皿 | 75 | 18 | 52 | にぶい橙 7.5YR6/4 | 在地系？ | 口縁部内外面にスス付着 糸切り底 |
| 112 | A～C－１～５ | 灯明皿 | 113 | 24 | 79 | 朝黄橙 7.5YR8/4 | 在地系？ | 口縁部内面にスス付着 糸切り底 |

## 第15表　出土遺物観察表（瓦器・瓦）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 備考 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 113 | A～C－１～５ | 羽釜 | 直径　300mm | 瓦質 | 胎土色　灰 N 5/ | 鍔下煤付着・底部刷毛目調整痕 |
| 114 | A～C－１～５ | 瓦器 | 胎土色 にぶい橙 7.5YR 7/4 | 外面に巻貝回転による装飾 | | |
| 115 | A～C－１～５ | 瓦 | 外面表沈線１条・ 裏面剥落・外面煤付着 | | | |
| 116 | A～C－１～５ | 瓦 | 外面表沈線１条・裏面掻痕あり | | | |

## 第16表　出土遺物観察表（青銅製品）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 117 | 溝状遺構２ | 雁首 | 一枚作り・皿部口径 16mm・重さ 7.19ｇ・羅宇との接続部欠損・18Ｃ後半～ |
| 118 | 土坑４ | 吸口 | 一枚作り・長さ 36mm・口径 9.5mm・重さ 4.6ｇ・19Ｃ～ |
| 119 | 掘立柱建物２号　柱穴４ | 吸口 | 一枚作り・長さ 40mm・口径 11mm・羅宇竹一部残存・重さ 3.55ｇ・18Ｃ後半～ |
| 120 | 掘立柱建物２号　柱穴６ | 鈴 | 頂部に孔あり・下部欠損 |
| 121 | 土坑２ | 小鐶 | 径 48mm・重さ 10.48ｇ |
| 122 | 掘立柱建物跡２号 柱穴６ | 鞘口 | 長さ 39mm・幅 22mm・厚さ 8mm・重さ 10.46ｇ |

## 第17表　出土遺物観察表（鉄製品）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 123 | 溝状遺構１ | 鉄製品 | 残存長 53mm・最大幅 22mm・最大厚 3.5mm |
| 124 | Ａ～Ｃ－１～５ | 鎌 | 残存長 138mm・最大幅 32mm・最大幅 5mm |
| 125 | Ａ～Ｃ－１～５ | 鉄製品 | 鉄鍋？ |

## 第18表　出土遺物観察表（その他）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 126 | Ａ～Ｃ－１～５ | 人形 | 高さ 34mm・幅 22mm |
| 127 | 溝状遺構１ | インク瓶 | インク小出し用・口縁部一部欠損・明治 |
| 128 | Ａ～Ｃ－１～５ | メンコ | 長径 61mm・短径55mm・最大厚10mm・陶器加工品 |
| 129 | Ａ～Ｃ－１～５ | 窯道具 | ハマ・口径 65mm・底径 48mm・器高 27mm・104.85ｇ・外面に刷毛目による調整痕あり |
| 130 | Ａ～Ｃ－１～５ | 貝殻 | アナダラ属・サルボウ |

## 第19表　出土遺物観察表（石器）

| 番号 | 出土区 | 器種 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 131 | 土坑２ | 砥石 | 長さ 65mm・最大幅 75mm・最大厚 42mm・241ｇ・シルト岩製 |
| 132 | Ａ～Ｃ－１～５ | 砥石？ | 長さ 76mm・最大幅 29mm・最大厚 3mm 15,4ｇ・黒色頁岩製・石板の可能性あり |
| 133 | 溝状遺構１ | 打製石鏃 | 長さ 16mm・最大幅 14mm・最大厚 4,5mm・0,68ｇ・上牛鼻系黒曜石製 |

## 第５節　まとめにかえて

一ノ谷遺跡は，検出した遺構，出土した遺物から中世，近世から近代にかけての遺跡として位置付けることができると思われる。

また，今回の発掘調査区では，縄文時代や旧石器時代の明瞭な包含層は認められず，遺物も確認されなかったことから，中世の遺物を少量含むものの主体は近世から近代にかけてのものであるといえる。

ここでは，これらの成果をまとめて述べることにする。

### １　遺　構

**掘立柱建物跡**

２軒を推定復元した。掘立柱建物跡については，掘立柱建物跡２の柱穴から煙管の吸口，青銅製の鈴などが出土していることから近世から近代にかけての時期のものであろうと判断される。掘立柱建物跡１についても柱穴の埋土の観察などからほぼ同時期のものと思われる。

**土　坑**

土坑は，埋土から陶器片などが出土し，掘立柱建物跡と同様の埋土をもつことから近世から近代にかけての時期が考えられる。埋土には陶器片のほか軽石が入り込んでおり，覆土形成過程に流れ込んだものと思われる。ただし，土坑２については，これら軽石のなかに面取りされた扁平な形状のものが含まれていたことからこれらを人為的なものと判断し，最終的に土坑の西壁に沿ってＬ字状に積み上げられた石組を検出した。この石組の下部からは東西方向に延びた帯状の硬化土層が検出されている。

この土坑２からは，溝状遺構２が東側へ延びていることから，水に関連した機能・用途が考えられるが石組や硬化土層との関係など，詳細については不明である。

**溝状遺構**

溝状遺構１は本遺跡で検出された遺構の中で最も多くの遺物が出土している。遺跡が開削され，平坦面が造成された際に形成された段部の境に位置することから，排水用の溝であろうと考えられる。溝状遺構３については，西側に隣接する掘立柱建物跡１からの排水によって形成された可能性がある。

### ２　遺　物

遺物は陶器を中心に，染付・土師器・青磁・鉄製品・青銅製品・瓦など計1,238点出土した。

中国製の染付皿(51)や青磁皿(52)が出土しているが，18世紀から19世紀代の遺物が主体である。

陶器は薩摩焼のいわゆる黒薩摩が中心で，上手とされる白薩摩が少量出土している。産地別では苗代川系が多数を占め，龍門司系など他産地のものが少量含まれる。器種には碗・皿・鉢・甕・壺・瓶などがあり，そのうち摺鉢の出土量が多い傾向にある。

考古資料にもとづく薩摩焼の編年については，鹿児島市福昌寺跡の出土資料をもとに出口浩氏による先駆的な業績があり（出口・濱川編1992b），これをうけて渡辺芳郎氏は，摺鉢について法量・プロポーション・口縁形態と口縁下装飾・櫛目・櫛目範囲・施釉範囲・貝目の有無の各属性

から県内消費地遺跡出土資料を対象に仮称６型式の分類を行い，それぞれに年代観を与えている（渡辺2000）。本遺跡から出土した摺鉢は，渡辺氏の分類に従うと仮称３型式から仮称５型式の範疇に含まれるものと思われる。ただし，口縁形態を逆Ｌ字状として分類した摺鉢のうち，58・71・74・75については，口縁部が内側に張り出す形状をもつことから，これらが逆Ｌ字状口縁の範疇に含まれるものか，Ｔ字状口縁との中間形態，あるいは１形態として捉えるべきものか今後検討を要するものと思われる。

また，染付片や陶器片の中には，焼成が不良なもの，焼成の過程で湾曲したもの，窯傷痕が残るものなどが認められる。このことは当時の陶磁器の消費地への搬入形態を探る上で，ひとつの傍証になるものと思われる。明確な関係を把握することはできなかったが，伊集院の野町で幕末まで藩内でも有数の市が開かれていたことは興味深い事実である。

近年，県内において窯跡の発掘事例が増加し，さらに鹿児島城やその周辺，神社・仏閣跡を中心として近世遺跡の発掘調査が実施され，良好な資料の発見が相次いでいる。今後，窯跡から出土した資料をもとに，消費地遺跡出土資料との詳細な比較・検討を行うことで県内における近世陶磁器の編年が進展し，消費の実態が解明されることが期待される。

## 3　一ノ谷遺跡の性格について

遺跡には調査前から寺院跡の伝承があったが，発掘調査の結果，これと結びつく明確な遺構を発見することはできなかった。遺跡内に安置されていた五輪塔群については，各部位の組合せにおいて時期が不統一のものが多く，後世に移動された可能性が強いと判断された。また，これらの五輪塔群が製作された当時から遺跡内に存在していたかも判然としない。ただし，これら五輪塔群の残欠の中には「奉開山之前　宝暦五亥十一月廿八日」と刻まれた石碑や「聯翁」という僧名らしき文字が刻まれた塔身，無縫塔などが認められることから，遺跡あるいはその周辺に18世紀後半以降の一定期間，寺院が存在した可能性は残されている。聞き取り調査によると，遺跡内には明治まで五輪塔を守りながら人が住んでおられたとのことで，出土した染付，陶磁器類などの遺物は，この頃までに消費されたものである可能性が高い。しかし，Ｃ－２区で古道に隣接して出土した五輪塔の笠部（火輪）２個については，軒の反りが弱い点など形態的な特徴から判断すると，戦国期頃に製作されたものと思われる。したがって当遺跡地は近世以前にも修験者の修行の場や戦勝の祈祷所など，何らかの意図をもって利用されていたことも想定される。

## 〈参考・引用文献〉


有馬俊郎　『伊集院郷土史』　1976　伊集院町

塩満郁夫編　鹿児島県史料拾遺（XV）　『伊集院由緒記』　1974　鹿児島県史料拾遺刊行会

竹内理三編　『角川日本地名大辞典』　46　鹿児島県　1978　角川書店

田沢金吾・小山富士雄　『薩摩焼の研究』　1941　座右宝刊行会（1987　国書刊行会復刻）

大橋康二　『古伊万里の文様』　1994　理工学社

新宿区内藤町遺跡調査団編　『内藤町遺跡』　1992　新宿区内藤町遺跡調査団

新宿区四谷三丁目遺跡調査団編　『四谷三丁目遺跡』　別冊「江戸遺跡やきもの分類」

鹿児島県教育委員会　『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』　1983　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26）

鹿児島県教育委員会　『鹿児島城二之丸跡（遺構編）』　1991　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（55）

鹿児島県教育委員会　『鹿児島城二之丸跡（遺物編）』　1992　鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60）

鹿児島市教育委員会　『福昌寺跡』　1992b　鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（14）

社団法人 鹿児島共済会南風病院　『竪野（冷水）窯址』　1978　南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

加治木町教育委員会　『山元古窯跡』　1995　加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書1

宮之城教育委員会　『松尾城及び宗功寺跡（2）』　1995　宮之城町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

大武　進　『薩摩苗代川新考』　1996

鹿児島県歴史資料センター黎明館　『薩摩焼発祥400周年記念展　世界のさつま』　1998

渡辺芳郎　『近世摺鉢考』　鹿児島考古第34号　2000　鹿児島県考古学会

財部町教育委員会　『横尾遺跡』　1989　財部町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

九州近世陶磁学会　『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念』　2000

鹿児島県教育委員会『鹿児島県の古石塔－旧薩摩国編』　1987　鹿児島県文化財調査報告書第33集

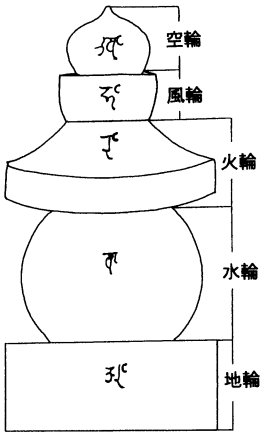
付　篇

# 一ノ谷遺跡の五輪塔群について

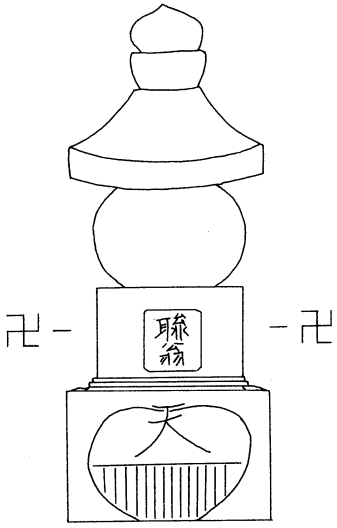
南九州古石塔研究会会長　**河　野　治　雄**

一ノ谷遺跡の五輪塔群は数度にわたって移動が行われており，現在の場所に集められているものは，すべて原形をとどめていないものと思われる。本来，五輪塔は密教の原理によって五つの別石（上部より団形・半円形・三角形・円形・方形の五石）の組合せによって形成されるものが原則であるが，時によって方形の石の下に台石を伴ったものもある。（第31図参照）

一ノ谷遺跡の片隅に現在復原されているものは，五輪塔の原則に従ったものもあるが，それ以外のものも含めて12～13基程ある中で，原型のものはないと考えられる。方形の残欠が多く残されているところをみると，かなりの五輪塔があったと考えられる。なお，本来の五輪塔（空・風・火・水・地輪）以外の石塔の残欠（方形の台座に二段の刻みを付し，格座間を彫ったもの，それに天・地等の文字を彫っているもの）があり，五輪塔の台石でなく別の塔婆であろうと考えられたものの，他の塔を考える残欠が見当たらない。或いは五輪塔の台石としてつくられたものかと推定されるが，今後の検討課題としたい。次に之ら五輪塔の各部のいずれにも種字（しゅじ）の文字は見られない。しかし，数基の台石に天・地・前などの文字や卍（マンジ）が刻まれており，如何なるわけか検討を要する。また，地輪の一つと思われるものに上記卍の文字と共に「聯翁レンオウ」の文字（僧名）が見られることはこの遺跡の性格（寺跡や）年代を考える一つの手がかりとして重要な資料である。




五輪塔模式図




一ノ谷遺跡五輪塔模式図

第31図　五輪塔模式図

## 第20表　石塔所在地地名表(1)

| 番号 | 種別 | 基数 | 所　在　地 | 地　形 | 主な時代 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 五輪塔（群）<br>宝篋印塔・宝塔<br>無縫塔 | 10数基<br>数基<br>数基 | 寺脇円福寺跡石塔群 | 墓地 | 南北朝期～室町期<br>〃<br>江戸期 | 町指定 |
| 2 | 宝塔 | 数基 | 寺脇オボロ迫(通称仏飼田) | 山林 | | |
| 3 | 五輪塔・宝塔残欠 | 数基 | 寺脇 | 崖上 | 不詳 | |
| 4 | 相輪（残欠） | 1基 | 寺脇古墓（墓地）の脇 | 雑木林 | | |
| 5 | 五輪塔 | 数基 | 寺脇 | 洞窟内 | 不詳 | |
| 6 | 五輪塔碑 | 1基 | 寺脇水流 | 山林入口 | 不詳 | |
| 7 | 宝塔（残欠） | 1基 | 寺脇 | | | |
| 8 | 五輪塔<br>宝塔<br>宝篋印塔<br>無縫塔 | 数基<br>1基<br>1基<br>数基 | 大田中報恩寺跡 | 平地 | (推定)戦国期末 | |
| 9 | 五輪塔（残欠）<br>宝篋印塔 | 数基<br>1基 | 大田中神明神社境内 | 平地 | 室町～戦国 | |
| 10 | 石仏 | 1躰 | 大田中岡の上 | 台地 | (推定)南北朝期 | 阿弥陀座像 |
| 11 | 五輪塔<br>笠塔婆<br>相輪（残欠） | 10数基<br>1基<br>1個 | 麓一宇治城跡の南側 | 台地 | (推定)室町期～戦国期<br>永享四年 | 志岐城跡石塔群<br>〃 |
| 12 | 宝篋印塔<br>無縫塔<br>宝塔<br>板石塔婆<br>供養塔 | 2基<br>6～7基<br>1基<br>数基<br>1基 | 城山麓円通庵跡 | 台地 | (推定)戦国期<br>江戸期<br>江戸期<br>寛文9年 | 一石一字法華経写経塔 |
| 13 | 無縫塔(残欠あり)<br>五輪塔（残欠） | 10基<br>1基 | 城山東側中腹雪窓院跡墓地 | 山地 | (推定)江戸期<br>不詳 | 雪窓院跡石塔群<br>〃 |
| 14 | 五輪塔（残欠） | 1個 | 城山東南 | 山地 | 不詳 | |
| 15 | 五輪塔（残欠）<br>無縫塔 | 数基分<br>1基 | 大田上大知庵跡 | 宅地 | 不詳<br>〃 | 大知庵跡石塔 |
| 16 | 磨崖佛<br>五輪塔 | 3躰<br>2基分 | 麓東石見堂跡山下家門前 | 台地 | (推定)南北朝期<br>不詳 | 磨崖阿弥陀三尊像 |
| 17 | 五輪塔(残欠含む) | 10数基分 | 麓東石見堂跡阿多家屋敷内 | 台地 | 不詳 | 石見堂跡 |
| 18 | 五輪塔(残欠含む)<br>宝篋印塔（残欠）<br>石幢<br>無縫塔 | 3基分<br>1基<br>1基<br>6基 | 天神馬場竜泉寺跡墓地 | 平地 | (推定)戦国期<br>不詳<br>〃<br>江戸期 | 竜泉寺跡墓地<br>〃<br>六地蔵塔<br>竜泉寺跡墓地 |
| 19 | 宝篋印塔<br>宝塔<br>五輪塔<br>板石塔婆 | 1基<br>1基<br>数基<br>1基 | 麓天神馬場大久保長寿庵跡 | 藪地 | 文明十年<br>不詳<br>〃<br>〃 | 長寿庵石塔<br>〃<br>〃<br>〃 |
| 20 | 無縫塔 | 3基 | 天神馬場末穏寺境内 | 寺域 | 江戸期 | 末穏寺境内の石塔 |
| 21 | 宝篋印塔(残欠含)<br>自然石墓塔<br>無縫塔<br>五輪塔・宝塔等残欠 | 2基<br>1基<br>4基<br>数基 | 向江破鞋庵跡 | 墓地 | (推定)戦国期<br>〃<br>江戸期<br>不詳 | 「開山」塔 |
| 22 | 石室・宝塔<br>五輪塔(残欠含む)<br>無縫塔<br>笠塔婆<br>石仏 | 1基<br>5基<br>40基<br>1基<br>数躰 | 四郎圓梅岳寺墓地 | 台地 | （推定）戦国期<br>〃<br>戦国期～明治まで<br>江戸期<br>江戸期 | |
| 23 | 五輪塔(残欠含む) | 14基と残欠 | 下谷口四郎圓(某寺跡付近) | 山林 | (推定)戦国期 | |
| 24 | 宝塔<br>五輪塔(残欠含む)<br>板碑 | 2基分<br>数基<br>2基 | 下谷口末永宮原八幡神社横 | | (推定)南北朝期<br>不詳<br>〃 | |
| 25 | 五輪塔(残欠含む)<br>相輪（残欠） | 10数基<br>1個 | 下谷口末永窪田郵便局付近 | 高台 | 不詳<br>〃 | |
| 26 | 五輪塔 | 5基 | 下谷口末永窪田 | 山林 | 不詳 | |

## 第21表　石塔所在地地名表(2)

| 番号 | 種別 | 基数 | 所在地 | 地形 | 主な時代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 27 | 五輪塔 | 12基 | 下谷口寺内竜泉庵跡 | 台地 | 不詳 | |
| 28 | 五輪塔 | 数基 | 下谷口原房 | | 不詳 | |
| 29 | 宝塔（残欠含む）<br>五輪塔(残欠含む) | 1基<br>数基 | 下谷口本平 | 山林 | 推定戦国期 | |
| 30 | 五輪塔（残欠） | 数個 | 下谷口本平 | 平地 | 不詳・近世 | 石碑に「宝暦五亥十一月二十八日」銘 |
| 31 | 宝篋印塔 | 1基 | 恋之原 | 畑 | （推定）天明5年 | 再建 |
| 32 | 五輪塔（残欠） | | 恋之原稲荷神社境内 | 境内 | 不詳 | |
| 33 | 五輪塔(残欠含む) | 10数基 | 古城大山神社境内 | 台地 | 不詳 | 伝伊集院氏最初の居館跡 |
| 34 | 五輪塔(残欠含む)<br>相輪残欠 | 数基分 | 古城松尾城下（麓） | 山麓 | （推定）戦国期 | |
| 35 | 宝塔・五輪塔残欠 | 2基分 | 飯牟礼熊野神社境内 | 境内 | （推定）戦国期 | 熊野神社境内の石塔 |
| 36 | 相輪残欠 | 1個 | 飯牟礼 | 丘上 | | (山ノ神石祠) |
| 37 | 五輪塔<br>宝篋印塔(残欠)<br>笠塔婆<br>石仏墓塔 | 20基程<br>2基分<br>1基<br>2基 | 猪鹿倉荘厳寺跡 | 墓地 | (推定)室町期～戦国期<br>〃<br>戦国期～江戸期<br>〃 | |
| 38 | 五輪塔（群） | 10数基 | 猪鹿倉薬師堂跡 | 平地 | (推定)南北朝期 | 薬師堂跡石塔群 |
| 39 | 五輪塔(残欠含む) | 9基 | 猪鹿倉熊野神社境内 | 境内 | 不詳 | 熊野神社境内の石塔 |
| 40 | 五輪塔（残欠） | 数基分 | 猪鹿倉 | 宅地 | 不詳 | |
| 41 | 五輪塔群(残欠含)<br>板石塔婆<br>供養塔 | 8基・残欠<br>残欠<br>1基 | 徳重伊集院高校裏山 | 山林 | 不詳<br>〃<br>安永5年 | <br><br>島津元久追善碑か |
| 42 | 無縫塔<br>石仏<br>石幡 | 20基<br>2躰<br>1基 | 徳重東広済寺跡 | 平地 | 江戸期<br>〃<br>〃 | 広済寺跡の僧塔<br>仁王像<br>六地蔵塔 |
| 43 | 五輪塔(残欠含む)<br>宝篋印塔(残欠)<br>無縫塔<br>石幡<br>板石塔婆 | 数基<br>2基他<br>30数基<br>1基<br>7基 | 徳重妙円寺跡墓地 | 山地 | （推定）戦国期<br>〃<br>江戸期(文化12年)<br>〃　(天明3年)<br>〃 | 妙円寺跡墓地の石塔<br><br>六地蔵塔 |
| 44 | 五輪塔<br>宝塔(残欠))<br>板石塔婆 | 5基・残欠<br>1基分<br>2基 | 徳重瀬戸内日吉神社境内 | 境内 | 不詳<br>〃<br>（推定）江戸期 | 日吉神社境内の石塔 |
| 45 | 五輪塔（残欠） | 数基分 | 清藤門前 | 水田 | （推定）戦国期 | |
| 46 | 五輪塔（残欠） | 2基分 | 竹之山城川内 | 道路脇 | （推定）戦国期 | 伝肥後盛家の墓 |
| 47 | 五輪塔（残欠）<br>宝塔<br>層塔<br>笠塔婆<br>板碑 | 3基分<br>数基<br>1基<br>1基<br>1基 | 麦生田下平等寺跡 | 畑 | (推定)室町期～戦国期<br>〃<br>〃<br>〃<br>〃 | 平等寺跡石塔 |
| 48 | 宝塔 | 1基 | 麦生田下宮下墓地 | 墓地 | （推定）室町期 | |
| 49 | 五輪塔（残欠） | 残欠 | 麦生田下八幡神社境内 | 境内 | 不詳 | |
| 50 | 宝塔（残欠） | 1基 | 麦生田 | 台地 | 不詳 | アンダが岡の石塔 |
| 51 | 五輪塔残欠と相輪 | 数基分 | 麦生田 | 平地 | 不詳 | |
| 52 | 石谷高久の墓 | | 徳重 | 平地 | 中世 | |
| 53 | 本田兄弟の墓 | | 荒瀬 | 平地 | 近世 | |
| 54 | 有馬新七の墓 | | 天神馬場 | 平地 | 近世 | |
| 55 | 大渡橋記念碑 | | 大田 | 川 | 近世 | |
| 56 | 永平橋記念碑 | | 上谷口（中央通り） | 川 | 近世 | |
| 57 | 永迫平 | 2基分 | 下谷口永迫平 | 台地 | 近世 | 「宝暦六丙午三月吉日造立之宮原貞右衛門」銘あり |
| 58 | 経之塚 | 1基 | 下谷口 | 台地 | 近世 | 「南無阿弥陀仏道阿弥陀仏西鶴」銘あり |

# 図　　版

五輪塔群（南側から）

五輪塔群（北西側から）

図版2

土層断面（南側）

堀立柱建物跡1　完堀状況

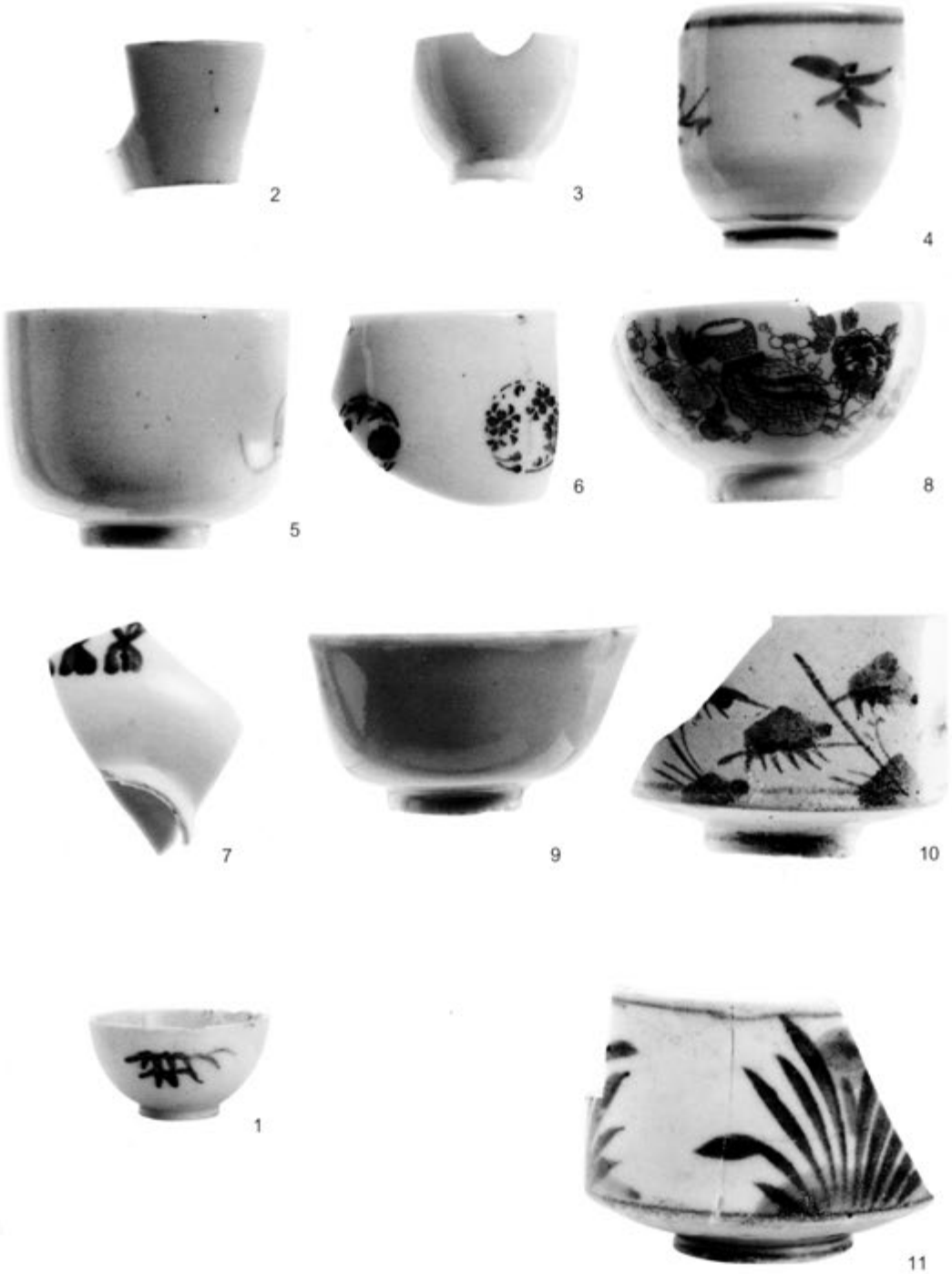
五輪塔残欠出土状況（C-2区）

土坑2

図版4

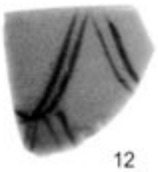
土坑2　断面

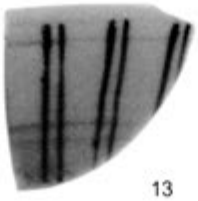
土坑2　完堀状況




染付1（小坏・小碗）

図版6


12

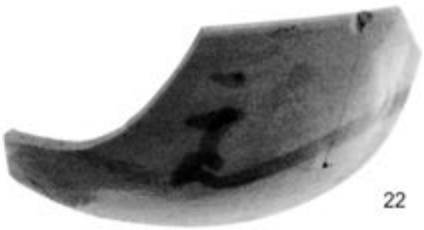

13

16

17

14

18


22

15

19

染付2（中碗）

20

28

23

33

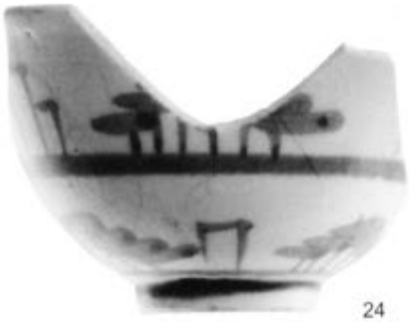
21

48

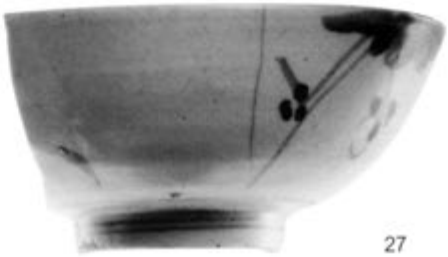
49

染付3（中碗・小鉢・仏花瓶）

図版8



24



27

32

34

31

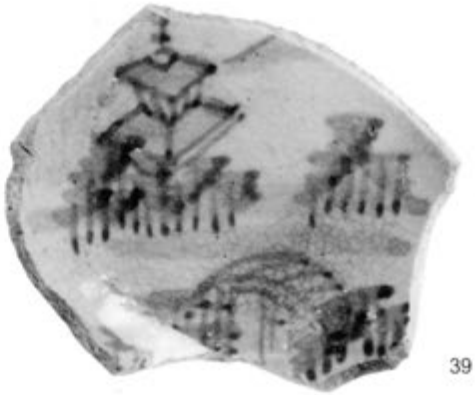
30

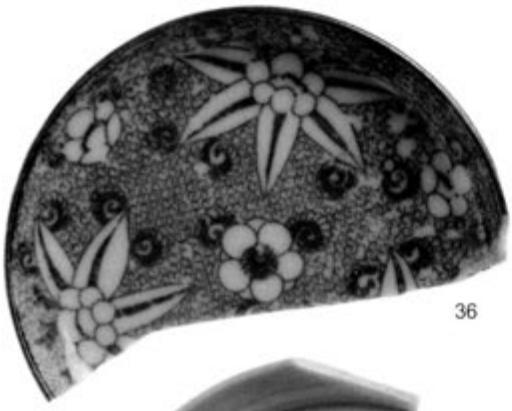
26

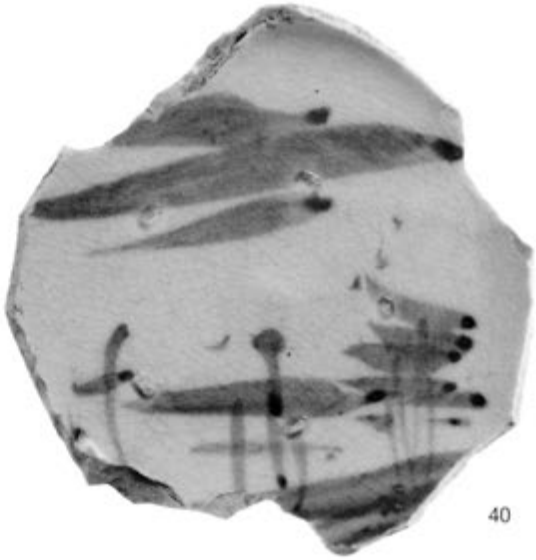
25

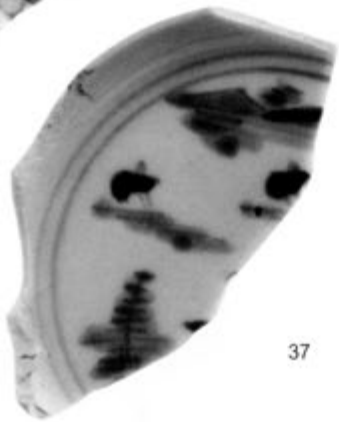
染付4（中碗・大碗）

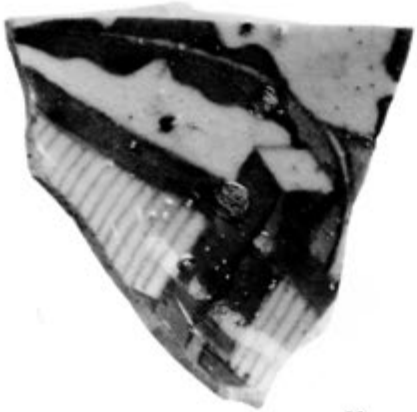
35

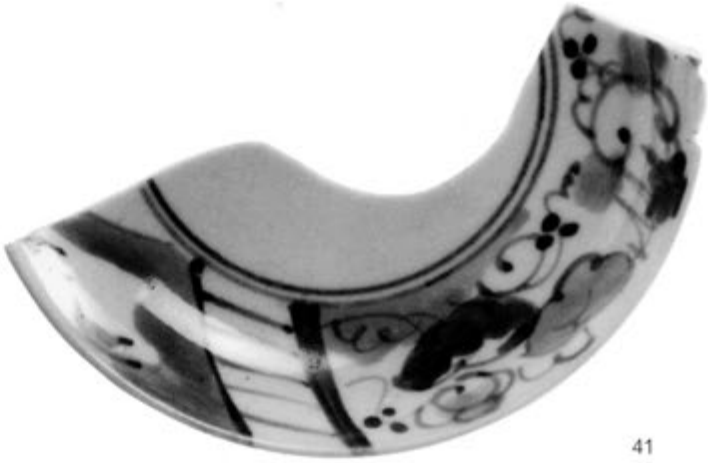

39


36


40

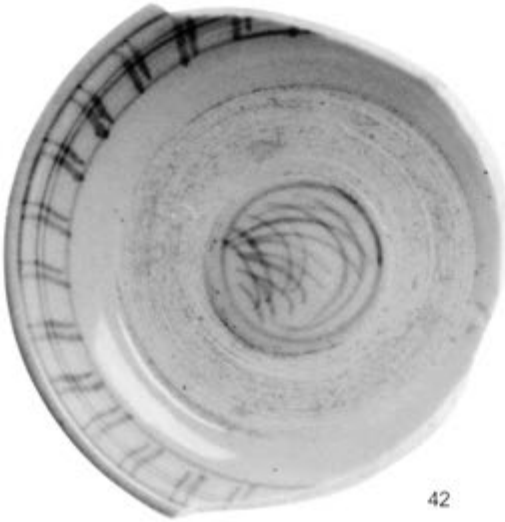

37


38


41

染付5（小皿）

図版10



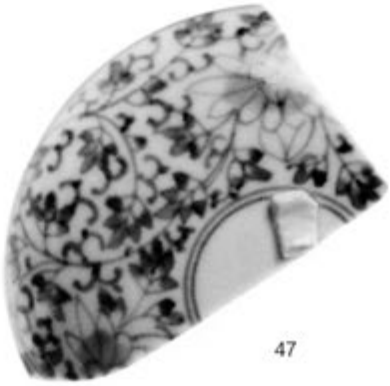
42

44

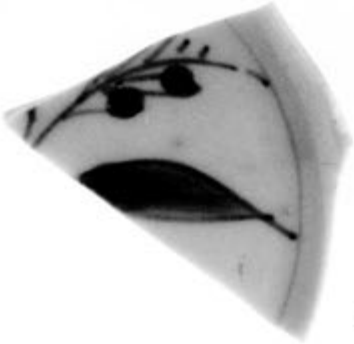
45

43

46



47



51

50

染付6（小皿・火入・蓋類）・中国製染付

53

54

57

55

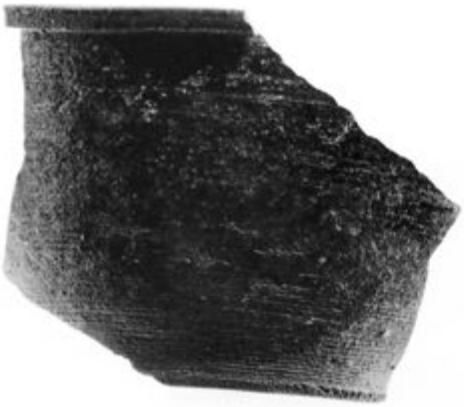
56

陶器1（甕）

図版12

59

66



67

72

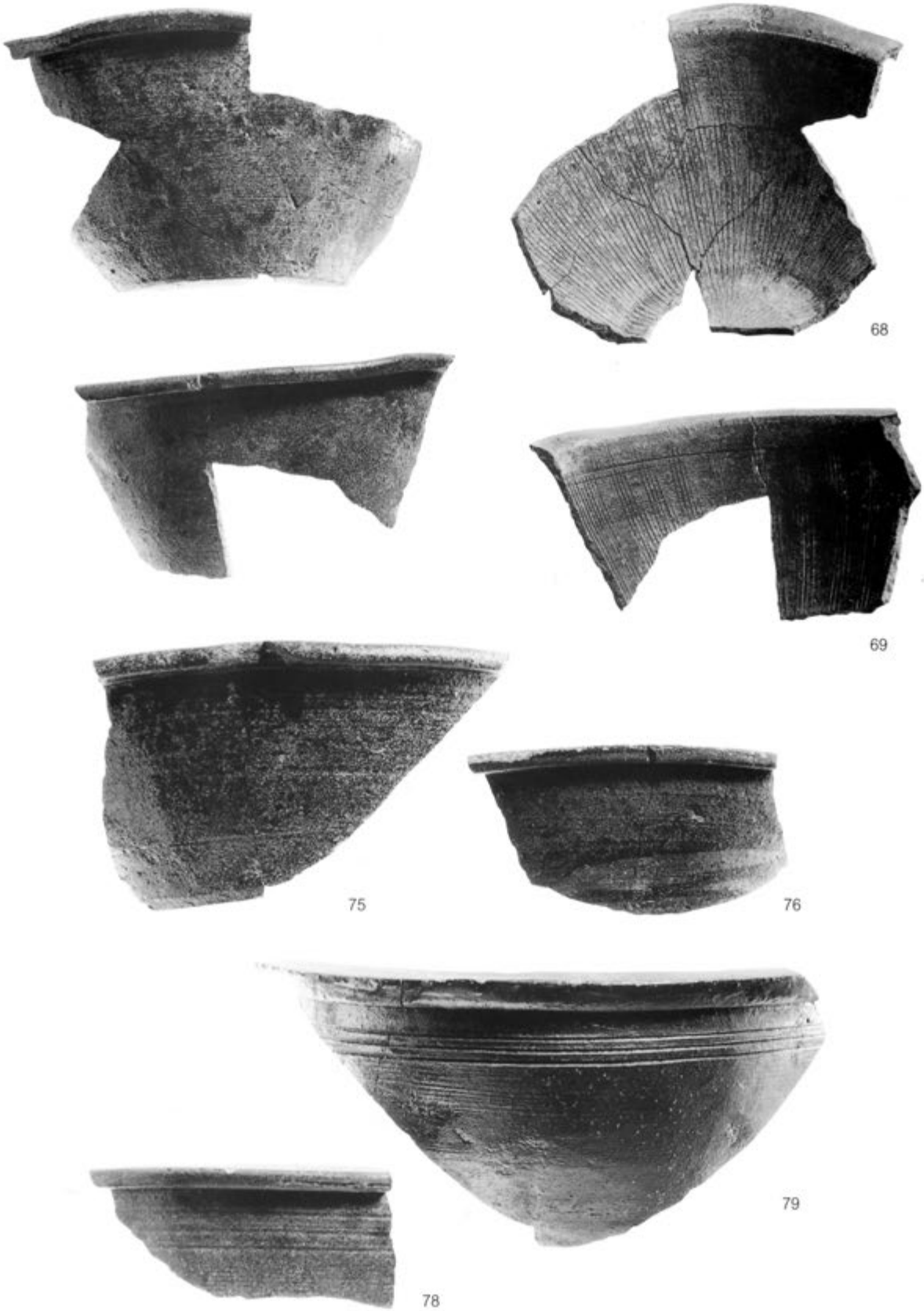
陶器2（摺鉢）

77

74

陶器3（摺鉢・捏鉢）

図版14

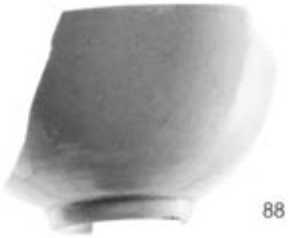


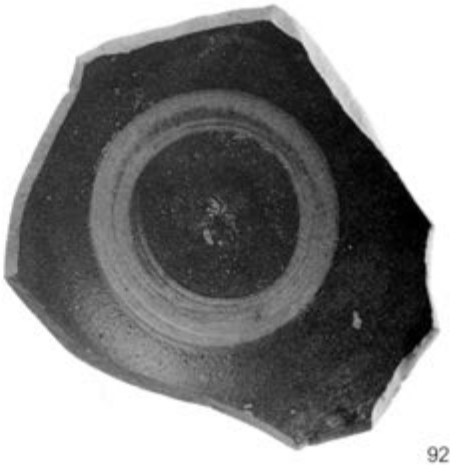

陶器4（摺鉢・捏鉢）

陶器5（壺・植木鉢）

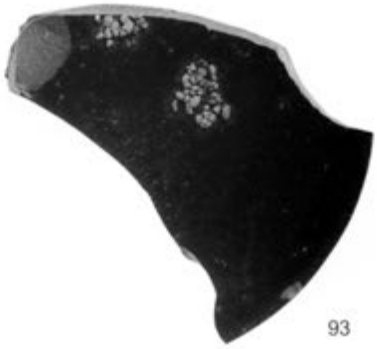
図版16

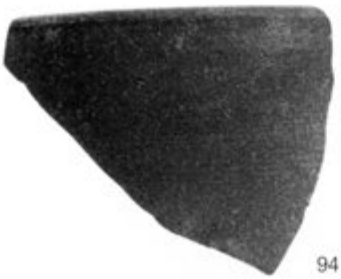
89


88


92

91

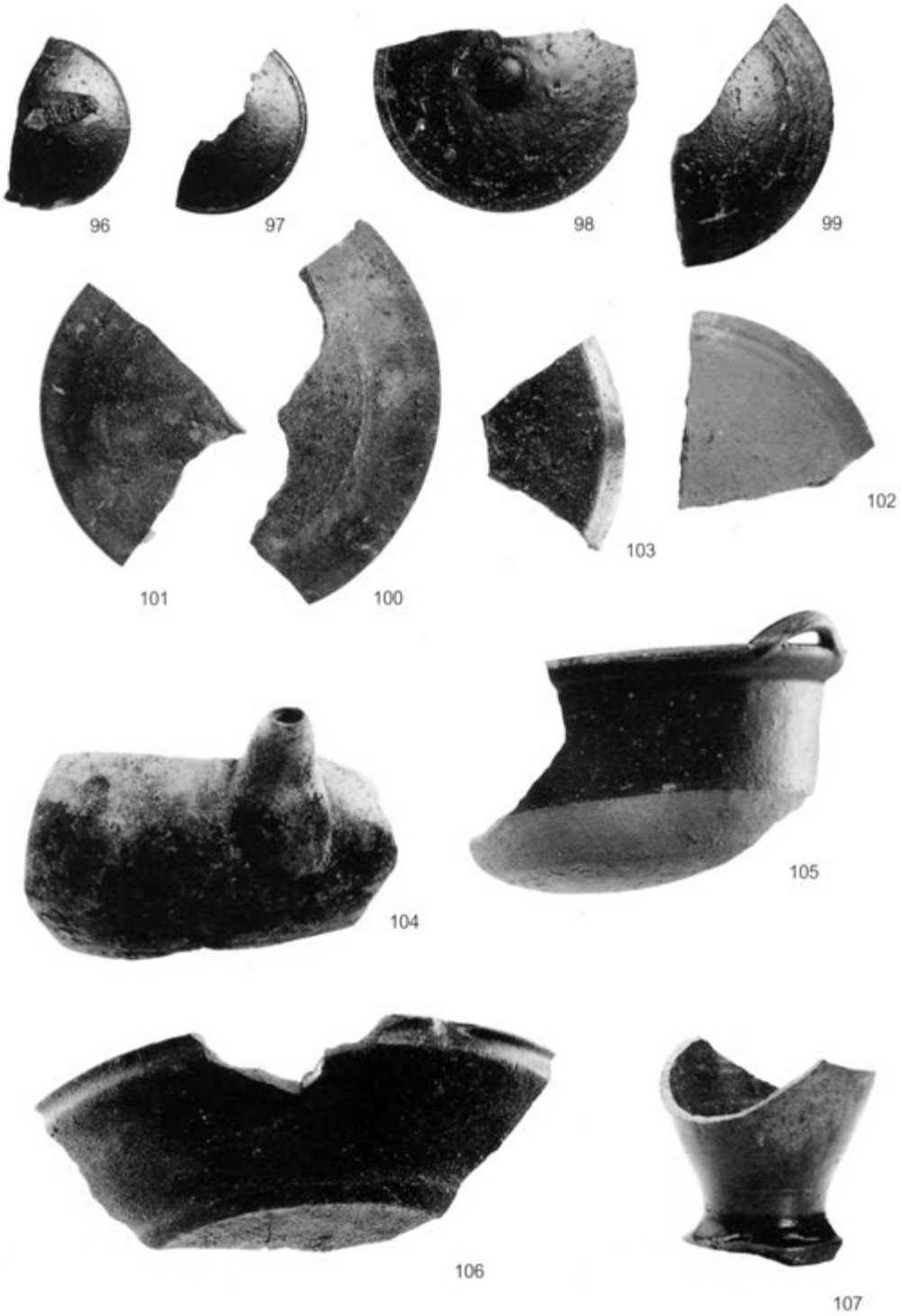

93


94

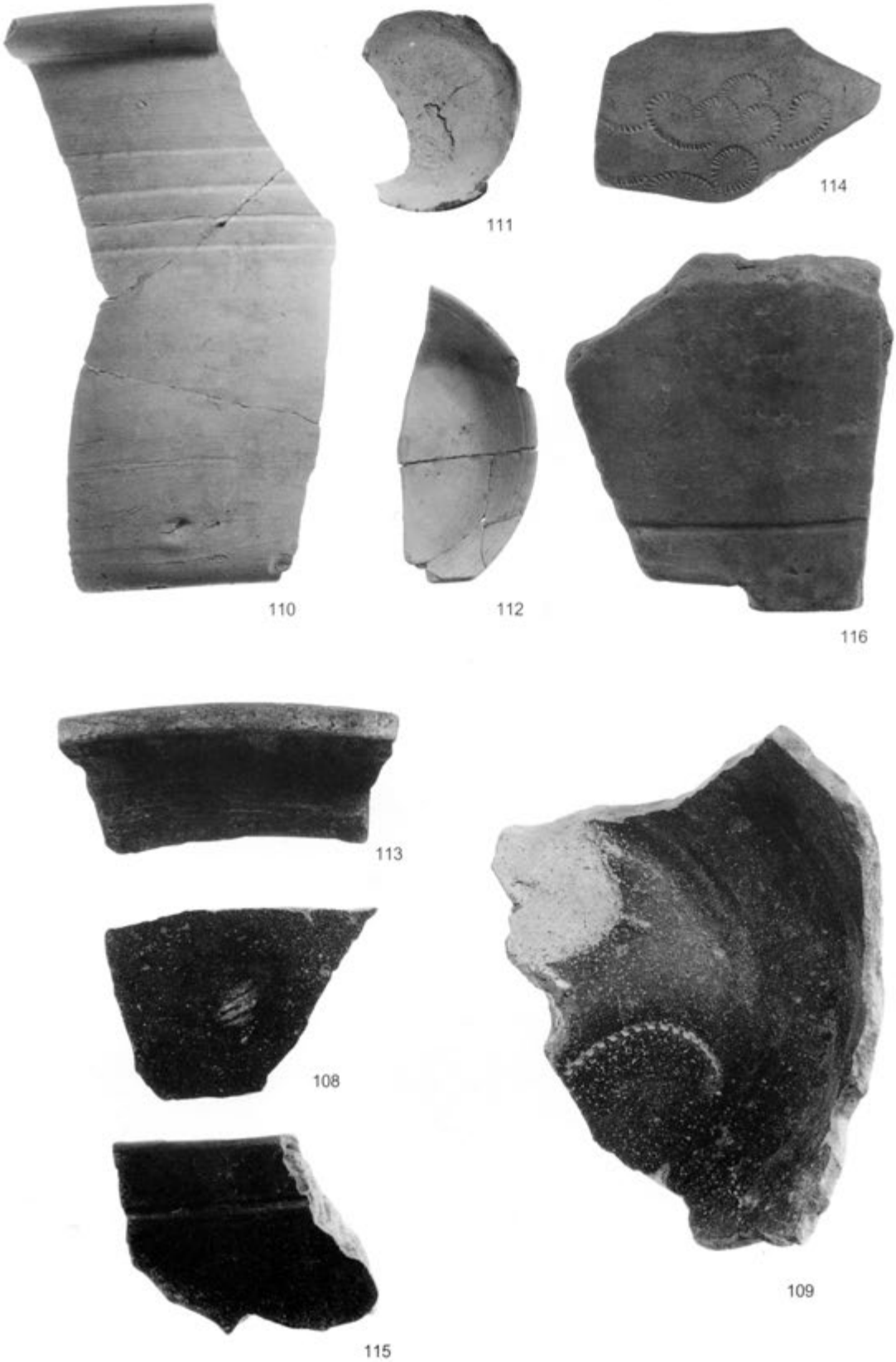
90

95

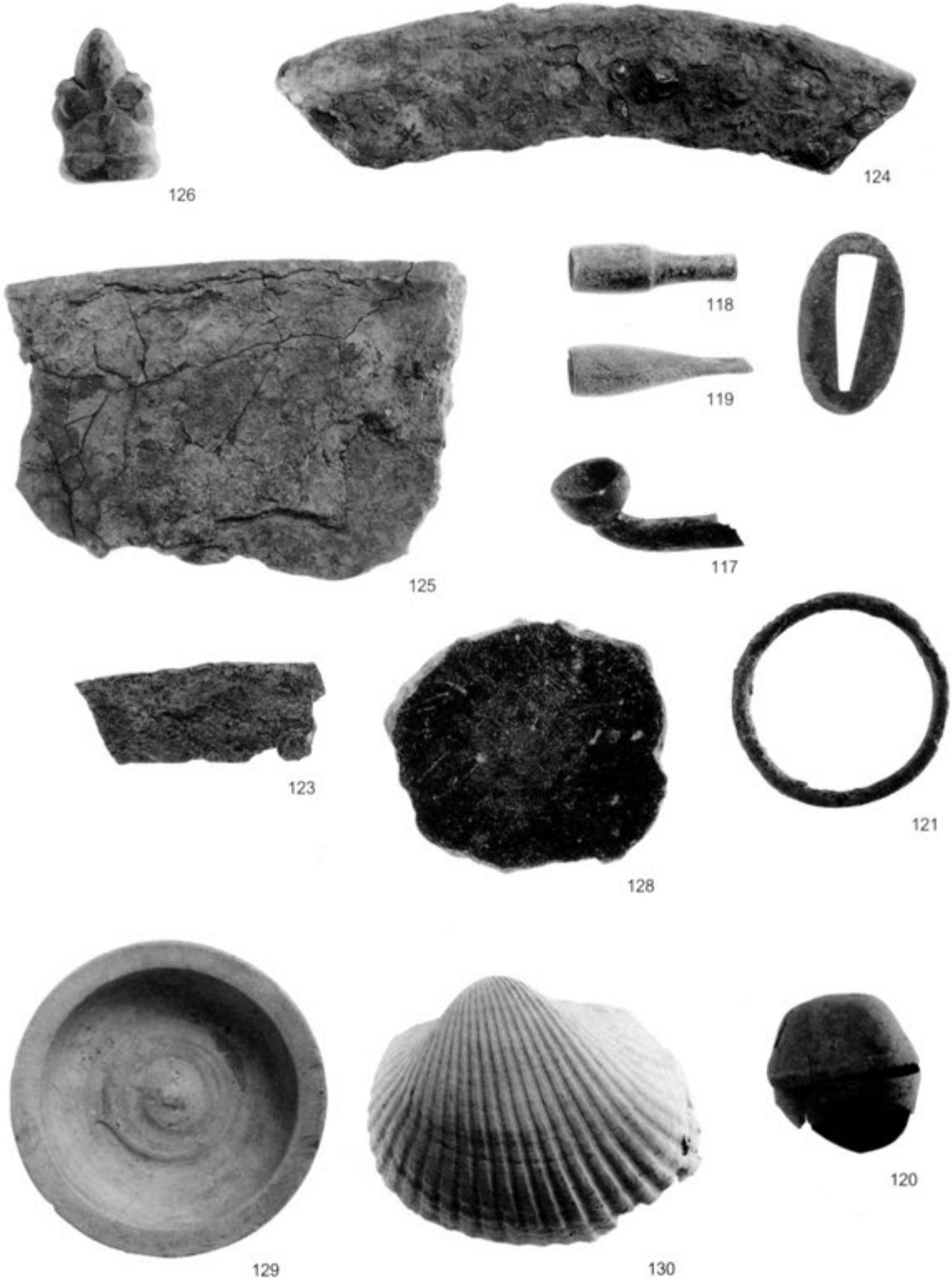
陶器6（碗・その他）




陶器7（蓋・土瓶・その他）




陶器8　土師器・瓦器・瓦




金属製品・その他

# あとがき

一ノ谷遺跡には寺院跡の伝承が残っていたことから，確認調査を実施することになった。墓（跡）群が発見されるのではないかと，バックホーのバケットの動きを見つめながら，内心ドキドキしたものである。全面調査に入ると，眼前の自動車道の橋脚の上からカラス達が心温まる（？）声援を送ってくれ，現場の雰囲気は一層盛り上がっていった。

今回，報告書を作成するにあたって，１点の遺物から教わることの多さを改めて実感するとともに，遺跡周辺の歴史に対する認識不足も改めて痛感することになった。柱穴内から煙管が出土した時，寺跡と結びつかずに頭を悩ましたが，周辺の集落に煙管作りの名人がいたことを知ることとなり，この難問も氷解した。この集落で製作された煙管も，江戸時代を通じて西目街道沿いで開かれた市を賑わしたのだろうか，と想像を膨らます。

一ノ谷遺跡の発掘調査は，隣接する永迫平遺跡との２現場に分かれての実施に加え，担当者の経験が浅かったことも重なって遺跡の性格を十分に咀嚼したとは言い切れない。多くの方々から叱責をいただければ幸いである。

最後に，発掘調査を実施するにあたって，多大なご理解と御協力いただいた伊集院町教育委員会をはじめ，松元町・伊集院町の発掘作業員および難解な図面に立ち向かい奮闘してくださった埋蔵文化財センター整理作業員の方々に心より感謝申し上げます。

発掘作業員　天野豊子　有村彰子　池上優子　伊知地和子　井田ヨシ子　今村良子　請園ひとみ
内鈴子　内ノブ子　大石律子　大山カツ子　金里美恵子　上四元イチ　上四元千留子
上四元フサ子　上四元まゆみ　川口貞子　川口ヨシ　川畑富美子　木佐貫栄治　北村恵子
小正由美子　駒走優子　坂之上いつ子　坂之上トシ子　坂之上レイ子　下柿元照美
新福静子　新山久子　田中真由美　堂脇なおみ　中園良子　新穂和子　新穂春深
西カズ子　西カツエ　原之園より子　東博美　堀内朗子　松田繁　松永順子　宮下マキ子
村中康子　森園カツヨ　森園キミ　横内幸子　吉海江栄子　吉冨睦子　吉松廣美
吉満ヒロ子　吉村レイ子　若松スズ子
整理作業員　岩城カヨ子　江口正子　槐島孝子　齋藤千鶴　鮫島みどり　田ノ上輝美

（五十音順・敬称略）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（31）
南九州西回り自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
一ノ谷遺跡（いちのたに）
２００１年３月
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
TEL 0995－65－8787
印　刷　株式会社　トライ社
〒892-0838 鹿児島市南林寺町12－6
TEL 099－226－0815